# 幻の神州一族

志茂田景樹

角川文庫

幻の神州一族

たしかにそれは猿人だった。コナラの林の中で、長い体毛に全身を覆われた怪物が全裸の女を襲っていたのだ。

人跡まれな安曇野の奥地。鹿爪神四郎はこの山奥で育った。学校へも通わず、亡父から剣と手裏剣の術を教わった。教えた剣術は〝シノムラの剣〟、シノムラとは忍びの連の略だ、父はそれしか説明しなかった。

神四郎が今は無人の生家を訪ねる気になったのは、二年間の都会生活に疲れたのと、「おまえはシンシュウ一族の統領になる身だ」と言われて育ったことの意味を知ろうと思ったからだった。

安曇野の奥深く踏み入った彼は、猿人につづいて奇怪な集団に出会った。やがて彼は、記紀の昔から歴史の地下に生きる一族の秘密を知るのだが…。


月刊雑誌のイメージを変える
ニュータイプの文芸誌

MONTHLY KADOKAWA
月刊カドカワ

毎月5日発売／定価490円


カバー　中村成二

幻の神州一族

志茂田景樹

角川文庫　緑　五九九

—6—

380


ISBN4-04-159906-7 C0193 ¥380E 定価380円



角川文庫
志茂田景樹作品集

鬼火島伝説
新・犬神伝説
騎馬軍団伝説
滅亡師 1
幻の瓜生島伝説
幻の神州一族



カバー　旭印刷

# 幻の神州一族

志茂田景樹

角川文庫 6327

幻の神州一族

志茂田景樹

角川文庫
6327

# 幻の神州一族

志茂田景樹

角川文庫 6327

# 目次


プロローグ　五
第一章　怪盗団の正体　一四
第二章　妖美（ようび）な肉林　六〇
第三章　卍（まんじ）の家　一一〇
第四章　滅びの鐘　一六〇
第五章　相姦（そうかん）絵図　二〇〇
第六章　最後の審判　二五〇
エピローグ　二七〇
解説　安岡旦　三一〇

# プロローグ

——月が出ていた。

鹿爪神四郎は、月あかりを頼りに、林のなかを歩いていた。

コナラの林だった。

神四郎が歩く足音のほか、なにも聞こえなかった。

森閑としている。

夜更けだったが、不気味さはなかった。暗い静寂の世界は、安らいだ雰囲気に包まれていて危険を感じることがなかった。

神四郎にとっては、むしろ都会の喧騒さのほうが危険きわまりなかった。種々雑多な人間が棲息し、それぞれがなにを考えているのかわからず、いつ胸元に刃を突きつけられてもおかしくない世界——それが都会だった。

それにひきかえ、いま歩いている世界は、なんと安閑としていることだろう。

神四郎は、月あかりに照らされた世界を、しみじみとした感慨をもって見わたした。神四郎

の胸に、母親の乳を吸っている赤ん坊が抱くであろうような思いが広がっていった。
母なる地、へもどってきた、と思う。
「あっ！」
神四郎は、かすれた叫びをあげて、立ち止まった。
前方を裸の女がよぎったのである。
女は、長い髪をなびかせて、樹木が密生して月あかりの届かないところへ逃げ込もうとした。
女のあとを、黒い人影が追った。
黒い人影は、あっというまに女に追いつき、とりおさえた。
女は、悲鳴をあげた。
（人間ではない！）
神四郎は、黒い人影に目を凝らした。
十四、五歳の少年のような体型で、ずんぐりして見えた。手が長かった。神四郎は、はじめ、身長の低いおとなかと思った。
しかし、黒く見えたのが、そのような色の服装のせいではなく、体毛のせいだとわかったときに、はじめて人間ではないと悟ったのである。
猿に似ていた。
体型からも、大きさから言っても、日本猿ではなかった。チンパンジー、いや、柄のちいさなゴリラの感じがする。



しかし、走り方や、女をとりおさえたときのかっこうは、類人猿のものではなかった。
（猿人）
という言葉を、神四郎は、とっさに思った。
猿人、というしかない怪物は、裸の女をおし倒した。女は、あらがって叫んだ。怪物は、女の長い髪をつかんで、ひっぱった。
悠長に見ている場合ではなかった。
神四郎は、
「こらーっ！」
と、気合のように叫びながら駆けだした。
猿人は、女に馬乗りになっていたが、神四郎に顔を向けると、吠え声のような声を発した。
白い歯が月光に光った。
神四郎は、不気味な思いにとらわれたが、かえって闘志を燃やした。
その神四郎の前に、さらにふたりの猿人が立ちはだかった。
「おまえたちは、何者だ！」
神四郎は、さすがにおびえた。
ウグ、グッ、グッ……

猿人たちは、歯をむきだして、にごった声を出した。
威嚇のうなり声のようであった。
猿人たちは、長い腕を逆八の字に広げて、神四郎に迫った。
双眸が青っぽい輝きを放っていた。
神四郎は、猿人たちが飛びかかってくるのを待った。
ウグゥ！
猿人のひとりが、跳躍して飛びかかってきた。
神四郎は、その猿人の下腹部を蹴りあげていた。
急所の位置は人間と変わらない、と考えたからだった。
猿人は、奇声をあげて倒れた。
手加減は、したつもりはなかった。殺さねば殺される——神四郎は、必殺の一撃を加えたつもりであった。
が、倒れた猿人は、すぐにむくりと起きあがると、
ケケケ……
と、歯をむいて笑った。
牙があった。
もうひとりの猿人は、仲間の猿人が倒されたとき、ひるみを見せたが、その仲間が起きあが



ったのに力を得て、神四郎に飛びかかった。
神四郎は、猿人の飛びかかる勢いを利用して、投げ飛ばそうとした。が、猿人は、神四郎の胴を長い腕で締めて、投げ飛ばされるのを防いだ。
ものすごい力だった。
神四郎は、息がつまってうめいた。このままでは気が遠くなり、背骨を折られてしまう。
神四郎は、全身をバネにして跳躍し、勢いをつけて倒れた。猿人は、地にしたたかにうちつけられて、神四郎から手を離した。
神四郎は、手近の樹木の枝に飛びつくと、回転して、枝から手を離した。
神四郎の体は、おどろくほど身軽に舞って、その枝に立った。
神四郎は、さらにその上にある枝に、おなじ要領であがった。
猿人たちは、気を呑まれて神四郎を見あげた。したたかに地にうちつけられて、ふつうの人間ならもだえ苦しんでいるはずの猿人は、けろっとしていた。
「ばけものめっ！」
神四郎は、唾を吐きかけた。
猿人たちは、顔を見あわせて、
ウグッ、グッ……
と、声を出した。

どうしようか、と思案しているようすだった。
神四郎は、猿人に襲われている女のほうに目をやった。そちらの状態を窺う余裕が生まれていた。
猿人は、女の乳房のひとつに顔をおしつけていた。猿人の下肢は、女の下肢に密着していた。
猿人の腰は、動いていた。
女は、すでに気力を失っているらしく、抵抗している気配はなかった。
神四郎は、猿人が女を犯している光景を、つかのま、遠い世界で行われていることのように見た。
ウグ、グッ……
真下で、猿人が声を発した。
猿人たちが木を登ってくるところだった。
神四郎は、ズボンのポケットに入れていたナイフをとり出した。
刃を出した。その刃の部分を右手の指で強くはさむと、投げる構えをとった。
木を登っている猿人たちは、警戒して、低いうなり声をあげた。
神四郎は、ナイフを女を犯している猿人の背中に向けて投げた。
木を登っている猿人が、
キーッ！



と、叫んだ。
仲間に危険を知らせる叫びのようだった。
女を犯していた猿人は、顔をあげて手を振った。
ナイフは、その手によって振り払われて、近くの木の根元に転がった。
神四郎は、あっけにとられた。
あのナイフを素手でたたき落とすのは、不可能に近いことだった。それを猿人は、やすやすとやってのけた。
神四郎は、おびえた。
木にとりついている猿人たちは、下の枝まできていた。
遠くの空に、稲妻が走った。
しばらく経って、雷鳴が聞こえた。
猿人たちは、動きをとめた。雷鳴に神経をとがらしているふうに見えた。
雨が降り出した。稲妻がとどろいた。
下の枝に手をかけていた猿人たちは、頭を幹におしつけた。すくんだようだった。
雨は、急速にはげしさを増した。
稲妻が真上の空を裂いて、雷鳴が天地を揺るがすほどにとどろきわたった。
猿人たちは、奇怪な叫びをあげて、地上に飛び降りた。女を犯していた猿人も、女から離れ

て立ちあがった。
猿人たちは、地を這うようにして暗闇にまぎれて消えた。
女が起きあがった。
神四郎のほうを、一瞬、見あげたようだった。
「おい、だいじょうぶかっ！」
と、神四郎は声をかけた。
女は、なにも答えず、雨にうたれた長い髪をひと振りすると、林の奥へ駆けた。
「待てっ！」
神四郎が呼び止めたときには、女の姿は闇に溶け込んでいた。
雨があがった。
山の天気は、変わりやすいものだが、ほんとうに裏と表をひっくりかえしたような変わり方だった。
月が出た。黒雲がふきちぎれるようにして、東方面へ走っていた。
やがて、視界から雲が消えて、月光が林に降り注いで、雷雨がくる前のように、あたりの景色が淡く浮かびあがった。
静かな世界だった。
おだやかな気配が充ちて、神四郎はいままでのことが信じられないここちになった。キツネ



につままれていたように思える。
神四郎は、右手を月光にさらした。
掌に、格闘したさいにむしれた猿人の毛がいっぱいついていた。
黒っぽい毛だった。
長さは、六、七センチあった。
神四郎のいる林は、安曇野の奥地にあたる。長野、富山の県境に連なる高嶺の東部に位置して、人跡の少ない樹林が広がっている。
しかし、猿とも人ともつかないけものが棲んでいるようなところではなかった。
五百年、千年も昔の話ならいざ知らず、いまは鹿や猿の姿もなかなか見かけることのなくなった時代である。
神四郎は、掌にへばりついている毛を見つめた。
いったい、あの猿人たちはどこから現れたのか、猿人に犯された裸の女は何者だろうか——
神四郎は、ぼんやりと思ってため息をついた。
月光に浮かびあがっている世界は、薄闇のなかで見る淡彩画のようにひっそりと息づいていた。
神四郎の育った世界だった……。

# 第一章　怪盗団の正体

## 1

神四郎は、木から降りて歩き出した。
二年の都会生活は、神四郎をくたくたに疲れさせていた。
神四郎は、きのうまで東京の新宿の安アパートで生活していた。
おととしの初夏に上京するまでは、炭焼きをしていた。いま月あかりに浮かびあがっている林は、神四郎が炭の原木を採集してきた林でもあった。
いまの世で炭焼きは、職業として成立しない、と考えている人が多いかもしれない。
しかし、茶道や日本料理の関係者のなかには、良質の炭を欲している者が少なくなく、目立たないながら、根強い需要がある。神四郎が焼く炭は、火持ちがよく、強い火力が得られるので、茶道関係者のあいだではよく知られていた。
神四郎は、老いた父とふたりで炭を焼いていた。
その父が急死した。
それと時をあわせたように、神四郎父子の焼いていた炭を、東京から仕入れにきていた薪炭



商が、姿を見せなくなった。
神四郎は、父の葬式をすませると、上京した。
あてもなく上京したのは、母のよし恵が東京にいる、と聞いていたからである。
よし恵は、神四郎が八歳のとき家出をしてしまった。男ができたためだ、ということだが、神四郎はくわしいことはなにも知らなかった。
父は、母については語ることがなかったし、神四郎にその消息を話してくれる人間もいなかった。
神四郎は、父に死なれたあと、天涯孤独の身の上になっていたのである。
どこかへ行く、となったら、母がいるかもしれない東京しかなかった。
東京で、神四郎は、ガードマンになったり、道路工事の現場で働いたり、長距離トラック便の助手になったりして、その日暮らしの日々を送りながら、母を捜した。
母については、鮮烈な思い出がある。
夜中、父と母が争っていた。
父は、母を裸にして、なぐる蹴るの乱暴を行っていた。母は、外へ逃げ出した。
神四郎は、母を追った。
母は、河原へ逃げた。
「お母ちゃん」

神四郎は、流れのなかへ入り、髪を振り乱しながら、自分の体に水をかけだした母に声をかけた。

雨は降っていなかったが、ときどき、雷鳴がとどろいて稲妻が真っ暗な空を裂いた。

よし恵は、長い髪を濡らし、目を吊りあげて、わけのわからぬ叫び声をあげだした。

稲妻が夜空をひき裂いた。一瞬、よし恵の顔は、稲妻に映えて、蒼白く浮かびあがった。

神四郎は、母の顔が光彩を放ったのだ、と思い込んだ。

凄艶、という言葉を、当時の神四郎は知るよしもなかったが、もし、知っていたら、その言葉を思い浮かべたろう。

ぞっとするほど、美しかった。

神四郎は、おびえて、息を呑んだ。

稲妻が消えたあと、母は高笑いした。

狂ってしまったのか、と神四郎は思い、流れのなかへ入って、

「お母ちゃん！」

と、叫んだ。

「神四郎！」

よし恵は、八歳になったばかりのわが子の名を呼んだ。

「おまえは、シンシュウ一族の統領になるよう生まれついているのよ。よく、おぼえておきっ、忘れてはだめよ！」

母は、甲高い声で言った。

その言葉は、いまでも神四郎の頭のなかに響くように残っている。

ただ、シンシュウ、というのは、信州なのか、それとも、神州という字をあてるのか。いまもってわからないままだった。

よし恵が家出したのは、その事件の二、三日後のことで、神四郎は、はじめ山菜を採りに里の近くの山へ行ったと思い込んでいたものである。

父が、そう言ったからだった。

しかし、何日経っても、もどってこなかったので、家出したことに気づいた。父は、母がいなくなってからというものは、もともと無口だったが、貝のように口を閉ざすことが多くなり、むっつりとした表情であらぬところを見すえて、何時間も炭焼き小屋の裏にたたずむことも何度かあった。

一度、神四郎は、そうしているときの父に、

「シンシュウ一族ってなんだ？」

と、訊いたことがあった。

「……」

父は、ゆっくりと顔を神四郎に向けて、首を振った。

こわい眸の色をしていた。悲しみと憎しみとがないまぜになって、ゆれているようであった。

それ以上、神四郎は訊けなかった。

父は、それから十八年後の夏の夜に息をひきとったのである。

その夜も、雷が鳴っていた。

上京して、神四郎がまずたずねたのは、神四郎父子が焼いていた炭を買いつけていた薪炭商だった。

蒲田にある店を探しあてた。

しかし、その店は、火事になってつぶれていた。

薪炭商は、妻とともに焼死していた。

ひとり娘がいた。まゆみ、と言った。そのまゆみは、火事のあと行方知れずになっていた。

薪炭商に聞けば、母の消息がわかるのではないか、と期待していた神四郎はがっかりした。

とほうに暮れて、ドヤ街に宿をとり、同宿の男から紹介された仕事をするようになった。日雇いの肉体労働だった。

体には、自信がある。

山に生まれ、山に育った神四郎は、猿のように木に登れて、カモシカのように岩場を駆けあがれた。

ロープなしで、オーバーハングしている岩崖を登ることもできた。



神四郎がもっとも得意とするところは、自然児として山野を走ることではなくて、武術だった。

亡父から仕込まれたものである。

剣と手裏剣の二術を、神四郎は神技と形容するしかないほど、完璧にわがものにしていた。

亡父は、どこでだれから、その二術を教えられたのだろうか。母が家出してからは、なにかがとり憑いているのではないか、と思うほどの入れこみようで、神四郎に剣と手裏剣の二術を教えだした。

その稽古のときだけは、亡父は、若者のように精気をみなぎらせ、狂気に駆られたふうになった。

その剣も手裏剣も、少し妖術がかっていた。

剣のほうで言えば、間あいを詰める、とか、青眼に構える、とかいった剣の常道とも言うべきものはなにもなく、跳躍し、突進しながら、抜きうち的に斬りつけるのである。

亡父は、死ぬ直前まで、おどろくほど身軽に跳躍した。

木の枝に跳躍し、自分の体重で枝がしない、その枝がもとにもどるときの反動を利用して、地上から五、六メートルのところに跳ねることができた。

亡父は、空中でトンボがえりをうち、剣を抜いた。

亡父の体が地上に降り立ったとき、いっしょに一刀両断にされたキジが落ちた。枝から枝へ

と舞ったキジを斬ったのだった。

手裏剣のほうでは、闇のなかを走るイノシシを三十メートルも離れたところから仕止めることができた。急所をはずさなかったからである。

「――わしがおまえに教えているのは、シノムラの剣だ」

神四郎が二十歳の春、亡父は、そう言った。

「シノムラ？」

「忍びの連を略した言葉だ」

「忍びの連、ってなんだ？」

「……」

亡父は、説明しようとはしなかった。

そのころには、神四郎の剣と手裏剣の腕前は、亡父のそれをはるかに超えていた。

「もう教えるものはない」

その年の暮れに、亡父は神四郎にひと振りの刀を渡して言った。

「暗闇の剣だ。抜いてみろ」

神四郎は、その刀を抜いた。

刀身が黒光りしていた。

見ているだけで、心が冷えてくるような輝き方だった。



「暗闇の剣……」

神四郎は、刀身を見つめているうちに、熱いものが胸のなかに湧き起こったのを意識して、不気味になった。

胸が血汐のたぎりのような感じで熱くなっているのに、心は逆に冷えびえとしている。

神四郎が不気味になったのは、自分の心の冷えようが暗闇の剣にこもる殺気のせいではないか、と思ったからだった。その殺気に感応して、自分はだれかを斬りたがっている。

神四郎の胸に湧き立っているものは、その衝動だった。

じっさいに、神四郎は、殺気立った眸の色になって父を見すえた。

「寄こせ」

父は、苦笑して、神四郎から暗闇の剣をとると、鞘におさめた。

「いつか、これを使うときがこよう」

「……」

暗闇の剣が鞘におさまってみると、神四郎の胸のなかから、だれかを斬りたいという衝動はなくなっていた。

神四郎は、ほっとした。

「庭の楠の洞にしまっておく。わしがよいと言うまで、とり出してはいかん」

亡父が、よいと言う時は、ついにこないままに終わった。

東京へ出て、神四郎は、暗闇の剣のことはまったく忘れていた……。

## 2

――シノムラの剣、という妖しい剣法を完全に修めたことも、神四郎は忘れていた。

都会での肉体労働は、ただ頑健な体を持っているというだけで充分であった。猿や鹿のような敏捷さも、都会生活には不要だった。

山にいるつもりで、へたに敏捷な動きを見せると、うす気味わるがられた。

神四郎は、働いて賃金をとるのに必要なだけの力を出した。

しかし、別の面で稀有の力を発揮した。

それは常人離れした知識の吸収力だった。抜群の記憶力と理解力がその裏づけになり、神四郎の知識量は、ネズミ算式に増えていった。

その源泉は、読書だった。

神四郎は、義務教育を満足に受けていなかった。

公立の小、中学校まで通うのに片道、数時間を要したためもあるが、なぜか亡父は神四郎が通学することをきらったものである。

担任の教師が通学をうながしに何度か訪れた。そのたびに、亡父は、

「必要な教育は、わしが行う」



と言って、とりあわなかった。

亡父は、読み書き、算盤は、ひととおり教えてくれたものの、それだけのことだった。

上京したとき、神四郎の学力は、国語、算数の面でやっと小学校の高学年ていどで、他の科目の学力はゼロに等しかった。

それが、二年経つか経たないうちに、古典を読解し、一流私立高の入試問題に出る方程式を解く力がついていた。

まったく知らなかった英語、ドイツ語なども、新聞、雑誌にひんぱんに出てくるものはわかるようになっている。

神四郎は、つまり、二年以内で一般社会人として必要な知識にあまるものを、身につけてしまったのだった。

神四郎は、働きながら、母のよし恵を捜した。

いまの母がどんな顔と姿をしているのかは、知らない。神四郎にとっての母の顔と姿は、暗闇の流れのなかに立ち、稲妻に一瞬浮かびあがった凄艶な顔とロウ人形のような裸姿であった。

神四郎は、休日や、働いている以外の時間を、人ごみのなかを歩いて母を捜しまわった。そのあたりは、まだ幼児が母親にはぐれて捜すような幼さだった。

神四郎自身も、そのような捜し方で母を見つけ出すことは、宝クジにあたるようなものだ、とすぐに悟った。しかし、それでも、そうして捜し続けた。

どんな方法であっても、捜していさえすれば、いつかめぐりあえる、と信じることで、神四郎は自分をなぐさめていたのである。

都会での神四郎は、汚れを知らなかった。人を信じ、その言うことを疑わなかった。素直で、柔順な青年だった。

裏ぎられても、恨みに思わなかった。

神四郎は、そのような日々を送るうちに疲れてしまった。それなりにすれっからしになれればよかったのに、神四郎の心は上京したときと変わらず、純なままだった。

純な心は、ついに都会の生活とかみあうことができずに、病んだ。神四郎は、仕事を休み、部屋に閉じこもるようになった。

神四郎は、生まれ故郷を恋しがるようになった。その胸に、いつも一点、燠火(おきび)のようなものが残った。

それを意識するとき、神四郎はいつも暗闇の剣の黒い輝きを思い浮かべていた。自分の胸に潜む、その燠火を神四郎は怖(おそ)れた。

その燠火が胸を熱す火になるとき、自分は思ってもみなかった世界に生きることになるのではないか——そんな予感がしたのである。

神四郎は、ある朝、決然と部屋を出て生まれ故郷へ向かった。矢も楯(たて)もたまらなくなるような帰郷の衝動に駆られて、もう自制できなかったのである。



胸のうちの燠火がぼっと熱した気配があった。

神四郎は、安曇野(あずみの)の林と畑が混在している地帯を歩いているときに、自分は暗闇の剣をとり出したくて生家をめざしているのではないか、と思った。

ふるさとへ帰りたい——たしかに、帰心矢のごとしではあったが、それ以上に暗闇の剣が呼んでいるような気がした。不可思議な力にひき寄せられて、足が向かう。

そんな感じが強くて、なぜか神四郎は自分が不気味だった。不気味でいながら、その自分に興味があった。

暗闇の剣に吸い寄せられるように生家をめざす自分は、ひとつの本能に支配されているのかもしれない。そう神四郎は、はっきりと意識したわけではないが、暗闇の剣のなかに父祖の姿が映し込まれているような思いになり、一刻も早く暗闇の剣を抜き放ってみたいという衝動が、安曇野に入ってから起こった。

ところが、じっさいに亡父と炭焼き用の原木を採集していた林に入ってから、その衝動は、いったんおさまったのだった。

なつかしさだけが胸に残った。

生家は、もうすぐである。神四郎は胸をときめかして、静寂で、平和な世界を歩いていた。

そのときに、裸の女が現れ、猿人としか形容のできない生物が裸の女を襲ったのだ。

神四郎は、さっき目撃したこと、猿人たちと闘ったことなどを振りかえりながら、足を速め

た。

生家まで、神四郎の足であと数分だった。

その生家を目前にして、神四郎の胸に、さっきの衝動がよみがえった。

「――暗闇の剣」

神四郎は、つぶやいて、立ち止まった。

暗闇の剣を抜き放って、闇のなかの敵に向かって対峙している自分の姿が思い浮かんだのである。

闇のなかの敵は、とてつもなく巨きかった。

神四郎は、生家へ歩いた。

生家跡、といったほうが正しかった。

なかば藪と化し、そのなかに朽ちた、傾いた屋根が見えた。

神四郎の生家は、大きなものではなかった。板の間に炉を切った部屋がひとつあるだけで、言ってみれば、掘っ建て小屋だった。

その生家の東に、炭焼き小屋と窯があった。そこも藪になっている。

神四郎は、生家のまわりを歩いていて、山奥の人の住まなくなった廃屋が崩壊する速さとすさまじさに胸をつかれた。

巨大な楠は、二年前より枝を繁らせていた。蔓草がまつわりついていて、洞は蔓の葉によって隠蔽された状態になっていた。



神四郎は、蔓の葉をかきむしって、洞に手を突っ込んだ。

深く手を突っ込んで、

「あった」

と、つぶやいた。

とり出してみると、二重三重に包んだ油紙は破れて腐り、三か所に巻いてあった紐も、腐ってとけていた。

神四郎は、紐をとり、油紙をひきさいた。

暗闇の剣は、鞘や柄は粗末だった。刀身そのものは、古い時代に鍛えられたものにちがいないが、鞘や柄は、時代を経て何度かとり替えられているのだろう。

神四郎は、鞘を払った。

刀身を月光に透かして見た。

冷えびえとした、黒い輝きに、神四郎の目は細まった。

神四郎の胸に、殺気がこもった。

なにかを斬りたい――神四郎は、いきなり跳躍すると、剣を振るった。

楠の枝が落ちた。

床柱に使えそうなほどに太い枝だった。

見事な斬れ味だった。神四郎は、落ちた枝の斬り口を足の甲でなでた。薄笑いが浮かんだ。

神四郎は、一・八メートルの身長に、七〇キロの体重を持っている。ひきしまっているので、一見やせて見えるが、裸になると、筋骨たくましかった。

その体に、端正な顔が乗っている。おとなしそうな相だった。

が、いま斬り落とした枝を見おろして薄笑っている、その顔は、あかるいところだったら、見る人をひやりとさせる凄味に充ちたものであろう。

神四郎は、月あかりに刀身をかざした。

そのときだった。

楠の上のほうから、笑い声が降ってきた。

よく響く高笑いだった。

「だれだっ？」

神四郎は、顔をゆがめて見あげた。……

3

——笑い声がやんだ。

つかのま、沈黙が支配した。

神四郎は、楠のそばから離れた。



ふわっと黒い影が地上に舞いおりた。神四郎は、とっさに猿人かと思い、暗闇の剣で突き殺そうとしたが、黒い影は手をあげて、

「突くなよ。こっちに害意はない」

と、明瞭な発音で言った。

黒装束の男だった。

「だれだ？」

「おれか、やまと赤軍の首領だ」

「やまと赤軍？」

神四郎は、訊きながら、いつでも相手を突き殺せるように右足に力をこめた。二秒あれば、跳躍して相手の脳天を突くことができる。

「盗賊をなりわいとしている集団の首領だ。名前はしばらく伏せておきたい。まず、その剣を鞘におさめろ。そいつは、持つ者にやたらに斬りたがる気を起こさせる危い剣だからなあ」

やまと赤軍の首領と名乗る男は、そう言うと、顔を上向けて笑い出した。

豪傑笑いだった。神四郎があたりをはばかって見まわしたほど、その声は、よく響いた。

神四郎は、胸のうちにこもっていた殺気が、そがれていくのを意識した。

「いい加減で、鞘におさめてくれ」

やまと赤軍の首領は、笑いをやめながら、暗闇の剣を指差した。

神四郎は、うなずいて剣を鞘におさめた。
「この剣のことを知っているのか？」
「暗闇の剣」
やまと赤軍の首領は、答えた。
神四郎は、首領の顔に目を凝らした。
蟹のような顔をしていた。双眸は、暗い輝きを宿していた。
「なぜ知っているんだ？」
「おれは、あんたを待っていた」
「待っていたって？　なぜ、おれがここへくる、とわかった」
「仲間が……」
知らせてよこしたからな、と続けて、首領は、うふっ、と含み笑った。
「気持ちわるいやつだな。その仲間というのは、なんだ？」
「あんたの東京での動向を見張らせといたやつよ。やまと赤軍の一員、ということになるがね」
「なぜ、そんなことをした？」
「あんたの親父殿から頼まれたからさ」
首領は、不気味な雰囲気を持っているのに、陽気な声でしゃべった。



「親父から頼まれた……」
「そうだ」
「うそではないだろうな」
神四郎は、ますます目の前の男の正体がわからなくなった。
「現にこうして、あんたのくるのを待っていたではないか」
「いったい、やまと赤軍、というのは、なんなんだ！」
神四郎は、いらだってわめき声で訊いた。
「さっきも言った。盗賊団だ」
「死んだ親父が、盗賊団とつながりがあったなんて信じられない」
「うふ、ふふ……」
首領は、笑った。
「笑うな！」
神四郎は、腹を立てた。
「笑ってわるかった。われらやまと赤軍は、あんたの親父殿が亡くなる直前に組織された。いずれあんたを総帥にいただいて、活動を開始するためだった」
「なにをふざけたことを言う。盗賊団の総帥に、どうしておれがなる。ばかにするなっ」
神四郎は、暗闇の剣を抜きかけた。

「待て」
首領は、手を振って、
「やまと赤軍は、ただの盗みの集団ではない。われらの同胞を苦しめ、殺し、われら一族をこの世から抹殺しようとしてきた、また現にいまもわれらの抹殺をはかっているシノムラと闘うための組織よ」
と、続けた。
「シノムラ？」
亡父から聞いたことのある言葉が出てきたので、神四郎は途中まで抜いた刀身を鞘におさめた。
「そうだ」
「忍びの連のシノムラか？」
「そうだ。あんたは、親父殿からシノムラの剣を仕込まれたはずだ」
「たしかに仕込まれた。そのシノムラとは、なんだ？」
「話せば長いことになる……」
首領は、言葉を途中で切って、口笛を吹いた。
よく通る口笛で、ヒュウ、ヒュ、ヒュ、と妙な節で吹き鳴らした。
「なんのまねだ？」



「……」
首領は、ヒュウ、ヒュ、ヒュ、とまた口笛を吹いた。
そのあと、沈黙した。
神四郎は、背後に密かな人の気配を察知して、振りむいた。
人影が三つ見えた。見ているうちに、闇のなかから湧くように、さらにふたつの人影が現れた。
「やまと赤軍の同志たちだ」
首領は、自慢するように言った。
「シノムラの説明をしてくれ」
神四郎は、首領に顔をもどして催促した。
「おれの知っていることは、シノムラのことのほんの一部にすぎん。シノムラについて精通している人間は、熊爪の翁だが、いま、熊爪の翁は、どことも行き先の知れぬ旅に出ている」
「熊爪の翁だって？」
「あんたの苗字は、鹿爪。熊爪は、われらの一族では、鹿爪に次ぐ家柄だ。まあ、そのことはおくとして、おれの知っていることだけを話す……」
首領は、シノムラについて、概略、つぎのように語った。……

## 4

忍びの連、通称シノムラは、先史時代から日本列島に広く分布し、平和に暮らしていた原日本人の末裔たちが組織した相互扶助団体であるという。

運命共同体、と言ってもよい。

では、シノムラの父祖たちは、どういう民族であったのだろうか。

日本列島の先住民族については、俗書、私史の類を含めて、歴史学者のあいだでは大きく見解が分かれている。決定的な学説は、根拠、裏づけになる決め手のデータに乏しいこともあって、まだないに等しい。

しかし、シノムラの人々が伝承するところによれば、山人族こそ先史時代に日本列島の各所に拠って繁栄を見せていた先住民族であるらしい。

古事記、日本書紀、風土記などの古代文献には、地域によって呼び方は異なるが、山人族らしき民族の消息が断片的ながら記載されている。

熊襲
土蜘蛛
国栖
毛人



などが、それである。

熊襲は、南九州一帯に住んでいたとされる森林狩猟民族で、狗奴国の人を指したという説もある。

土蜘蛛は、東九州一帯の山人の呼び名で、その呼称から穴居民族と考えられたこともあるが、確証はない。

一部で穴居する民もいたのであろう。

国栖は、近畿、大和地方の山間渓谷の民で、狩猟、漁撈によって生活していたという。

吉野地方に国栖という地名が残っているのは、そのなごりである。

毛人は、東日本の森林狩猟民で、アイヌという説もあるが、そうとはきめつけられない。

そのほかに、のちに漢人、韓人と言われた、大和朝廷成立のはるか前に渡ってきたと思われる渡来人も、山人としてあげられる。

彼らは、金属精錬の技術を持っていたから、採鉱できる山に住んだ。

この山人系列のほかに、記紀などの古代史料（大和朝廷資料）において、やはり、異族異民とされてきたものに海人系列がある。

隼人
肥人
越人

粛慎（みしはせ）
蝦夷（えみし）

などである。

隼人は、南九州に住み、南方海洋民族系という推論が有力である。

肥人は、西九州一帯に勢力を広げていた漁撈民族とされている。

越人は、裏日本、粛慎は裏日本北部、蝦夷は、東北に広域にわたって住んでいた狩猟漁撈民で、いわゆる原アイヌ人であろう。

山人系も海人系も、古代にまつろわぬ民とされて差別されたが、これは大和朝廷政権が確立されてからのことで、もともと大和朝廷を樹立した天孫民族側からみてのことである。

〝まつろわぬ民〟は、中央の威令に服さぬ民のことである。

天孫民族が、扶余族、ツングース族系の大陸からおし渡ってきた騎馬民族かどうかはともかくとして、天孫民族以前に日本でいちおう支配民族として栄えていたのは、出雲系民族である。

天孫民族が天津神（あまつかみ）系と言われるのに対して、出雲系民族は国津神（くにつかみ）系と言われる。

国津は、土着の意味をこめた言い方であり、天孫民族からみれば、先住土着民族であった。

出雲系がどのような系統の民族であったかの論議はさておいて、天孫民族からみれば、もと〝まつろわぬ民〟であったにちがいない。

それも、中央に勢力圏を持ち、強力な武力を持つ最大の〝まつろわぬ民〟であったのだろう。



天孫民族は、出雲系を圧迫し、服従させて中央での覇権を確立する。

出雲神話にある国譲り伝説は、出雲系が天孫系に屈服させられた事実を物語るものであろう。

こうして、最大の〝まつろわぬ民〟を大御宝（おおみたから）――臣民にした大和朝廷は、各地の〝まつろわぬ民〟をつぎつぎに退治したり、隷属させていった。

〝まつろわぬ民〟は、山人系も海人系も、人種的な面を除けば、たがいに敵意をむきだしにして争うことなく、日本列島で共存していたという。

山人、と言っても、本来は海を渡ってきた民で、川をさかのぼって山に入り、山の生活をするようになっただけのことである。

〝まつろわぬ民〟が臣民に組み込まれていった時期は、上古の時代であるが、奈良時代に入っても、まだ〝まつろわぬ民〟は残っていた。

隼人と、蝦夷の二民である。

そのうち隼人は、奈良時代に大伴旅人（おおとものたびと）によって討伐され、降服した。

蝦夷も、奈良時代以前から、たびたび討伐を受けたが、反乱をくりかえし、ようやく平安中期にいたって大御宝（おおみたから）（臣民）に組み込まれた。

こうして〝まつろわぬ民〟たちは、中央に服属し、長い時代を経るうちに、隼人、蝦夷が地域住民を指す言葉として残ったのを例外として、呼称さえもなくなるほどに大御宝にとけ込んでいった。

しかし、すべてが同化していったわけではない。

海人系、山人系を問わず、とくに山人系の民のあいだでは、大和朝廷の討伐を受けて大勢として降っても、屈服、隷属をきらい、朝廷の力のおよばぬ山奥へ逃げ込んだ者も少数出たのである。

そうした人々は、大和朝廷に怨念を抱いた。討伐の過程で、夫、妻、子などを虐殺された者が多かったからである。

シノムラの伝承によると、国栖は、討伐を受けたさい、壮年の男千人が生き埋めにされている。

毛人は、婦女子五百人が焼き殺されたという。

大和朝廷は、見せしめに、そうした虐殺を行ったらしい。

山奥へ逃れた山人は、一か所に定住することなく、峰々を渡り歩く漂泊の民になった。

敏捷で、闘争的な性格になり、護身、攻撃の術に長けるようになっていった。

時代を経るうちに、各地方の山間奥地に逃れた山人たちは交流するようになり、連絡網を持ち、統一の組織を持つようになった。

その統一組織の名称を、

シノムラ、

と、言った。



忍びの連、の略である。

山人たちは、自分たちを忍んで生きている民とみていたのであろう。

忍ぶは、彼らにとっては、人目に触れないように生きる、ということより、恥を忍ぶ、という意味のほうが強かった。

天孫民族に住むところを追われ、同胞を殺されたことは、忍びがたい屈辱、として彼らの記憶に残っている。

連は、臣、連、といった古代王朝の姓の連ではなく、連合体の意味に用いたものと思われる。

シノムラは、法螺貝、狼煙で、仲間たちと短時間のうちに連絡をとりあうことができた。

シノムラは、当初、出身部族ごとに、それぞれの王朝の伝承を持っていたが、シノムラ組織ができてから、だんだんといくつかの王朝の伝承があわさっていって、五百代、六百代の、とほうもなく長い王朝の伝承になっていった。

いずれにしても、大和王朝の皇統より、気の遠くなる昔に発祥している、という誇りを強調した伝承になっている。

シノムラは、大和朝廷の力が届かない世界にだけ生きたのではなかった。

その存在理由は、大和朝廷をくつがえし、祖先の怨みをはらすことにあったから、積極的に大和朝廷の世界にアプローチした。

しかし、アプローチの形は、シノムラとわからない巧妙で隠密なものであった。

里に現れるときは、箕作りや呪術師であったり、遊女やさすらいの芸人として里々をめぐることも多かった。盗賊として都を荒らしまわり、高貴な家柄の娘をさらうこともしばしばだった。

シノムラは、彼ら独自の宗教をつくるにいたった。

シノムラの統一シンボルとして、独自の宗教を持つことは必要だった。

その宗教を修験道と称した。

修験道は、今日では、密教の流れをくむ山岳宗教と受けとめられているが、もともとはシノムラの宗教であった。

宗教というより、シノムラとして生きぬくための精神力、体力をつける術であった、というほうが、説明としてわかりやすいかもしれない。

シノムラの修験道は、ひとりの天才的修験者によって幅を広げた。

俗な言い方をすれば、凄味をつけたのである。

## 5

「――その修験者の名こそ役小角だ」

やまと赤軍の首領は、低い声で言った。

「役小角？　修験道の開祖だと言われている人物ではないか」



「そのとおりだ。役小角は、シノムラの民のなかでも、もっとも偉大な人物だった……」

首領の話を、神四郎は、黙って聞くことにした。

『続日本紀』によれば、役小角は、大和の葛城山麓に生まれた、とされている。

シノムラの伝承では、小角は、葛城山一帯を本拠とするシノムラの小集団の構成員で、呪術師として一般の里に住みついていたのだという。

ただ住みついていたのではない。

シノムラの情報収集役として一般社会に出ていた、ということらしい。

小角は、葛城山のシノムラの修業場に、ときどきこもって、やがて、神通力を得た。

その神通力を里人に使ってみせたため、朝廷にあやしまれて、捕えられ、伊豆に流された。

流人の身となりながら、小角は空中を飛翔して富士山に登ってみせるなど、さまざまの神通力を表したため、朝廷から刺客を送られた。

小角の神通力は、いまで言うところの超能力であろう。自分の体を瞬間時に遠く隔たった地に移動させることが、じっさいにできたのかもしれない。

人々の目には、空中を飛翔して富士山に登ったとしか映らないにちがいない。そんなことをすれば、妖術使いとして朝廷に怖れられる。

小角は、朝廷の刺客を妖術で追いかえした。

朝廷は、小角をもてあまして、懐柔策に出た。

流して三年後には、大和にもどることを許したのである。小角は、大峯山に霊場を開いて、修験道を広めた。

しかし、シノムラの構成員としての役小角から見れば、それは修験道を通して大和朝廷とのパイプをつくったことにすぎなかった。

小角は、そういう形で朝廷にアプローチしたのである。

大和朝廷を支える勢力は、多様であり、かつては〝まつろわぬ民〟に属した部族の流れをくむ勢力も入っている。

彼らは、シノムラからすれば、裏切り者の末裔と言ってよい。

裏切り者の末裔でも、祖先を殺戮した民族の子孫でも、シノムラにとって、朝廷に波風を立ててくれる勢力は味方だった。

大和朝廷は、すでに日本列島の支配者としてがっちり根を張っている。

その根をずたずたに断つには、まず内紛、内乱を起こさせることが必要だった。支配体制のなかでの野心的勢力は、シノムラを利することになる。

シノムラとしても、そのようにもっていかなければならず、そのためには、体制に通じる太いパイプを必要としたのである。

役小角の出現で、シノムラは、大和朝廷のさまざまな勢力に食い込むことができた。

大和朝廷は、当時すでに大宝律令を完成して、律令国家へ衣替えし、制度のととのった中央



集権体制へ移行しつつあった。

飛鳥時代から奈良時代へ入ろうとしていた。

奈良（平城京）への遷都が行われる前年、朝廷は、シノムラが遷都事業のさなかに移動して、混乱状態を起こそうとしていると判断したものか、畿内の百姓に浮浪人をかくまったり、里に入れたりすることを厳禁している。

奈良に遷都して、十年後には、隼人の討伐が行われている。

隼人のうちで、朝廷に服従することをいさぎよしとしなかった少数がシノムラに加わったのは、このときのことである。

聖武天皇の御代（七二四―七四八）に、太宰府の高官、藤原広嗣が叛乱を起こした。

当時、大和朝廷を牛耳っていたのは橘諸兄で、広嗣は、諸兄の悪政が天変地異をよび、庶民を苦しめているとし、諸兄を除くことを口実に乱を起こしたのである。

このとき、広嗣を操って兵を挙げさせたのは、役小角の高弟で、九州の筑紫のシノムラを統率していた猪角であった。

猪角は、広嗣の勢いが衰えて、乱が失敗に終わることを予期すると、広嗣を見すてた。

しかし、広嗣の乱は、奈良朝初期の政情を慢性的な不安におとしいれて、社会不安を招いた。

都が恭仁に遷されたり、難波にかわったり、また奈良に還ったりしたのも、そうした政紛、社会の動揺のあらわれである。

朝廷は、大仏の造営をはじめた。政情と社会の不安を、大仏の法力で鎮めようというねらいだった。

それと、人々の関心とエネルギーを大仏の造営に向けさせて、失政、悪政に批判、非難が集中するのを避けるためであった。

しかし、大仏の造営は、その費用と労役が天文学的な数字に達し、人々に塗炭の苦しみというツケをまわす結果になった。

天平勝宝八年（七五六）、女帝孝謙天皇にとり入った藤原仲麿（仲麻呂とも書く）が、橘諸兄を失脚させて、権力をにぎった。

この機に、猪角は、畿内のシノムラと緊密な連絡をとって、諸兄の子の奈良麿に反乱を起こさせようとしたが、未然に発覚して奈良麿は死刑になった。

シノムラは、河内の山で修業に励んでいた小角の縁筋の鹿角を朝廷に接近させて、朝廷内部の攪乱者にしようとした。

鹿角は、里に出て僧となり、神通力を発揮して、祈禱を行い、予言や病気の治療を行った。

鹿角の神通力は、小角に比べれば月とスッポンほどの差があったが、それでも、里人をおどろかせるには充分であった。

この鹿角は、表の歴史では弓削道鏡の名で知られている。

道鏡の名は、畿内に聞こえるようになり、やがて、天皇から上皇になっていた女帝孝謙にとり入ることに成功した。



道鏡は、孝謙上皇に藤原仲麿を遠ざけさせた。仲麿は、当時、恵美押勝と改名して、権勢ならぶ者がないほどであったが、道鏡におとしいれられて反し、殺されてしまう。

孝謙上皇は、ふたたび皇位について、称徳天皇と称した。

女帝称徳の寵愛をほしいままにした道鏡は、太政大臣、法王と位をきわめ、ついにはシノムラの本性を表して皇位をねらうまでになった。

貴族は結束して、和気清麿を宇佐八幡宮に派遣し、皇位は皇族以外の者に譲ってはならないという神託を受けさせた。

その神託により、道鏡は皇位につくことができず、シノムラの野望は達せられぬままに終わった。

道鏡は怒り、清麿を大隅に流した。

七七〇年、称徳女帝は逝き、道鏡は朝廷でのよりどころを失った。

藤原百川が政権をとり、道鏡を下野国の薬師寺に流した。道鏡は、宝亀三年（七七二）四月、配所で死んでいる。

奈良時代を見ても、シノムラはあらゆる手段を使って朝廷をゆさぶり、政権奪取をこころみている。

シノムラは、そのように、いつも政権の中枢に、虫が樹木をむしばむように食い込んでいた

が、一般庶民の目に触れる形でも社会に接点を有していた。

平安時代に入ると、その傾向が強くなってくる。

さすらいの芸人集団であるクグツ（傀儡）が、そうである。

歌舞をもって貴族、有産階級の人々を楽しませ、売春婦的な一面もあった白拍子も、また、シノムラの構成員であった。シノムラは、遊芸の道から一般社会に入り込むことが多かったのである。

古代の製鉄法であるたたらを支配していたのも、シノムラであった。

たたら師は、鉄をつくるので、鍛冶などの金工職人の世界と密接につながっていた。

刀、槍、鎧などの武具は、その多くを間接的にシノムラの手に委ねていたことになる。

シノムラが里人と接するもうひとつの形は、修験者であった。

修験者は、里に現れるときは、祈禱を行い、里人の信頼を得るように努めた。

クグツ、白拍子、たたら師、修験者、いずれも流れ者である点が共通している。

シノムラは、一般社会に定住しないので、里人の目には漂泊の民に映るのは当然のことだった。

平安期に、最後まで〝まつろわぬ民〟であった蝦夷も朝廷に服属する。

平安末期から鎌倉期にかけて奥州平泉に、豊かな黄金を背景として、けんらんたる文化と強い武力を誇った藤原三代は、なかば独立国家のようにふるまい、頼朝の奥州征伐によって滅ん



だ。

その藤原氏が〝まつろわぬ民〟の蝦夷の血をひく豪族であるかどうかは定かでないが、たとえ蝦夷の流れであったとしても、平泉藤原氏の栄華は、あくまでも体制内の栄華、朝廷に服属してからの半独立王国の形成であった。

蝦夷としては、とっくにその生命を終えていた。

蝦夷のごく一部も、平安中期にシノムラの世界に入っている。

シノムラは、強固で迅速な連絡網、情報網と、たたらなどの技術、シノムラの剣と呼ばれる特異な武術をよりどころに、山人として生きぬいてきた。そのシノムラが二分する事件が起きた。

その事件とは、十世紀なかばに起きた承平・天慶の乱である。

西海に藤原純友が、東国に平将門が乱を起こし、承平、天慶の数年にわたって中央に反抗したので、世に承平・天慶の乱と総称されるこの事件は、朝廷の心胆を寒からしめた大がかりな叛乱だった。

純友は、伊予国の掾（長官、次官のつぎに位する判官）として伊予国に赴任した官吏だったが、土着して近隣の土豪をしたがえ、大きな勢力を持つにいたった。

地方政治の乱をみて、純友は、やがて千余艘の兵船を率いて瀬戸内に乱を起こし、一時は西海を制覇し、太宰府まで制圧下に置くかの勢いを見せた。

しかし、裏切りなどにより、天慶四年（九四一）に朝廷の追捕を受けて殺された。

いっぽう平将門は、一族や他の豪族を武力で圧迫して、しだいに関東に威をふるうようになり、天慶六年（九四三）には、平新皇と自称した。

将門は、桓武平氏の流れをくんでいる。

将門の勢いがもっとも盛んだったころ、シノムラ内部は、将門につくか、朝廷につくかで意見が分かれ、二派に分裂した。

ともに、祖先の怨みをはらす絶好機だとにらんだ点は一致していたが、将門に肩入れして朝廷の力を弱めるほうが得策か、それとも、ひとまず朝廷に味方して朝廷に影響力を強めてから朝廷を内部からゆるがしていくか、で見解が分かれたのである。

シノムラは、意見を統一できぬままに、血みどろの内部抗争をくりひろげて、朝廷についた側が勝利をおさめた。

しかし、そのときすでに将門は滅んで、シノムラの出る幕は失われていた。

シノムラも、血の内部抗争で大いに勢力を弱めていた。

朝廷についた側は、シノムラ内での勝利者になったものの、シノムラにかつての組織と怨念はなく、隠密、攪乱工作をもっぱらとする傭兵集団になりさがった。

伊賀、甲賀の忍者集団は、将門についた側の仲間を殺戮して、シノムラの支配権をにぎった者たちのなれのはてである。



伊賀、甲賀忍者は、それぞれに分派して各地の山に拠り、そのときそのときの体制、そして、地域地域の大豪族、大名に利用される隠密傭兵団として生きながらえて、戦国期を迎えた。

東国方面では、らっぱ（乱波）とか、すっぱ（透破）とか称しているが、いずれも天慶年間に体制側の隠密、忍者集団として生き残ったシノムラの流れをくんでいる。

そうした忍者集団は、鎌倉初期に北条家によって整理され、北条家にしたがわぬ集団は粛清された。

粛清は、室町、戦国期を通じて続けられ、体制にとって不要となった忍者集団は、つぎつぎに粛清されていった。徳川の時代に、幕閣の一翼に組み込まれた柳生家は、シノムラ系忍者集団の一流だった。

その忍法を柳生陰流と称したが、徳川家は不要の忍者集団を粛清するのに、柳生家を使った。毒をもって、毒を制したのである。

将門の時代に、シノムラは二派に分かれて、朝廷側についた派が他のいっぽうを制したが、粛清された派はしぶとく生き残り、シノムラ誕生時の原点に還って、一般世間の目の届かない世界に入った。

忍者傭兵集団化し、時の権力者に操られて、各流に分かれて暗闘を繰りひろげ、ついには体制に組み込まれるか、消滅するかの運命を辿ったシノムラ多数派と区別するために、こちらのシノムラをここでは原シノムラと呼ぶことにする。

原シノムラは、江戸時代を経て、明治、大正、昭和と生き続け、一般人の目には、なかなか触れないような山中を移動する生活姿勢を崩さなかった。

原シノムラは、いつの世も時の権力を憎み、将門時代に裏ぎったシノムラ多数派を怨んだ。

幕府政治であろうと、天皇制国家に変わろうと、民主主義政治になろうと、原シノムラにとって日本は天孫民族の国家であることに変わりはなかった。

その原シノムラが、一般社会に躍り出した。

## 6

――やまと赤軍の首領は、

「バケコミがはじまったのだ」

と、うめくような声で言った。

「バケコミ?」

「一般社会に化け込む、という意味だ。明治になって、戸籍制度がととのったとき、原シノムラの一部は、一般社会に流れ込み、戸籍をとり、一般人の生活に入った」

「シノムラの組織を離れたわけだな」

「いや、その者たちはシノムラと絶縁したわけではない」

「というと?」



神四郎は、闇のなかにたたずんで、夜の陽炎のように見えるやまと赤軍のメンバーたちを見わたした。

闇は、重っ苦しかった。

神四郎は、顔に汗をにじませていた。

涼しかったが、首領の話に興奮して汗が出たのである。

首領の話を聞いていると、内奥から熱いものが湧きあがってくるような感じがする。遠い祖先が伝えたシノムラの怨念が潜んでいて、それが荒々しい血のたぎりとともに表れたようだった。

(おれは、シノムラか)

神四郎は、歯を食いしばって首領の話の続きを待った。

「バケコミ三代の制がある」

「バケコミ三代の制だって?」

「バケコミは、本人が一般社会にバケコミをして、その子、その子孫の代まではシノムラの連判籍に記載される。曾孫になると、抹消される。つまり、バケコミしても、三代のあいだは、シノムラ組織と切れない」

「レンパンセキ、とは、どういうものだ?」

「シノムラの戸籍のことだ。バケコミをしても、連判籍に記載されているあいだは、シノム

ラの構成員として、一般人にわからぬようにだが、シノムラの権利を享受し、義務を果たさなければならない」

「シノムラの権利、義務とは？」

「困窮者は、扶助料をもらう権利があるかわりに、組織命令にしたがわなければならない。富裕者は、収入の一割を拠出する義務を果たすかわりに、組織に身柄と秘密をがっちり守られる。いわば、シノムラの相互扶助機能を維持するための権利と義務だ」

「バケコミした人間の曾孫から、シノムラとの縁はいっさい切られるのか」

「そうだ。絶縁になる。ただし、本人が望めば、シノムラの連判籍にそのまま記載され続ける」

「バケコミを行ったシノムラの人数は、どのくらいいたんだ？」

「明治初期、大正期、昭和恐慌期、太平洋戦争勃発期、終戦直後と五期にわたって、バケコミは行われている。累計で、千三百余世帯、二千四百人あまりが行い、バケコミ三代の制で連判籍を失った人間も多いが、それ以上に子、孫の代で増えており、いま社会にバケコミ生活をしているシノムラの構成員は、四千人を超える」

「いまでも山に残り、無戸籍の生活をしている人間は？」

「百人もいない」

首領は、苦しそうな声で、



「シノムラは、崩壊しようとしている。バケコミが行われるようになったのは、日本が近代国家になり、戸籍制度などの行政制度がととのって、無戸籍者のままでは生活しにくくなったことや、開発が進んでわれわれの姿が一般人の目に触れやすくなったためだ。しかし、そればかりではない」

と、続けた。

「ほかの理由があるのか？」

「天孫民族の支配をくつがえすには、バケコミをして社会の各分野の要職に進出して、体制をそのまま乗っとるのが早道だ。そうしなければ、シノムラの究極の目標を達成できない世のなかになってしまう――われわれが、バケコミを組織的に行うようになったのは、そう認識するようになったためであった」

「……」

神四郎は、苦しそうな話しぶりに変わってきた首領の顔を見つめた。

楠の枝繁みでさえぎられていた月光が、月の位置が変わったために、少し射し込むようになり、首領の顔の輪郭をぼんやりと浮かびあがらせた。

異相と言ってもよい、ごつごつした貌で、両眼が落ちくぼんでいた。

神四郎は、首領に、その武骨な相に似あわぬ冷気のようなものを感じた。

「ところが……」

首領は、言葉をちょっと切って、咳払いをした。

「なにが起きた？」

「バケコミした連中から、えらくなっていく者が多く出た。政治家、企業家、教育者、芸術家と分野を問わず、著名になった者は枚挙にいとまがない。中堅どころで活躍している人間となると、全国いたるところにいる。とりわけ教育界に多い」

「教育界に……」

「ユダヤ人と華僑は、子弟に高等教育を授けるだろう。さすらいの民の彼らにとって、教育は、もっとも安全で有利な投資になっているのだ。それとおなじで、われわれシノムラがバケコミして、教育を重視するようになったのは、当然であった。あんたが子どものころ、あんたの父親殿にあんたを就学させるようくどきに通ってきた教師がいたろう？」

「いた」

「その教師も、父親の代にバケコミしたシノムラであった。あんたの家も、明治の初期にバケコミをした。が、ちょっとちがうバケコミだった」

「どうちがう？」

「あんたの家は、バケコミをした家系の者としかつきあわず、一般人とは没交渉だったからな」

「そうだったのか」



神四郎は、うなずいた。

バケコミしたシノムラは、戸籍を得る方法がいくとおりもあるのかもしれない。

その自信があり、教育の必要性を充分に認めていたからこそ、そのシノムラ出身の教師は、しつこく神四郎を学校に通わせたがったのだろう。

「存命中の元首相のなかにも、シノムラはいる」

「だれだ？」

「そのうちわかる。都銀の幹部には、さすがにいないが、相互銀行、信用金庫の会長、理事長にもいるし、戦後、成りあがった怪物実業家にもいる」

「バケコミは、成功したんだな」

「いや、ちがう」

首領は、語気を荒くした。

「ちがうのか」

「バケコミして成りあがっていった連中は、二十年、三十年を経るうち、また、子や孫が頭角を表してくると、いつのまにかバケコミの精神を忘れた。天孫民族と婚姻をして、体制のなかでぬくぬくと暮らす道を選ぶようになった。つまり、彼らはシノムラであることに苦痛を感じるようになり、シノムラをこの世から抹消させることをたくらむようになったんだ。彼ら成りあがったグループが、バケコミのシノムラを支配している」

「その連中の首領は、だれだ？」
「闇の翁だ」
「闇の翁……」
「彼らは、シノムラを抹消することを目的とする結社をつくり、シノムラの歴史を闇に、もともと一般社会から見れば闇の組織だから、おかしな言い方になるが、闇に葬る作業を開始した。それに対して、まだ山に残っているシノムラを中心にした、シノムラの精神を守るグループが決起した」
「それが、やまと赤軍という盗賊団か」
「われわれは、盗賊をしている。しかし、バケコミをしてなりあがった連中からしか盗みを働かない。われわれの盗賊行為は、シノムラの精神を踏みにじった連中をこらしめると同時に、シノムラを昔に還す資金稼ぎの意味あいがあった」
「盗人にも三分の理、ではないか」
神四郎は、首領の言葉に反発する感情はなかったが、口に出しては、そう言った。
「連中のつくった結社は、玄武会という。玄武会の結社員は、われわれに忍び込まれ、高価なものや現金を盗まれても、警察に届け出ることはなかった。シノムラの仕業だ、と手口などから知っていたからだ。そのかわり、まずわれわれを抹殺する行動に出てきた。現在、われわれと玄武会は、血で血を洗う死闘を演じている。テレビ、新聞には、絶対に報道されることのない死闘だ」
「おれが、やまと赤軍の盟主にならなければならない根拠は？」
「はじめに話したが、シノムラの名流中の名流である鹿爪家の血筋だからだ。それともうひとつ……」
首領は、生唾を呑み込んだ。
「……」
神四郎も、生唾を呑み込んで首領の言葉を待った。
「鹿爪家は、太古の時代に安曇野一帯を支配していた安曇族の族長の家柄だ。安曇族の出身は北九州の海人系とされて、綿津見命を祖神としているが、もとをただせば、天孫民族に追われた肥人の生き残りが、海に逃れて、日本列島沿いに東上し、遠州灘から上陸して、安曇野に至り、山人になったものだ。鹿爪家の支配下にあった安曇族系シノムラは、バケコミをしなかった者が多い。シノムラ内では、神州一族の名で知られる」
「神州一族か」
「あんたは、神州一族の族長なんだ。そして、やまと赤軍は、神州一族の特別行動隊と思っていただきたい」
首領の言葉づかいが、ていねいなものになった。
やまと赤軍のメンバーたちが動いた。神四郎を囲むように、間あいを詰めたのである。

「安曇族の族長、鹿爪家五百九十九代、シノムラの高貴なる家の当主であられる神四郎の君よ！」

首領は、いきなりひざまずいて、

「神州満月城へお連れ申す。そこで、神州一族の族長となる儀式を受けてくだされ」

神四郎が、思わずたじろいだときであった。

突然、銃声がとどろいた。

メンバーのひとりが絶叫を発して倒れた。

「玄武会だ！」

首領は、起きあがって叫んだ。

他のメンバーは、ぱっと八方にバッタのように飛んで地に伏した。

「神四郎の君、楠の幹に！」

神四郎は、首領に突き飛ばされて、はっとなり、楠の幹の根元に伏した。

銃声が、さっきよりも近くで起きた。

首領が、地を跳ねて回転し、楠の枝にとりついた。

神四郎は、冷静さをとりもどして、暗闇の剣をしっかりとにぎった。

風が枝を鳴らした。

「神四郎の君、そのまま、伏せていてくだされ」



頭上で、おし殺した声がした。

「……」

神四郎は、答えなかった。

「すぐかたづけます。腕に自信がおありでも、この場は、われわれにおまかせあれ」

首領の声は低かったが、気迫と自信に充ちていた。

人のものとも、けもののものとも区別のつかぬ、奇妙で薄気味のわるい声が聞こえた。神四郎は、耳をふさぎたくなった。

その声は、叫びのようでもあり、呪文を唱えているようにも聞こえ、しみこむ感じで耳の奥に入ってきた。

神四郎は体から力が抜けていくのをおぼえた。

銃声がかたまって響いた。

いくつもの銃が、連射しているようだった。

その底響く銃声のシンフォニーに包まれても、奇妙で薄気味のわるい声は止まず、神四郎の耳によく届いた。……

# 第二章　妖美な肉林

## 1

——銃声が、つかのま、ぱったりとやんだ。
うわおーう、うおー、うわーうわー……
叫びとも、呪文ともつかぬ声だけが聞こえた。
その声は、ひとつの口から発せられているものではなかった。
いくつもの口、それも四方八方に散った口から発せられているようだった。声をあわせてのものだが、微妙にずらされて発せられている。
神四郎は、五体から力が抜けてしまって、ただ脱ぎすてられた上衣のように楠の根元に這いつくばっていた。
うわーうわー、おーわうーおー……
その不可解な声を聞いているために、力が抜けているのだ、と神四郎は、ぼんやりと思った。
（あの化けものじみたやつたちの声か）
さっき、林のなかで襲いかかってきて、不意の雷雨とともに退散した猿人たちの叫びだろう、



と神四郎は推察した。
「——いまぞ」
楠の枝繁みで、首領の声がした。
神四郎は、上を振りあおごうとした。
が、顔や首を動かす力が出なかった。
葉が揺れ、枝が鳴った。楠から、黒い影が宙に舞った。首領の影だった。
まさに、影、という形容しかなかった。首領の影は、ふわーっと三、四メートル先に着地した。
とたんに、首領の影は、浮かびあがるように跳ねて、さらに三、四メートル先に着地した。
そのあと、首領の影は、こつぜんと消えた。
前方の樹林が、神四郎の目には、もやもやした黒い靄のように映っていた。首領の影は、その樹林の色に溶け込んだので、消えたように見えたのである。
（惑視の術だな）
神四郎は、樹林に目を凝らしても、首領の影が認められないので、いらだちながら、舌を巻いた。
亡父が、シノムラに伝わる惑視の術をやって見せたことがある。
「わしの姿を認めたら、遠慮なく手裏剣を投げてみろっ！」

その叫びを残して、亡父は跳躍した。
深い樹林のなかだったが、月光が射し込んで、神四郎の目は、木の枝繁みに潜んでいるフクロウを識別することができた。しかし、亡父の姿は、影としてもとらえることができなかった。
「投げよ！」
亡父の声がした瞬間、その声に向かって投げた。
しかし、空を切る音が届いただけだった。
「投げよ！」
別の場所から声が届いた。
小枝と葉を落としただけだった。父の影は、目を凝らしても凝らしても、見あたらなかった。
声だけが、あっちからこっちから、まるで何人もの影武者を使っているかのように、届いた。
神四郎は、持っていた手裏剣を投げつくして呆然とした。
「ここだ」
父は、地から湧きあがるように、姿を現した。
「惑視の術だ。おまえは、わしの声がちがう場所から発せられたように聞いたろうが、わしは、おなじ場所から動かなかった。惑視の術を破るには、目に頼ってはだめだ。目を閉じ、心をおちつかせて、その心にわしの気配を映しとらねばな。それを、心映の術という……いや、おまえは、惑視の術も、心映の術も修める必要はないぞ。それらは、シノムラの外道の術だ。



しょせん、シノムラの剣を究めれば、外道の術にうちかてる」
亡父は、ため息をついて、
「わしの失敗は、外道の術を修めたことよ」
と、つぶやいた。
うわーう、わーおう、おーうー……
不可解な叫びは、まだ続いていた。
その叫びに、絶叫と悲鳴がまじった。
絶叫と悲鳴は、続いて聞こえた。複数の人間の口から洩れたもののようだった。
「――やめよっ」
遠くで、首領の声がした。
不可解な叫びがやんだ。
神四郎は、五体に力がよみがえってくるのを意識した。立とうとした。
ふつうに立ちあがることができた。
首領の姿が見えた。樹林の闇のなかから、ふわっと現れた感じだった。
「神四郎の君、ご無事か？」
首領は、ゆっくりと近づいてきた。
「なんともない。ところで、さっきの気味のわるい叫びはなんだ？　猿人のような怪物たち

の発したものか？」

「猿人たち？」

首領は、足をとめて、

「神四郎の君は、やつらのことを知っておられるのか？」

と、訊いた。

「ここへくる途中に襲われた」

「すでに、遭遇されておられたか」

「あの怪猿人たちは、何ものなんだ？」

「原日本人、とでも申しあげておく」

「原日本人？」

「われわれは、日本の先住民族です。しかし、われわれの祖先がこの島に辿りつく以前、五十万年前か百万年前か、それはわかりませんが、気の遠くなるほどの大昔から、安曇野の山岳部に住んでいた猿人です」

「信じられない」

「しかし、神四郎の君は目にされた」

「そうだ、夢まぼろしではなかった」

「彼らは、安曇族が絶滅寸前に保護し、今日まで少数ですが生きながらえてきたのです。シノムラが結成されてからは、彼らを各地のシノムラと連絡をとる役に使ったり、朝廷、幕府の人心を攪乱する道具に使いました」

「じっさいに彼らを目撃したおれとしては、信ずる以外にないようだな」

「日本各地に残る狒狒伝説や鬼退治伝説は、彼らを目撃した里人、都人のおどろきや恐怖がつくったものです。貴族や、長者の美しい娘をさらわせたり、山道を通る身分のある人間を襲わせたといいますから。渡辺綱の鬼退治の鬼も、その正体をあかすと、都の人々を恐怖におとしいれるために、シノムラが都へ潜入させた猿人でした」

首領が話しているうちに、やまと赤軍のメンバーが姿を現しはじめた。

「神州一族のなかで、彼ら猿人を司る家柄の者がいる。残念ながらその者は、われわれを裏切り、玄武会に味方している。だから現在、猿人たちは、われわれの敵なのです」

「シノムラについては、いろいろとわかった。しかし、あんたは、シノムラについて自分の知っていることは一部だ、とさっき言った」

「一部、という言い方は、誤解を受けますかな。じつは、シノムラには〝大きな秘密〟が残っている。これまで語ったことは、その大きな秘密から比べれば、一部のようなものなのです」

「その大きな秘密とは？」

「熊爪の翁のみが知っている秘密です。われわれにも、その内容はあかされておりません」

首領は、突き離すように言って、部下たちを振りかえり、
「玄武会の三人の息の根をとめた。残りは逃げた。遊軍として散らしてある連中も異変を知ったはずだから、残りのやつらの退路は絶たれるだろう。脱力の術、ご苦労だった」
と、報告がてらねぎらった。
その言葉から、神四郎は、さっきの不可解な叫びが猿人たちの口から発せられていたものでなく、首領の部下たちが発していたことを悟った。
「では、神四郎の君、神州満月城へまいりましょう、さあ」
首領は、神四郎へ顔をもどしてうながした。
そのとき、神四郎に衝動が起きた。手にしていた暗闇の剣を抜いてみたい、という衝動である。
神四郎は、暗闇の剣を抜きはなって、鞘を首領に差し出した。
「どうされた?」
首領は、怪訝そうに言って、鞘を受けとった。
「……」
神四郎は、無言で、部下たちを見わたし、いちばん後方にいたひとりに目を凝らした。
(おれは、あいつを斬りたがっている)
神四郎は、はっきりと自分のなかに湧きあがった凶暴な衝動を意識した。



その衝動を抑えようとした。
しかし、衝動はおさまらず、体が熱くなった。
「いやあっ!」
神四郎は、気合とともに跳躍し、ふたつ跳びで、その男の前に行き、暗闇の剣を振った。
月光を吸って暗闇の剣は青白いきらめきを発しながら、その男の頸にうちこまれた。
「神四郎の君!」
首領がかすれた声を出した。
血がしぶいて、首が飛んだ。
飛んだ首は、首領の足許に転がった。
神四郎は、自分の行ったことの結果に、つかのま、放心した。……

## 2

——首領は、暗闇の剣が刎ねた部下の首をひろいあげた。
部下たちが、首領のまわりをとり囲んだ。
「——見ろ」
首領は、首を部下たちに示して、
「われわれの仲間ではない。玄武会のメンバーだ」

と、言った。
「いつ、まぎれ込んだのだろう」
部下のひとりが、ため息をついた。
「油断もすきもないな」
首領は、苦笑した。
神四郎は、首領たちの話し声をぼんやりと聞いた。
暗闇の剣は、その遣い手の敵を敏感に察知し、遣い手に殺意を起こさせる力を秘めているようであった。そのことに気づいて、神四郎は愕然となり、めまいのようなものをおぼえた。
「神四郎の君、お手柄でした」
首領は、首を石ころのように捨てると、よろこびのにじんだ声で神四郎をほめたたえた。
「敵だったのか」
神四郎は、やっとショックから立ちなおり、ほっとした。
人を殺したのは、むろん、はじめてであった。
暗闇の剣は、月光を吸って黒々と光っていた。神四郎は、首領が部下のひとりに渡していた暗闇の剣の鞘を、その部下から受けとって剣をおさめた。
シノムラの名流の血筋を引く者、神州一族の族長——そうした自分の立場をあらためて認識して、神四郎は安曇野に入る前の自分と、いまの自分がちがっていることに思いいたった。



荒々しい、凶々しいものが、おのれの魂を揺すり、体のなかを吹きすさんでいる。都会生活をしていたときの、おだやかさ、温和さは、すでにひとかけらもなかった。
全身を血なまぐさい闘志が包んでいた。
「——おう、目が赤く輝いておられる」
首領は、神四郎の顔を真近から覗き込んで、満足したように言った。
「神州一族は、夜に強い民だった。闘志にあふれ、敵をたおそうというときには、目が発赤する特徴がある。興奮が目に表れます」
「狼みたいでは、ないか」
神四郎は、苦笑した。
「……」
首領は、つかのま、黙って、
「おれの名は、黒矢です」
と、言った。
「クロヤ？」
「黒い矢の黒矢です」
黒矢と名乗った首領は、部下のひとりを手招いた。
「はっ」

招かれた部下は、首領の前に走った。
「青矢、犬どもを呼べ」
「かしこまりてそうろう」
青矢と呼ばれた部下は、楠に跳んで幹にとりつくと、すべりあがるようにしてのぼった。たちまち、その姿は、梢近くに達して下からは見えなくなった。
ピューピューウ、ピューピューウ……
それほど音色は高くないが、遠くへ伝わる音質だった。
「なんの笛だ?」
神四郎は、黒矢に訊いた。
「指笛です。青矢は、指笛で神州犬を自在に操る」
「神州犬、というのがいるのか?」
「います。神州一族が昔から飼っている精悍な犬です」
「山人が飼っている犬だから、マタギ犬のようなものか?」
「マタギ犬よりも荒々しい。凶暴です。ごらんになればわかります」
黒矢は、楠の梢を振りあおいだ。
ピュールルルウ、ピュールルルウ……
指笛の音色が変わった。



遠くで、犬の遠吠えがした。
神四郎は、耳を澄ました。犬の遠吠えは何度か聞いたことがあるが、いま聞いている遠吠えは、犬のものとも思えなかった。凶暴な意思に充ちていた。
遠吠えは、別の方角からも聞こえた。二匹、三匹と数が増えて、すぐに数がわからないほど多くの遠吠えになった。
その多くの遠吠えが、だんだんと近づきながら、同方角にまとまってきた。
(群れてこっちへ近づいている)
と、神四郎は悟った。
指笛がやんで、青矢が楠を流れるようないきおいで降りてきた。
青矢は、五メートルほどの高さから、ひらりと地に舞い降りた。
遠吠えが聞こえなくなった。
風が荒んだ気配を運んできた。遠くから息遣いの渦のような感じで、空気の乱れが伝わってきた。
「きたぞ」
黒矢が、おし殺した声で言った。
黒っぽい風が地を這うように吹き渡ってきたか、と神四郎は思った。
犬の群れだった。

二、三十匹は、いるだろう。
青矢が指を口に入れて、
ピュル、ピュル……
と、指笛を鳴らした。
犬の群れは、楠の根元をとり巻いてうずくまった。舌を出して、はあはあと荒い息をしている。
神四郎は、犬の群れに好奇の視線を注いだ。
秋田犬ほどではないが、日本犬としては大型だった。が、体つきはやせて、とがった顔をしており、目が脂を塗ったように輝いていた。あかるいところで見たら、険悪な表情をしているにちがいない。
それは野生の険悪さで、犬というよりも狼の印象を受けた。
青矢が、短く指笛を吹いた。
神州犬たちは動いて、玄武会員の首なし死体と、斬り落とされた首に群がった。うなり声をあげ、牙をむいて、肉を食いちぎる音がした。
陰惨な光景だった。神州犬たちは、競うように、しかし、仲間喧嘩はしないで、首なし死体と首をむさぼり食っている。
神四郎は、一瞬、目をそむけたほどだった。



「こいつらは、人肉を食らうのか？」
「神州犬は、肉食です。それも、野生の鹿、ムジナ、タヌキなどを襲って食べる。腐肉も食べます」
黒矢は、あたりまえのことを言うように話した。
「おそろしい犬だな」
神四郎は、神州犬たちが人肉を食べるさまに、あらためて見入った。
いくらも経たないうちに、死体の肉は食いつくされて、骨だけになった。
「神州犬は、神州犬にかぎらず、野犬などもそうだが、内臓を好んで食らう。内臓には、塩分やミネラルがあって、犬の体が要求するからです」
黒矢が説明した。
神州犬たちは、青矢のまわりに集まった。
ピュル、ルウ……
青矢は、指笛を鳴らした。
神州犬たちは、矢のように樹林のなかへ走り込んで、たちまちのうちに姿を消した。
月が叢雲に隠れた。
闇のなかで、神四郎は吐息をついた。
「さあ、神州満月城へ行きますぞ」

黒矢がうながした。

神四郎は、自分のほんとうのふるさとが神州満月城のような気がした。帰心が起きて、募った。

東京を出たときの帰心とはまたちがって、その帰心に逆らう、うしろ髪をひかれる思いのまじった帰心だった。

おどろおどろしく、闇が渦を巻き、底の知れない深淵を覗かせている。自分のふるさととは、そんな世界なのだろう。

いったん、もどったら、自分は変わる。いや、シノムラ、神州族としての地が出て、一般の社会では二度と生きていけなくなるにちがいない。

それでも、神四郎は、矢のような帰心に急かされて、歩きだしていた。

黒矢たちは、先を歩いていた。

どのくらい山中を歩いたろう。神四郎たちの歩く速度は、一般人から見れば、駆けるに近かった。

ブナの原生林に入り、それを抜けて岩場の嶺を越えた。灌木林にまぎれて、乳色の霧に包まれた。

犬の吠え声がした。

道案内の犬のようだった。



「急げっ！」

黒矢が叫んだ。

やまと赤軍のメンバーたちは、疾走しだした。闇のなかを、やみくもに突っ走った。神四郎も、彼らにつられて走った。

走らなかったら、迷子になってしまいそうだった。

強い風が吹いた。

霧が晴れてきた。晴れて、空が見えた。空の色が薄くなっている。

夜あけが近いようだった。

先を走る連中の足が止まった。

神四郎も、足を止めた。

前方に、台形の岩が見えた。

巨大な岩だった。岩をとり巻くようにして、螺旋状に道がついていた。

その道を、一匹の神州犬があがっていく。

岩には、ところどころ穴がうがたれていた。四角い穴で、窓が入口のようだった。

「あれが、神州満月城です」

黒矢が、神四郎を振りかえった。

「あれが、か」

神四郎は、歩きだした。
神州満月城のなかへ吸い込まれていくような歩き方だった。
花火のような音が聞こえた。神州満月城から外へ響いた音のようだった。
「――なにか起きたかっ」
黒矢が、不安そうにつぶやいた。
中腹にある穴に、神州犬が飛び込んだ。
吠え声がした。悲鳴のような吠え方だった。
「急げっ」
黒矢が部下たちに命じた。……

3

――神州犬が飛び込んだ穴から、黒矢たちは満月城へ入った。
穴から約十メートルは、下りの階段になっていた。その石段を下ると、丸い部屋に出た。
その部屋から、左右と奥に向かって通路が延びている。
部屋は、かがり火のような大きな燭台が三つ置かれて、あかるかった。
黒矢たちは、その部屋へ駆け入って呆然とした。神四郎も駆け込んで、息を呑み、足を止めた。



凄惨な光景だった。
神州犬が一四、殺されていた。腹部が裂かれて、はらわたが外へ飛び出していた。
霧のなかを案内役として走ってくれた、あの神州犬のようだった。
女が、ふたり、倒れていた。ふたりとも、長い髪をして、素肌に白無垢の着物を着ていた。
寝巻のように、簡単な着物だった。
ひとりは、はだけた胸を朱に染めていた。そして、両眼をえぐられていた。顔と言わず、体と言わず、猛獣の爪で引き裂かれたような傷がいっぱい認められた。
ぴくりとも動かず、すでに息絶えているようだった。
もうひとりの女は、股間から血を流していた。白無垢の着物は、血を吸ってぐっしょりと濡れて、岩の床にへばりついていた。
その女は、虫の息だったが、黒矢たちが入ってきたのに気づいて、ふらっと立ちあがった。
「猿人が入ってきた……」
女は、指で天井を示しながら、それだけ言うと、ぱったりと倒れた。
「チェ！」
と、黒矢が呼びかけながら、倒れた女に駆け寄った。
「死んだ」
黒矢は、女の胸に右耳をおしつけて言った。

だれかが、天井だ、と叫んだ。
神四郎は、天井を振りあおいだ。ベルトに差し込んだ暗闇の剣に、自然と手がいった。
天井は、三つの燭台のあかりに照らされてよく見えた。岩をなめらかに削っていないので、ごつごつしていた。
そのごつごつした岩の中で特に大きいのが、ふたつあった。まわりの岩の色とちがい、感じにもやわらかみがあった。
「あれか」
神四郎は、神州一族から猿人と呼ばれている原日本人が、天井に背中を見せて張りついていることに気づいた。
燭台の火は、揺れて、天井の岩の突起の影を微妙に変化させている。そのため、よく見ないと猿人と見分けられないのだった。
「撃て」
黒矢の命令一下、多くの手が手裏剣を放った。
シノムラの手裏剣は、長さ二十センチ、直径一センチほどの鉄の丸棒の両端を、いっぽうは八角錐に、いっぽうはへら型にとがらせてある。
へら型の部分を指ではさんで投げて、八角錐のほうを敵に撃ち込むのである。特殊の鍛え方をしてあって、岩にも撃ち込むことができた。



手裏剣は、垂直に飛びあがって、ぶすっ、ぶすっとにぶい音を発しながら、猿人たちの背中に刺さった。黒矢の部下たちは、矢つぎ早に手裏剣を撃ち込んだ。
猿人たちの背中は、たちまち手裏剣だらけになり、生け花に使う剣山のようになった。
それでも、猿人たちは、微動もせずに天井に張りついたままだった。
「したたかなものよ」
黒矢は、嘆息した。
血が、ぽたぽたと雨垂れのように滴ってきた。
神四郎は、天井を振りあおいで猿人の生命力の強さに舌を巻いた。
その顔へも、血の滴りが落ちてきた。
「毒を塗って投げろ」
黒矢の指示で、ふたり三人が腰にさげていた布袋から短い竹筒をとり出して、その蓋をとり、なかへ手裏剣の先を挿入した。
何秒か経った。しかし、猿人たちに変化は認められなかった。
「トリカブトの十倍の猛毒がある、あの秘草のエキスが効かぬとは……」
黒矢は、嘆きのつぶやきを発した。
みんな、黙って天井を見あげていた。
だれひとり、手裏剣を投げなくなった。血の雨垂れだけが、みんなに降り注いだ。燭台のあ

かりにきらめいて、小粒のルビーが降っているようだった。
「やつらには、シノムラの忍法も通じぬしなあ」
だれかが弱音のように言ったとき、猿人のひとりが熟柿が落ちる感じで落ちてきた。
神四郎は、あわてて、飛びのいた。飛びのいた場所へ、猿人が、どさっと落ちた。
猿人は、ぴくとも動かなかった。
「息絶えるまで張りついていたのか。ものすごい忍耐力だな」
神四郎は、うなずいて天井を向いたが、そのとき黒矢が、いきなり、神四郎を突き飛ばした。
神四郎の体は、三メートルも吹っ飛んだ。
そのときは、黒矢も神四郎と少し離れたところに跳躍していた。
そのとっさのあいだに、神四郎がいたところへ、もうひとりの猿人が落ちた。
その猿人も、落ちたときには、息絶えていた。
奥へ延びている通路から、髪を振り乱しながら、若い女が駆け出てきた。
「――氏神の間に猿人が入った！」
若い女は、白無垢の着物の裾をひるがえしながら叫んだ。
「なに、氏神の間に。姫はご無事か？」
「何人、いるんだ？」
黒矢と青矢が、同時に訊いた。



「姫は、行方知れず。猿人は、三人です」
若い女は、それだけ言うと、腰くだけになってうずくまった。
仲間たちに出会って、張りつめていた気力が抜けてしまったのだろう。
「氏神の間に急げ。三方に分かれて向かうんだ」
黒矢は、部下たちを三班に分けると、その一班である三人を率いて奥へ通じる通路へ入った。
青矢の率いる班は、右手の通路に駆け入り、もうひとつの班は、左手の通路へ進入した。
神四郎は、黒矢のあとを追った。
暗いところは、シノムラの剣を修める過程でついた視力でよく見えるほうだった。が、通路は、ところどころに設置されている燭台が破壊されて、真の暗闇になっていた。
ふつう人だったら、恐怖が先に立って足がすくむにちがいなかった。
神四郎は、駆けて、いちばん先を行く黒矢と肩を並べた。
満月城のなかへ入ってから、神四郎は、黒矢たちを仲間と思うようになっていた。いや、仲間というより、自分の支配下にある者たち、というように意識しだした。
おれは、神州族の族長となるよう運命づけられているのだ、と自覚できるようになった。そのように神四郎の心境を変化させるものが、この神州満月城のなかには、こもっているのかもしれない。
なによりも、暗闇の剣を持つようになったことで、神四郎は変貌した。

「黒矢、氏神の間とはなんだ？」
「神州一族の魂魄が宿っている間、です」
黒矢は、ささやくように答えた。
「猿人は、全部でどのくらいの人数だ？」
「神州犬との争闘で、だいぶ少なくなりましたが、女子どもをあわせて、まだ六十人ほどはいましょうか？」
「やつらは、どこに棲んでいる？」
「わかりません。やつらは、神出鬼没です。剽悍な神州犬に居所を嗅ぎつけられるのをおそれて、転々としているもようです」
「そうか」
神四郎は、足をとめて、黒矢の腕をとった。
「どうされた、神四郎の君？」
「殺気がある」
「殺気？　なにも感じませぬが」
黒矢は、訝った言い方をした。
「いや、なにかある」
神四郎は、暗闇の剣の柄に手をかけた。



殺気、とはっきり言いきれる異常を感じたのではなかった。
暗闇の剣を抜き放ちたい、という強烈な衝動に襲われたのである。
神四郎は、暗闇の剣を引き抜いた。
自分の胸に柄を当てて、構えた。亡父に伝授されたシノムラの剣のうちで、竜飛剣と称する秘術である。
気を鎮めて、切っ先に敵の殺意を吸い、敵の動きを封じるのを身上としている。
しかし、いま、敵の姿は見えなかった。前にあるのは暗闇だけで、かなたは突きあたりで、その突きあたりのところだけぼうっとあかるいのは、左右のどちらかに別の通路が続いていて、そこから射し込むあかりのためだった。
神四郎は、気を鎮めた。敵に対する殺意だけが残った。
神四郎は、暗闇の剣の切っ先に、全神経を集中した。切っ先が動いた。
そう神四郎は思ったが、じっさいは、切っ先が敵の潜んでいるところに吸い寄せられるような感触があった、というほうが正しかったかもしれない。
神四郎は四、五メートル先の床に目を凝らした。
一見、平坦だった。
が、よく見ると、まわりの床とおなじようにたいらだが、どこか闇の色を吸いとってやわらかになっている部分がある。闇のなかでは、ほんのかすかなちがいだった。

神四郎は、駆け、跳躍した。
床の一部がはがれるように持ちあがり、神四郎の行く手をさえぎった、と見えた。
そうではなかった。
平蜘蛛のように床の窪みに潜んでいた猿人が立ちあがり、神四郎に立ち向かったのである。
神四郎は、その猿人の前に跳びながら、暗闇の剣を振った。猿人は、
うわう、ごう！
と底響く絶叫をあげた。
暗闇の剣は、猿人の左肩を切りさげていた。
神四郎は、ふたたび跳躍して、その勢いで暗闇の剣をノコギリのように一往復ひいた。
猿人は、つんのめるように前へ倒れた。跳躍した神四郎は、猿人の背中におりていた。
暗闇の剣が心臓に達するほどに深く猿人の背中に刺し込まれて、猿人は頭をもたげ、両肢をあげさげして苦しがった。
やがて、猿人は動かなくなった。
「神四郎の君、お見事！」
黒矢は、うわずった声でほめた。
「われわれの忍びの術は、猿人には通じない。猿人は、催眠や幻惑には、無縁の生物だからです。その猿人を神四郎の君の剣法は、やすやすとうちとる」



「猿人は、あとふたりだな？」
「そうです」
黒矢は、深くうなずいて、部下たちに、
「氏神の間へ走れ。あそこを曲がれば、見通しもきく。猿人が隠れても、ひと目で発見できるはずだ」
と、命令した。
三人の部下は、風のように渡り、たちまち突きあたりに達して右手に消えた。
「右へまがれば、氏神の間か？」
「そうです」
神四郎と黒矢は、早足で歩きながら話した。
神四郎は、汗が出た。
暑かった。猿人と闘い、体が熱くなって発汗したのではない。超人的な修業を亡父から仕こまれた神四郎は、どんなはげしい動きをしても、たいして汗はかかないようになっている。
いまは、ひどく汗をかいている。
とにかく、通路は暑かった。
「暑いな」
「暑いです」

黒矢は、不安そうに言った。
「いつも、こうか？」
「いや、こんなことはめずらしいのです。もしかすると……」
「どうなんだ？」
神四郎は、あえぎながら訊いた。
喉がからからになって、声もかすれている。
「昔からの言い伝えですが、満月城のなかからネズミが逃げだすほど城内が暑くなると、危険が迫っている徴候なのです」
「ネズミが逃げだす……」
神四郎は、途中で言葉を呑み込んで、足をとめた。
両側の壁の下を、すっ、すっ、と衣ずれに似た音を発しながら、ネズミが走っていた。ネズミの数は、おどろくほどに多かった。
「神四郎の君、急ぎましょう」
「おう」
神四郎は、すでに駆けだした黒矢のあとを駆けた。
「暑さの原因は、なんだ？」
「地熱です」



「地熱、なのか」
「氏神の間に行けば、わかります」
黒矢は、突きあたりを右へ折れた。
神四郎も、その通路へ入った。
その通路は、あかるかった。それに、いままでの通路よりも、ずっと暑い熱気がこもっていた。
叫びが聞こえた。
「争いがはじまっています」
黒矢は、その言葉を残して疾駆した。
おどろくほどに、疾かった。
神四郎は、追った。
途中、通路の両側から蒸気が噴出しているところを通った。顔がやけどをしたかと思うほど熱く、神四郎は駆けながら、思わず、手で顔をおおった。
蒸気のなかを走り抜けると、広い部屋に出た。
円形の部屋で、中央に岩の塔のようなものが立っていた。それに太いしめなわが三本、巻いてあった。
その塔状の周囲は、溝になっていて、なかは湯が充ちていた。塔状のものからは、四方八方

へ蒸気が勢いよく噴出していた。
ふたりの猿人と、黒矢たちが格闘していた。
猿人たちは、血だるまになっていた。……

4

——神四郎は、その部屋が燭台もないのに妙にあかるいのを訝り、猿人たちと黒矢の格闘をつかのま忘れて、見わたした。
天井に、大きな穴があいていた。
その穴から、夜空が見えた。
猿人のひとりが、塔に跳んでのぼりだした。
もうひとりの猿人は、黒矢たちにとり囲まれて、体の各所に短剣を刺し込まれているところだった。
断末魔の叫びをあげて、その猿人は倒れた。
塔にのぼった猿人は、仲間の殺されるのを見て、
うぐう、うぐぐっ……
と、悲しみの声を洩らした。
「降りてこい、ケサラ！」



塔の猿人に向かって、黒矢が叫びかけた。
ケサラというのが、その猿人の名前らしかった。
「殺しはせん。命を助けてやる。おまえらは、玄武会にだまされているんだ。おまえがおれたちの味方をすれば、おまえの妻子の命も保証する」
ケサラという猿人に対して、黒矢は、溝のところまで駆け寄って説得を行った。
猿人は、人間の言葉を理解するらしい。塔のてっぺん近くにのぼって、噴出する蒸気を避けながら、黒矢を見おろして、その言葉に聞き入っている風情を見せた。
ケサラの横顔は、天井の穴から射し込む外の光線で見ると、額が傾斜して、眉のあたりで突き出ている。口はとんがり、首がほとんどなく、頭部は寸づまりの砲弾のような形をしている。なにかの本の挿し絵で見た北京原人の風貌にそっくりだった。
しかし、双眸は大きく、意外に澄んだ輝きを発している。獰猛で、凶暴なイメージはなかった。
「玄武会は、おまえらが不必要になったら、みな殺しにするぞ。われわれ、シノムラの大義を守る者は、かならずやつらに勝つ。降りてこい、ケサラ。われわれと手をたずさえて、シノムラの大義を踏みにじった連中を抹殺しよう」
黒矢の説得は、執拗をきわめた。
ケサラは、とんがった口をさらにとがらせて、うぐぐっ、うぐっ、とうなった。

抗議をしているように見えた。
「ケサラ、おまえの妻子は、すでに満月城に連れてきてある。妻子の命がおしくはないか？」
黒矢は、説得から脅迫に移った。
「うぐわう！」
ケサラは、牙をむいて叫んだ。
うそだ、と言ったように、神四郎には思えた。
この丸い大広間には、通路の出入口がほぼ等間隔で、六つついている。
そのひとつの出入口から、青矢の率いる男たちが飛び込んできた。
ひとつおいた別の出入口からも数人、出てきた。
そのほかの出入口からは、老人や、女、子どもが出てきた。たちまち大広間、氏神の間は五、六十人の神州一族で騒然としてきた。
老人や、女、子どもは、猿人グループの襲撃を受けて、それまでどこかに身を隠すか、逃げまどっていたものらしかった。
神四郎は、青矢を手招いた。
青矢は、走ってきて、
「なんでしょう？」



と、訊いた。
「神州一族は、これですべてなのか？」
「やまと赤軍の一隊が、東京に出て、バケコミの同志と協力して活動を行っています。まもなくもどるはずです。ほかに数人が山中に鹿、ムジナ狩りや、兎とりに出ています」
青矢は、はきはきとした声で答えた。
あかるいところで見ると、きりっと締まった、精悍な表情をしている。
「ケサラの妻子を連れてこい」
黒矢が、青矢に命令した。
「はっ」
と、青矢は答えて、部下をふたり連れて出入口のひとつへ走り込んだ。
「ケサラ、いまおまえの妻子を連れてくるぞっ」
黒矢は、ケサラに対する説得を再開した。
うがっ……
ケサラは、唾を吐きかけた。
「猿人は、われわれに味方をしないと滅びる。猿爪源次は、おまえたちを司る人間だが、われわれ神州一族を裏切った。猿爪をわれわれは、いずれ血祭りにあげる。そのときでは、もうおそいぞ。ケサラ、よく考えろ、おまえは、猿人の副統領ではないか」

があ、がうう！

ケサラは、恫喝の叫びを発した。

神四郎は、額の汗を手で拭った。このときに、さっきまでの耐えられないほどの暑熱がだいぶひいて、まだ蒸し風呂のように暑いが、どうにかがまんできるほどのものになっていることに気がついた。

岩の塔が噴出する蒸気の勢いが、さっきこの部屋へ飛び込んだときに比べると、だいぶ弱まっている。

青矢がもどってきた。

青矢の部下たちは、鎖で縛り、両手の自由を失わせた猿人をふたりひきたてていた。

ひとりは、両の乳房がふくらんでいた。顔の部分と乳首のまわりを除けば、全身ふさふさとした毛に包まれているが、ひと目で女の猿人だということがわかった。

もうひとりは、人間の十歳ぐらいの体格の子どもだった。母親ほどに長くはないが、子どものほうも、全身、毛に包まれている。

「どうだ、ケサラ」

黒矢は、ケサラを見あげて、顔に笑いをつくった。

うぐわ、キキーッ！

ケサラは、それまでのうなり声のような声のほかに、高い、するどい声を発した。



ケサラの子どもが、引き鎖を持っていた青矢の部下の手首に嚙みついた。部下は、悲鳴をあげて、引き鎖を離した。

ケサラの子どもは、岩の塔に駆け寄った。

「うぎァ、うァ！」

ケサラの子どもは、岩の塔に登ろうとして、溝に落ちた。

溝の湯は、岩の塔から噴出する蒸気の勢いが衰えたあと、かえって熱くなったようで、もうもうと湯けむりをあげていた。ケサラの子どもは、その湯のなかへぶくぶくと沈んだ。

猿人は泳げないたちなのか、と神四郎は思った。たとえ泳げたとしても、両手の自由がきかず、鎖の重みもあっては、どうしようもないのであろう。ケサラの子どもは沈んだきり、浮かびあがってこなかった。

溝は、かなり、深いらしい。

ケサラの妻が、かなきり声を発して、溝へ近づいた。青矢の部下が、引き鎖を強く引いた。

ケサラの妻は、溝のすぐ手前で腰から倒れた。

ケサラは、あわてたようすで下へ跳んだ。三本の太いしめなわに、それぞれ一度ずつ足をかけただけで、ケサラは岩の塔の下に飛びおりてしまった。

ケサラは、溝の縁に立って、

キキーイ、キキーイ……

と、怒りと悲しみのないまぜになった叫びをあげた。
溝のなかと、黒矢の顔とに、交互にせわしく目をやりながら、叫び続けた。
「ケサラ、子どもの命を助けたかったら、おれの言うことを聞けっ。聞けば、ひきあげてやるぞ」
黒矢は、溝の縁のそばまで行って、ケサラに言いせまった。
「早くしないと、子どもは死んでしまうぞ」
うぐ、うぐう、ぐう……
ケサラは、引き鎖を引かれながらも、必死に這って溝に近づこうとする妻に瞬間、視線を這わせた。そのあと、黒矢に顔をもどして、
うっうっ……
と、うなってうなずいた。
ケサラの双眸は、潤んで光っていた。
「そうか。よく聞き入れてくれた」
黒矢は、満足そうな笑いを浮かべると、ケサラの子どもの引き鎖をにぎっていた男に目で合図した。
引き鎖が引かれた。引き鎖が溝の縁の岩をがりがりとこすりながら、湯のなかから引きあげられていくのを、ケサラは放心したようにながめた。



すぐに、ケサラの子どもは、湯のなかから顔を出した。
「こっちへこい、ケサラ」
ケサラの子どもが完全にひきあげられて、ぶるっと体を震わせたのを見て、黒矢は、声をかけた。
ケサラは、うなずくと、腰を少し落としてから、跳躍した。ケサラの体は、幅が三メートル以上ありそうな溝を軽々と飛び越えた。
ひとり、杭を打ち込むときに使うような、大きな木槌を持っている男がいた。その男が木槌を振りあげて、ケサラの脳天に振りおろした。
ケサラは、声も出さずに昏倒した。
ケサラの妻子は、悲鳴をあげてケサラに駆け寄った。
「なにをするんだ、黒矢！」
予想もしていなかった事態に、神四郎は、黒矢をなじった。
「卑怯ではないか。はじめから、そのつもりだったのか！」
神四郎に詰め寄られても、黒矢はおちついて、手をちがうというふうに振りながら、
「猿人の頭骨は、鋼鉄のように頑丈です。ケサラは、気絶しているだけです。猿爪に支配されているケサラの意識を、わがほうの思いどおりに変えるには、ちょっと荒療治をする必要があります」

と、言った。

黒矢が話しているあいだに、青矢とその部下がケサラをひきずり、そして、ケサラの妻子をひきたてて、氏神の間を去った。

「神四郎の君、溝をよくご覧ください」

「溝を……」

神四郎は、溝の縁に歩いて湯けむりをあげている湯を見た。

それまで気がつかなかったが、湯の面に大きな魚が腹を見せて浮かんでいた。よく見ると、何匹も浮かんでいる。

いずれも鯉のようだった。

「湯に鯉を入れたのか？」

「とんでもない。この溝は、氏神をきよめる浄水の池だったのです。昔から鯉を放してありました」

「それがどうして湯になったんだ？」

神四郎は、とがめるように訊いた。

「神州満月城は、活動中の火山なのです。われわれの祖先が、ここに氏神を祀り、隠れ城を築いたときから、この氏神の塔は蒸気を噴きあげていました。この氏神の間から少し離れたところからは、湯も出ていました」



「この塔は、なんだ？」

「塔の真下は、というより、氏神の間全体は噴火口だったのです。おそらく、遠い遠い昔、われわれの祖先が安曇野に現れるよりも昔に、この火山は爆発したのでしょう。われわれの祖先がこの火山を発見したときに、すでに蒸気を噴きあげていたということは、この火山は、小なりと言えども、噴火らしい噴火は見せずとも、ずっと活動を続けていた活火山だということです」

「蒸気を噴きあげているていどでは、活火山とは言えまいが……」

神四郎は、シノムラの剣の修業中、亡父に連れられて、立山中腹の室堂平へ行ったときのことを思い出した。

浄土、雄山、大汝、別山を縦走して弥陀が原に降り、夜の高原をけもののように走ってシノムラの剣の術を使い、テンやキツネを仕止めた。室堂平に達して、丸い大きな沼のまわりをまわり、池のなかに飛び込んで泳いだ。

残雪が溶け込んで、氷水のようにつめたかった。

みくりが池と言って、噴火口の跡だ、と亡父は教えてくれた。みくりが池から地獄谷へ行った。そのときは、夜があけていた。

焼けただれたような、赤錆色の山肌のところどころから蒸気が噴き出していた。ぶくぶくと泡を噴いている岩の割れ目もあった。

蒸気や泡には、有毒ガスが含まれていて、知らずに立ち入ったけものは死ぬことがある、と亡父に聞かされた。

「ここの蒸気は、有毒ではないのか？」

「まったく無害です。満月城の蒸気と湯と地熱は、われわれ神州一族にとっては、大いなる恵みとなっていました。真冬も一枚の着物で過ごせ、病気知らずなのは、地熱と湯のお陰です し、蒸気は空気の汚れをとってくれます」

黒矢と神四郎のまわりには、神州一族の老若男女が集まって、ふたりの話に聞き入っていた。

「神州一族は、日本列島へ辿りつく前、南海に浮かぶ火山島の民だったそうです。ここに氏神を祀ったのも、南海のはるかなふるさとと祖先をしのび、火山の恵みを受け、いつまでも生きながらえようという考えからでした」

「さっき、ひどく暑かったが、いまはそうでもない」

「気がかりなことです」

黒矢は、天井を振りあおいで、濃い太い眉をひそめた。

「……」

神四郎は、黒矢をまねて天井を見あげた。

天井の穴から、朝の陽光が射し込んで、岩の塔の上部を照らしている。

「日輪が中天に達したとき、氏神の間のほとんどは、陽光に照らし出されて輝きわたります。



満月が穴から覗ける夜は、うっすらとあかるみ、蒸気が月光に映えてたちのぼり、氏神の間は夢幻の世界の部屋のようになります」

黒矢は、顔を神四郎にもどして、やや感傷的にそう言って、

「しかし、そうした日輪と月の恵みもいつまで続くことか」

と、不安そうに顔をゆがめて続けた。

魁偉な、その相貌がゆがむと、むしろ、苦悩に充ちた表情になって、神四郎は胸をつかれたほどだった。

「満月城が爆発する、とでもいうのか？」

「さっき、城内の温度は、急上昇しました。いままでになかったことです。その前兆はしばらく前からあって、清水がだんだんと温んできて、微温湯のようになってしまったことです。満月城には、昔から岩床に通した水路によって水圧の高い清水の水が引けていたのです。この溝も、いまは湯ですが、数日前までは真水でした。満月城は、湯も湧き、清水も飲めるという、けっこうな環境の、われわれの棲み家だったのです」

「そのけっこうずくめの城から、ネズミが逃げだしたな」

「城内の温度は、いったんさがりましたが、いずれまたあがるでしょう。満月城の寿命はもう長くはありません」

黒矢の声は、沈んでいた。

まわりの人々のうちで、ため息をつく者が何人も出た。
女のすすり泣きが聞こえた。
黒矢は、人々を振りかえって、
「みなの衆！」
と、叫んだ。
人々は、いっせいに黒矢の顔を見つめた。
「われらにとって吉報だ。すでに気づいていようが、明治初期にバケコミを行って、炭焼きとして、外の世界と内の世界の接点に立ち、われら神州一族を内外出入り自由の立場から指導してきた鹿爪族長家の血筋、神四郎の君がもどられた。神四郎の君は、今夕、族長就任の儀を受けられる。氏神の巫子（みこ）として指名された五人を除いて、それぞれの部屋へ立ちもどり、精進潔斎して夕方を待つように」
人々は、家族単位で思い思いの出入口に向かいだした。
五人の若い娘が残った。
いずれも、白無垢のように白い単衣（ひとえ）の着物を着ていた。どの顔も美しかった。
五人の娘の視線は、神四郎に向けられている。熱っぽく、そして、神四郎の心を見透かすかのように粘った視線だった。
神四郎は、思わず照れた。



「神四郎の君、湯殿へまいりますぞ」
黒矢は、神四郎に少し緊張した顔を見せた。
黒矢の言葉遣いは、少し古風なものになっている。

## 5

——神四郎は、夢見ごこちだった。
大きな岩窟（がんくつ）の岩風呂で、氏神の間から六方に延びた通路のひとつを五十メートルほど入った右手にあった。
岩窟の岩壁には、さまざまな彫刻がほどこされている。鹿や熊、カモシカといった動物が多かった。
そうした動物の口から、湯が湧き出るようにしてある。さまざまな動物の口が湯を吐いて、その湯が滝のように流れおちて、神四郎は、湯に漬（つ）かって壮観な思いになった。
湯船も、岩盤をくりぬいたものである。
ヒョウタン形にくりぬいてあり、そのくびれた部分を境に、大きい湯船と小さい湯船に分かれている。
神四郎は、大きい湯船に入っていた。
壁の三か所に燭台が設置されて、湯殿はぼんやりとあかるい。湯けむりが高い天井にたちの

ぼりながら、渦を巻いている。

どこからか弱い風が吹き込んでいるのである。

入口から湯船までは、なだらかな下り勾配になっている。入口までは、湯けむりがたちこめて見通せなかった。

神四郎は、族長就任の儀の前段階として、湯浴みの儀を行っていただく、と黒矢に言われて、湯に入ったのである。

五人の巫女が湯浴みの儀に参加するらしい。

どのような形で参加するのだろう、と神四郎は、不安と期待でおちつかなかった。

都会にいたころ、神四郎は、女に対して純情だった。世間ずれもしなかったが、女をあつかうのは苦手で、性にあわなかった。

それがいまは、女に対して強烈な欲求を抱いていた。女を欲していた。

それも荒々しい感情で欲していた。

飢えている、と言ったほうがいいだろう。

神四郎は、入口のほうを見た。

湯けむりのなかに、赤いものがただようようにして近づいてくる。

神四郎は、目を凝らした。

赤いものは、湯文字だった。赤い湯文字を腰に巻いた若い女が、こっちへ下りてくるのであ



る。

女が身にまとっているのは、湯文字だけであった。

女は、湯船のそばまでくると、湯文字を放り、正座して三つ指をついた。

「一の巫女、参上つかまつりました」

一の巫女、と名乗った女は、うやうやしく頭をさげた。

乳房の豊かな女だった。

乳房が揺れた。

満月城に住み、めったに外に出ることがないためと、湯によく入っているためで、肌が透けるように白かった。

「頭をあげろ」

「はい」

一の巫女は、頭をあげた。目がつぶらだった。

「湯浴みの儀、とはなんだ?」

「族長になるお体を、お浄め申しあげる儀式でございます」

「どのように浄める?」

神四郎は、湯船の縁にあごを乗せた。

女をひき寄せて、その乳房を吸ってみたかった。

しかし、湯浴みの儀式がどういうものかわからないうちは、はばかられた。
一の巫女は、片膝をついた姿勢になって、
「それはご説明申しあげるより、直接……」
と、言って婉然とした笑みを浮かべた。
股間のくさむらが神四郎の目の高さにあった。
一の巫女は、いざるように近づいて、神四郎の両肩に両足をかけた。
「さあ、神四郎の君の思うがままにおやりなさいませ」
一の巫女は、両足を交互に動かした。
くさむらに隠れて、女の部分がゆがんだ。
一の巫女は、神四郎の肩に足をかけたまま、上体をあお向けにした。
神四郎は、思わず顔を一の巫女の股間に埋めていた。部分を吸った。舌を使って、なかをえぐった。
一の巫女の太股に力がこもった。あえぎ声が届いた。
神四郎は、深く舌を挿し入れた。熱く潤っていた。
舌を吸い込むように、はさみ込むように、部分の奥は動いた。
一の巫女は、甘い声をあげた。
神四郎は、舌を使いながら、指で秘豆を愛撫した。



一の巫女は、上体をくねらせた。くねらせるたびに、神四郎の舌は、自由を失った。
「神四郎の君、神州一族の女にお力をお分けくだされ、ませ」
一の巫女は、誘うように下肢をうしろへひいた。
「神州一族が栄えますように……」
一の巫女は、かすれた声で祈った。
神四郎は、湯船からあがって、一の巫女の体にのしかかった。腰を落として、強く挿入した。
一の巫女は、悲鳴をあげた。
顔を苦痛にゆがめた。
「おまえ、はじめてか？」
「はい」
一の巫女は、うなずきながら、身もだえた。
「はじめてなのか、そうか」
神四郎は、興奮した声で言うと、はげしく律動した。
湯の落ちる音のなかに、一の巫女の叫びがまじった。
神四郎は、はてた。
一の巫女は、肩と胸であえいでいた。
神四郎は、一の巫女から離れた。

陽根は、血にまみれていた。一の巫女の股間にも血がにじんでいた。
一の巫女は、起きあがった。そして、
「失礼いたしました」
と、頭をさげてから、立て膝をつくと、湯船から湯をすくって股間を洗いだした。
なまめかしい仕草だった。
「神四郎の君、おかけくださいませ」
一の巫女は、湯船の縁を手で示した。
「おう」
神四郎は、湯船にいったん入ってから、縁に腰をおろした。
一の巫女は、湯船に入り、神四郎の前に体を沈めながらまわり込むと、右手を伸ばして神四郎の陽根をにぎった。
「お洗いします」
一の巫女は、右手にあわせて左手も使って、陽根をもみしだいた。
陽根は萎えていたが、また勢いをとりもどした。
「おまえが好きだ」
神四郎は、一の巫女の乳房のひとつをつかんだ。
一の巫女は、神四郎のするままにさせながら、



「いまは、そのようなことをおっしゃらないでくださいませ」
と、言った。
陽根の血の汚れをとると、一の巫女は、うっとりと神四郎の顔を見あげた。
そのときだった。神四郎は背後に、いきなり、
「二の巫女、参上つかまつりました」
と言う女の声を聞いた。
神四郎は、振り向いた。一の巫女よりも、小柄な若い女が正座して頭をさげていた。
「二の巫女か？」
「はい」
二の巫女は、弾んだ声で答えて、顔をあげた。
顔も小さく、人形のように整った目鼻立ちをしていた。
一の巫女は、湯船のなかを湯音を立てないように進んで、小さいほうの湯船へ入った。
「こっちへこいっ」
神四郎は、手荒く二の巫女の肩をつかんでひき寄せた。そのように、神四郎を荒々しくさせる雰囲気を二の巫女は持っていた。
二の巫女は、体が軽くやわらかかった。
神四郎は、二の巫女を横抱きにして、湯のなかに自分の体を沈めた。

「あ、神四郎の君っ……」

二の巫女は、全身を湯のなかに入れられてもがいた。うふ、ふ、と神四郎は、含み笑って、二の巫女のもがくさまをながめた。二の巫女は、口から湯を吐いた。

神四郎は、湯から二の巫女をひきあげた。

二の巫女は、うらめしそうに神四郎の顔を見て、

「お力をくださいませ」

と、懇願した。

「よしよし」

神四郎は、二の巫女を横抱きにしたまま、湯船の縁に腰をおろした。

二の巫女は、神四郎の唇を求めてきた。

二の巫女の唇は、下唇がいくぶんめくれ気味で、輝くように赤かった。

神四郎は、二の巫女と唇をあわせながら、指で二の巫女のくさむらをかき分けた。

指が潤みを分けた。

二の巫女は、神四郎の唇から離れて、熱い息を洩らした。蜜のような匂いのこもった息だった。

神四郎は、潤みから指を抜いて、二の巫女の腰を少しあげさせた。

あげてできた空間に、神四郎の陽根が立った。神四郎は、二の巫女の潤みに陽根をあてがうと、二の巫女の腰を下におろした。



二の巫女は、表情をくしゃくしゃにした。歯を食いしばって、声の洩れるのを防いでいる。

神四郎は、腰を動かして、深く挿入した。

二の巫女は、耐えかねたような声を洩らした。

「おまえも、はじめてか？」

「――はい」

二の巫女は、声を洩らしながら答えた。

神四郎は、強い視線を感じて、小さいほうの湯船に目をやった。

一の巫女は湯船のなかで立って、神四郎に目を凝らしていた。眸が光っていた。神四郎と目があっても、自分の視線をそらそうとはしなかった。

神四郎は、自分でもわけがわからないような興奮に襲われて、叫び声を出しながら、二の巫女の腰を上下させた。

二の巫女は、目を閉じて、幼児がむずかるように首を振った。

突然、岩窟の湯殿が鳴動した。

燭台のひとつが消えた。

悲鳴や怒声が遠くのほうから届いた。

神四郎は、おどろいて腰を浮かした。

入口のほうから、人が駆け下ってくる音が響いてきた。
「神四郎の君、ご無事か！」
黒矢の声だった。……

## 第三章　卍の家

### 1

――黒矢は、湯けむりのなかから姿を現した。
黒い影が、浮かびあがってきたような現れ方だった。黒矢にかぎらず、やまと赤軍の構成員は、昔の忍者が着ていた黒装束をいまふうにアレンジして、ツナギにしたような服を着ていた。
山中での戦闘服、といったところらしい。
足に履いているのは、地下足袋だった。
「なにがあった？」
神四郎は、二の巫女を膝に乗せて交わったまま訊いた。
「満月城の頂上近くで、爆薬が破裂しました。玄武会が仕かけたものでしょう」
「損害、負傷者は？」



神四郎は、すでに族長としての立場から訊いていた。
女と交わっているところを、黒矢に見られても、別段、恥ずかしいと思わなかった。
すでに、神四郎にとって、黒矢は、股肱の臣なのである。股肱の臣の前では、なにをしていても恥ずかしくはない。
そんな感情は、微塵も湧かなかった。
神四郎は、無意識のうちに、神州一族の生殺与奪の権をにぎる最高権力者としてふるまっていた。
むろん、黒矢は、それをよろこんでいた。
二の巫女を抱く神四郎に対しては、無表情で通している。あたりまえだ、と思っている表情だった。
「頂上周辺の岩壁は固くて、めったなことでは崩れません。直径六尺、深さ三尺ほどの穴があいていただけです。むろん、氏神の間に異常はありません、負傷者は、頂上の見張り所で見張りをしていた者が、両足を失う深手、見張り所つきの神州犬が二匹、即死です」
「その重傷者は、どうした？」
「ただちに、地獄道門に遺棄しました」
「地獄道門？」
「底知れない垂直の自然孔で、蒸気を噴きあげています。われら神州一族は、一族に不要の

体になったと判断されたときは、地獄道門に遺棄されるのです。室町時代中期からの風習だと言われています」

「生かしておけないのか？」

「片手片足を失ったていどならともかく、両足ともとなると、二度と働けませぬ。やっかいな者は、神州一族では不要の徒なのです。本人も、それを心得ていて、楽になる、とよろこんで地獄道門に遺棄されます」

「残酷な気もするが……」

二の巫女は、苦しげな声を洩らした。

長い挿入に、処女だった体がたえきれず、声を洩らしたようだった。

「神州一族は、シノムラのなかでも、血族結婚の度合が高いのです。目、耳の不自由な子、身体の部分に欠損のあるなど、不幸な生まれの形をとる出生者もまた多い。そうした子らで、神州一族にとってなんの能力も発揮しえない子も、残念ながら遺棄されます。老齢すぎて、なんの役にもたたなくなった者も、みずから従容として地獄道門に身を投げる」

「神州一族の生き延びる知恵か。しかたのないことだな」

神四郎は、族長として聞いてうなずいた。

「われら神州一族の男に、超人的な能力者が多いのも、女に美しく、性機能でもすばらしい者が多いのも、血族結婚の積み重ねで先祖から受け継いできた先天的能力が、さらに高められていくからです」



「先天的能力がなければ、修練だけでは限度があろうな」

「とくに、おどろくべきは、熊爪の翁です。翁は、百三十九歳の長寿を保ち、なお壮年のごとくに動きまわることができます。ばかりか、五十里百里先に起こっていることを脳裏に映すことができ、近くにいる者の意識を支配することができます」

「役小角の再来か」

「役行者の神通力に比べれば、十分の一でしょうが、現代では、一般人から見れば、奇跡を行じる人間でしょう。この熊爪の翁は、両目が見えないのです」

「盲人か」

「それでも、目があいているのと変わりません。神四郎の君が、翁に向かって手裏剣を投げたとしても、翁はさっと躱しましょう。夜空を飛ぶコウモリに、石を投げるがごとしです」

「早く会いたいものだ」

「不意にもどり、また不意にいずこかへ立ち去って行かれます」

「なにをしているのだ？」

「人跡未踏の深山の断崖に立ち、仙術を行じておられるのでしょう。ただ、それを目撃した者は、だれもおりませぬが」

「早く会ってみたい」

神四郎は、二の巫女の腰を上下させるのをやめて、二の巫女の乳房をいじった。小ぶりで、弾力のある乳房だった。

「その熊爪の翁にも、意にまかせぬものがふたつあります」

「ひとつは、なんだ？」

「天孫民族、つまり現在の日本国民にバケコミをしたシノムラで、政、財界、学界などさまざまな分野でのしあがり、シノムラの大義を忘れ、シノムラを消滅させようと図っている連中の黒幕であり、玄武会を宰配している人物でもある闇の翁です」

「闇の翁は、どのバケコミの家系かわからぬのか？」

「連判籍をあらためて、一家一家の筋を辿る作業をわれわれは慎重にやりましたが、どうしても闇の翁に行きつくことができません」

「熊爪の翁の神通力をもってしても、その正体はわからないのか？」

「熊爪の翁がこんどもどられたら、わかるでしょうが、いまは……」

黒矢は、ため息をついて、

「闇の翁には、さすがの熊爪の翁の神通力も通じないのです」

と続けた。

「なぜだ？」

「闇の翁も、ほぼ熊爪の翁と同じていどの神通力を駆使するからです。つまり、両方で相殺し



あって神通力を消してしまうのです」

「そんな神通力者が、もうひとりいるのか。熊爪の翁の意にまかせぬもので、もうひとつのものは、なんだ？」

「俗名、鹿爪よし恵。われわれは、バケコミをしたシノムラが一般社会で用いている名を、俗名と称していますが……」

「おれの母ではないか？」

神四郎は、おどろいて声を高めた。

「そうです。神四郎の君の御母君です。御母君は、亡き御父君を裏切り、玄武会にお味方されています」

「なんだと！」

神四郎は、黒矢をにらみつけた。

「熊爪の翁は、闇の翁に色欲を昂進させられて、色欲亡者となったのだろう、と申されたことがある」

「闇の翁のセックス奴隷になっているということか？」

「そうです」

「ばかなっ」

神四郎は、怒りのこもった声で言った。

しかし、黒矢の言ったことを頭から否定できなかった。

亡父と母は、憎しみをもろにぶつけたような喧嘩をした。その直後、母は全裸で河原に駆けて、流れに入り、異常な言動を見せた。

それはおぞましく、おそろしい光景で、いまも神四郎の胸のなかに、はっきりと焼きついて離れていなかった。

あのとき、亡父は母の裏切りを知ったのではなかろうか。

母は、それから数日して家出している。

（闇の翁か）

神四郎は、宿命の敵を見つけた思いになった。

「もうひとつ、つけ加えれば、御母君は、熊爪の翁の、たったひとりの御子なのです。熊爪の翁は、神通力者のせいか、子宝には恵まれなかった。精神エネルギーを超人的に使う人は、子種がない――われわれが先輩から聞かされた説ですが、翁は九十歳を過ぎて、思いがけなく子宝に恵まれた。それが御母君だったのです」

「熊爪の翁は、おれの祖父でもあるのか」

「そのとおりです」

「黒矢、言わなかったことがある」

「なんです？」



「安曇野の生家に着く前、おれは猿人を目撃したんだが、猿人は、そのとき全裸の女を追っていたぞ」

「……」

黒矢は、黙って神四郎を見た。

「その女は、猿人のひとりに犯された。頭領株の猿人のようだったが、ケサラではないのか」

「その可能性は、大いにあります。あとでケサラに聞いてみましょう」

「女は、神州一族の女ではないのか？」

「おそらく、姫でしょう。満月城から行方を絶ち、いまだにもどらないのです。神州犬を使って八方探索しているのですが、手がかりがない。心配です」

「姫とは？」

「俗名、阿部まゆみ。御父君のところへ炭を買いつけにきたシノムラがいたのを、神四郎の君はおぼえておりましょう」

「おぼえている。東京へ出て真っ先に捜したずねてみたら、阿部夫婦は、焼死し、ひとり娘は行方知れずになっていた」

「阿部家は、バケコミとして、東京で生活していた神州一族系のなかでは、数少ないわれわれの味方でした。御父君の命を受けて、東京での情報収集、同志との連絡係を務めていたので、

ときどき報告に御父君の許を訪れておったのです。しかし、それを玄武会に悟られて、殺された。まゆみの姫だけは、九死に一生を得て、安曇野へ逃げ、われわれに救出されたのですが、われわれが出て城内が手薄になったすきに猿人の襲撃を受けて、猿人に拉致されたものと思います」

「どうして、姫なのか？」

「まゆみの姫は、御父君と阿部家がとりきめた神四郎の君の許婚でした」

「おれのフィアンセか」

「申しわけございません」

黒矢は、頭をさげた。

「……」

神四郎は、まゆみ（と確定できないが）をあわれに思った。

猿人に犯されたときの、まゆみの姿勢が目に浮かんだ。

怒りが湧いた。その怒りが、二の巫女のなかで萎えていた神四郎の分身を猛くよみがえらせた。

黒矢は、そのときはもう湯けむりのなかに消えていた。……



## 2

神四郎は、二の巫女の腰を両手で強く締めつけた。

「お許しを……」

二の巫女は、あごを突き出して、哀願した。

「その表情がいい」

神四郎は、二の巫女の腰を上下させた。

神四郎の強い力にかかると、きゃしゃで軽い二の巫女の腰は、あっけないほどに浮き沈みした。

「おやめくださいませ」

二の巫女は、眉根に小皺をつくり、細い三日月型の眉をひくひくとうねらせた。

「感じているな」

「アア、ア……」

二の巫女は、唇を震わせてあえいだ。

神四郎は、二の巫女の表情の変化を見ているうちにはてた。

はてたとたん、二の巫女を湯のなかに突き落としていた。

二の巫女は、叫びをあげて湯に沈んだ。浮かびあがったところを、神四郎は、足で蹴ってま

た湯に沈めた。

二の巫女は、長い髪を湯に散らして、顔だけ湯面に出した。口をあけ、赤い舌をこわばらせて苦しがった。

神四郎は、サディスティックなよろこびに浸った。

「三の巫女、参上つかまつりました」

その声に、神四郎は、二の巫女をいじめるのをやめて振りかえった。

豊満な女が控えていた。

「顔をあげろ」

「はい」

三の巫女は、顔をあげた。

目鼻立ちが大造りで、眸の色に淫蕩なものがこもっていた。

神四郎は、年増だな、と思った。

ほんとうは、二十五、六歳であろう。が、一の巫女、二の巫女がはたちになるかならないかの年ごろだったので、三の巫女が年増に見えたのである。

三の巫女は、満面に媚をにじませて、神四郎のそばへにじりよった。

そして、湯へ入ると、二の巫女に向かって、

「あちらの湯船へお行き」



と、命じた。

二の巫女は、素直に一の巫女の入っている湯船へ行った。

「汚れをとりませんと」

三の巫女は、血のついている神四郎の陽根を口に含んだ。含んで、たんねんにしゃぶると、口から出した。

そして、湯でうがいした。

それを数回、くりかえした。神四郎の分身は、ふたたび、勢いをとりもどしていた。

「おう、たくましいこと！」

三の巫女は、大げさに感嘆して、指の爪で尿道口の近くを刺激した。

「おまえ、何人の男を知っている？」

「数知れず」

「そうだろうな」

神四郎は、湯に手を入れて三の巫女の乳房をつかんだ。

「大きい」

「城中では、私めがいちばんでございましょう」

ホホホ、と三の巫女は口をすぼめて笑った。

そのときはじめて、神四郎は三の巫女が歯を赤く染めていることに気づいた。

「お歯黒、といって、昔の女が歯を黒く染めたのは知っているが、赤くとはな。なんのまじないだ」

「私は、これでも、夫を持つ身。なれど、その夫は討ち死にされました。歯を赤く染めるのは、寡婦の務めでございます」

三の巫女は、古風な言葉を使った。

神州一族のおとなは、昔の言葉と現代語をまじえて使うことが多い。バケコミをした人々との接触があるので、そうした妙な言葉遣いになるのだろう、と神四郎は思った。

「討ち死にか」

「玄武会との戦いで」

三の巫女は、神四郎の分身を少し顔を遠ざけて、目を細めてながめると、

「熊爪の翁様とお形がよく似ておられること。やはり、お血筋は争えないものでございますね」

と、すでに興奮した声で言った。

「おまえ、おれの祖父と寝ているのか？」

「翁がこのお城におられますときには、私が夜伽のお相手をつかまつります」

「百三十九歳で、可能なのか？」

「はい、翁様は、接しても洩らされませんが、何度となく……気がつくと、夜があけている



ということが……」

「こいつう」

神四郎は、三の巫女を湯からひきあげて、交わった。

四の巫女は、まだ十四、五歳と思えるようなおさない顔と体をしていた。神四郎は、その体を後背位の体位で犯した。四の巫女は、子どものような声をあげて泣いた。

神四郎は、つぎつぎに女をかえて交わるうちに、ひどく暴君的になっていた。すべてを支配し、敵を仮借なくつぶし、というより、世のなかを破壊しつくさなければ気がおさまらない、といった虚無に根ざした支配者感情だった。

それぞれが太古の昔から天孫民族に怨念を抱き続けた神州一族の本能的感情であろうか、と神四郎は自分が別の人格に変わっていくような予感におびえながら思った。

神四郎は、自分がよくわからなくなった。

胸にどろどろした怨念が渦巻き、その怨念にどうしようもなくとらわれていくのが、半面、痛快ですらあった。神四郎は、ただ、自分が神州一族の族長であることを過剰なほどに意識することで、精神のバランスを保っていた。

四の巫女を小さい湯船に追いやったとき、鐘の鳴る音が伝わってきた。岩窟の城のなかで鳴る鐘は、こだまする感じで伝わってくるので、音はかすかでもよく響く。

「なんだ？」

神四郎は、巫女たちに問うた。
巫女たちは、鐘の音を聞くと、湯からあがり、入口に向かいだした。
「おい、どうした?」
「湯浴みの儀の時間がすぎたのでございます。五の巫女は、まいりますが、私たちは、お先にこれで」
三の巫女が、神四郎を振りかえって言った。
「そうか」
神四郎がうなずくと、三の巫女は、腰を振りながら歩いて湯けむりのなかに消えていった。
神四郎は、ひとりになると、いらいらした。
足で湯を蹴飛ばして、暴れた。
悲鳴が聞こえた。入口のほうだった。神四郎は、湯けむりがこめてまったく見通しのきかない入口のほうに目を凝らした。
悲鳴は、二度と聞こえなかった。
やがて、湯けむりのなかから全裸の女が現れた。
中肉中背の女だった。
気高い、とりすました顔をしていた。
雛人形の官女の顔に似ていた。年のころは、二十四、五歳だろう。



女は、神四郎の前でひざまずくと、
「五の巫女、参上つかまつりました」
と、あいさつした。
「こっちへこい。いっしょに湯に入ろう」
神四郎は、手招いた。
これまでの巫女に比べて、目の前の巫女には、おとなの抑えた色気があった。三の巫女を少し清楚にした感じで、一、二、そして、四の巫女より、男をそそるものに勝っていた。
五の巫女は、湯に入ってきて、うつむき加減に神四郎に寄りそって、抱きついた。吸いつくような肌をしていた。
「笑ってみろ」
神四郎は、五の巫女の顔を上に向けて言った。
五の巫女は、白い歯を見せて微笑した。
「いい笑顔だ」
神四郎は、五の巫女の口のなかに指を突き入れて、
「歯は、赤く染めていないのか?」
と、訊いた。
「いいえ」

五の巫女は、声を潜めて、
「あがりません？」
と、はじらいを見せて、岩床のほうへあごをしゃくった。
「よし」
神四郎は、五の巫女の手をひいて湯からあがった。
五の巫女は、まだ新婚気分の抜けぬ若妻が夜の寝床に横たわるように、浮き浮きと、しかし、はにかみを見せて横たわった。
そして、ゆっくりと両股を広げて、顔を横向け、目を閉じた。
神四郎は、その一連の仕草にいとしさをおぼえた。
五の巫女は、かすかに腰をくねらせた。
神四郎は、五の巫女の両股のあいだにうずくまり、つかのま、そのくさむらを見つめた。
薄いくさむらだった。そのくさむら越しに見える部分は、よく発達して、赤い色をした貝をほうふつとさせた。
神四郎は、その貝の閉じ目に指を入れた。
蜜液があふれた。
アウ……
五の巫女は、身をよじってあえいだ。



神四郎は、指をひっこめて、五の巫女の体に自分の体を重ねた。少しの時間もおしく、結ばれたかったのである。
神四郎が入っていくと、五の巫女は、首を振って、
ウウウ……
と、こらえかねたような声をあげた。
神四郎は、はげしく律動した。
たちまちのうちに放出しそうだった。
名器、という言葉が神四郎の頭に浮かんだ。
神四郎の分身は、深みにとらわれてもがいていた。おし包んでくるような感触と、奥へなおとり込まれそうな感触が交互にきた。
神四郎は、思わず、うめき声を出した。
射精の瞬間が近づいた。神四郎は、抑えようとしたが、抑えられなかった。
そのときだった。
五の巫女は、体をけいれんさせだした。
目を見開き、いくぶんうつろな表情になって、小刻みに体をけいれんさせている。
「どうしたのだ？」
と、訊いて、神四郎は、不意に顔をゆがめた。

神四郎の口から苦悶の声がほとばしった。
神四郎は、歯を食いしばった。こんなことがあってたまるか、と思ったが、げんに自分の身に起きていた。
神四郎は、五の巫女の体から離れようとした。
神四郎の分身は、万力にはさまれたような力で、五の巫女の膣にはさまれていた。ただ、はさまれているのではなく、膣がはげしくけいれんしているので、力まかせに抜くことができなかった。
浅いところも、深いところも強くはさんでくる。はさまれている、というより、しぼり込まれている、と言ったほうが正確かもしれない。
五の巫女の膣は、凶悪な意思を表していた。大陰唇、小陰唇は、鋭利な刃物と化して、神四郎の分身の根元近くをしぼり込んでいる。
それでいて、分身は萎えなかった。どころか、間を置いて、放出を続けていた。
たえがたい苦痛としびれが、股間から体中に広がっていく。
神四郎は、
「女！」
と、わめいた。
五の巫女は、双眸につめたい輝きをたたえて、神四郎の目を見つめていた。顔は、笑ってい



た。
最前とは、別人のようであった。
「こいつ！」
神四郎は、五の巫女の首を締めようとした。
が、両手は首にかかったものの、しびれて力が入らなかった。
突然、五の巫女は、高笑いをした。
髪を乱し、首を振りながら笑った。
神四郎は、苦痛としびれが体全体に広がり、頭の奥に錐が刺し込まれたような痛みがあった。
「神州一族の新しい族長、鹿爪神四郎、地獄に行け！」
五の巫女は、高笑いをやめて叫んだ。
「おまえは、だれだ！」
意識が薄れていくのをおぼえながら、神四郎は叫んだ。
「闇の翁様の二の弟子、桜子よ」
ホホホ、と桜子と勝ち誇ったように名乗った五の巫女は笑った。
もうろうとして、神四郎の意識は、なくなろうとした。
足音が響いた。
桜子は、はっと入口のほうに目をやった。

ふたりの男が、湯けむりのなかから現れた。
ひとりは、黒矢だった。
「化けもの！」
黒矢は、叫びざま、桜子の頭を蹴飛ばした。
桜子は悲鳴をあげた。
黒矢は、桜子の首を締めた。
桜子は、醜く顔をゆがめて、歯をむいた。
黒矢は、渾身の力を両手にこめた。
桜子は、猫科の動物のような声をあげた。
体のけいれんがだんだんとおさまり、膣のけいれんも弱くなった。
桜子は、ぐったりした。
「殺すのか？」
神四郎は、苦痛としびれが体からひいていくのをよろこびながら、訊いた。
「殺さねば、神四郎の君は、この女とつながったままになりますぞっ」
黒矢は、怒ったように言って、締め続けた。
桜子の膣のけいれんがおさまった。
神四郎は、やっと、桜子から離れることができた。分身は、はれあがり、紫色を呈していた。



神四郎は、桜子の顔と体をながめた。
醜怪な年増の顔と体が、そこにあった。
目尻に皺が寄り、乳房はたるみ、腹部はぶよぶよしていた。
「これが交わっていた女か。どう見ても、四十五、六だ」
神四郎は、キツネにつままれたような顔になった。
「色欲の権化になり、顔と肉体を一時的に若がえらせたのでしょう。神四郎の君に錯覚を起こさせた、というべきかな」
「どうして、こんな女をおれにあてがったのだ？」
「あてがったのではありません。五の巫女は、入口の壁際で殺されていました。桜子は、密かに城内に侵入して、五の巫女になりかわり、神四郎の君を殺そうとしたのです」
「油断もすきもないな。それにしても、おそろしげな術を使う」
「闇の翁に操られているだけです。とすると……」
黒矢は、不安そうに眉をひそめた。
「なにか腑に落ちないことがあるのか？」
「闇の翁は、満月城の近くにきておることになります」
「ほんとうか？」
「……」

黒矢は、無言でうなずいた。
「見つけ出そう。やまと赤軍を集めろ」
神四郎が命令したとき、入口から人が駆け込んでくる音がした。
「首領！」
湯けむりのなかから、太い声が黒矢を呼んだ。
「なんだ？」
「熊爪の翁が、もどられましたぞ」
「おう、翁がもどったか」
黒矢は、うれしさを隠さず、弾んだ声で言った。
神四郎は、黒矢の横顔を見た。……

## 3

——神四郎たちは、湯殿を出て、氏神の間へ急いだ。
涼しい通路だった。
「——この通路は、涼しいな」
神四郎は、前を行く黒矢に訊いた。
「湯殿があり、湯井が近いので、換気には特別の配慮がなされています。それに、この壁の下には、水路が通っており、真水がいまのような温度になるまでは、ひんやりして寒いほどでした」
黒矢は、右手の壁を指差しながら説明した。
ときどき、風が吹き通った。
黒矢との会話がとぎれて、神四郎は、黙々と歩いた。
三十メートル置きぐらいに、岩壁をくりぬいて、燭台が設置してあった。洋灯を使っている場所もあった。
氏神の間や湯殿の燭台は、使用されているロウソクも、直径が三十センチほどもあろうかという巨大なもので、灯火もかがり火のように大きかったが、通路に使われている燭台のロウソクは、杖ほどの太さだった。
「ロウソクの使用量は、たいへんなものだろう？」
「城内には、ロウソク工房があります」
黒矢は、神四郎が質問することによろこびを感じているようすだった。
ところどころ、細い横通路がついている。
覗くと、奥にあかりが見えた。奥がまっくらな横通路もある。
「居住区か？」
横通路のひとつに人影を見て、神四郎は訊いた。

「そうです。神州一族も、盛期には各房に家族が住んでいましたが、いまは使われていない房が多い。さみしいことです」

さっき耳にした鐘の音が聞こえた。

早鐘に似た鳴らし方で、神四郎は急がされて足を速めた。

黒矢は、走りだしていた。黒矢の部下も走った。

神四郎も、ふたりのあとを追って駆けた。

氏神の間は、大燭台に火が点されて、そのあかりが、空間にオレンジ色の無数のきらめきをつくっていた。

天井の穴からはげしい雨が降り込んで、それがあかりに映えているのである。オレンジ色の無数のきらめきは、ときおり、青味がかった色に変化した。

稲妻が射し込むためだった。

外界は、雷雨の最中であった。

岩の塔のまわりに、神州一族の人々が集まっていた。

人々は全員、雨にうたれて、夢遊病者のような、力の抜けたようすで、口からつぶやきを発しながら踊り舞っていた。

老若男女と年齢に差別なく、スローモーに足踏みし、両手をあげてふらふら振っていた。

全裸の者もまじっている。



溝の湯に入って、舞っている者も多かった。

アメノミナカヌシノ
イザナミノ
アマテラス
アメノオシホミミノ
ニニギノ

人々の口から発せられるつぶやきは、そろっており、耳がなれると、古事記、日本書紀でなじみの神や命の名だった。

人々は、亡我の境地に浸った表情で舞い、踊っていた。

「――なにをやっているのだ？　神々の名をつぶやいているようだが」

神四郎は、いっとき、息を呑んで見わたしたあと、訊いた。

「われわれの先祖を日本列島の奥深くに追い込んだ天孫系の神々を呪い、天孫系支配のいまの日本の破壊を祈っているのです」

黒矢は、自分も踊り、舞いたそうな顔をした。

ヒコホホデミノー
ウガヤフキアエズノー

人々の声は、つぶやき調からしだいに謡の調子に変わっていった。
「アマテラス以外は、本来、われわれの先祖の族長たちの名であったのです。それを天孫系大和朝廷は、勝手に記紀にとり込み、自分たちの伝説に生きる神々にしてしまったのです」
「そういうことか」
雷鳴がとどろき、氏神の間に降り込む雨は、一瞬、青味がかった色にきらめいた。
雷雲は、真上にきているようだった。
鐘の音が響きわたった。
人々は、それを合図に、踊り、舞うのをやめた。
黒矢が、神四郎を振りかえって、
「神四郎の君、早く裸に――」
と、うむを言わせぬ調子で言った。
「おう」
神四郎は、雄叫びのように答えた。
氏神の間には、妖気をはらんだ熱気がこもっていた。その熱気が神四郎を興奮させていた。



陶酔感をともなった興奮だった。
神四郎は、裸になった。ブリーフを脱いで全裸になると、神四郎が脱ぎ捨てた衣類は、すべて黒矢の部下がどこかへ運びさった。
「神四郎様、あそこへ」
神社の巫女姿そっくりのかっこうをした若い女が、神四郎のそばへ走ってきて、岩の塔を指差した。
一の巫女だった。
「おう」
神四郎は、夢から醒めたように、放心している人々のあいだを縫って、溝を渡り、岩の塔へ歩いて行った。いつのまにか、二、三、四の巫女が、岩の塔の真下に控えていた。いずれも、一の巫女とおなじかっこうだった。
二の巫女が、
「上へ」
と、どこかキツネが憑いたような感じのする、ひきつった表情で岩の塔の頂上を差した。
神四郎は、雨にうたれながら、岩の塔をのぼった。
岩の塔は、湯殿へ行く前に見たときに比べると、だいぶ勢いを減じていたが、各所から蒸気を噴き出していた。

神四郎は、しめなわや、出っ張ったところを足がかりに、上へ上へとのぼっていった。蒸気は、顔にあてると、熱かった。

三本巻かれているしめなわのうち、もっとも高いところに巻かれているしめなわに足がかかると、もう頂上に頭が出た。

頂上は、ほぼ三角形の平面だった。人ひとりがやっと立つことのできる、小さな平面で、磨かれており、御影石のような光沢を放っていた。

神四郎は、その上に立った。

雨がひとしきり強く降り込み、轟音のような雷鳴がとどろいた。満月城のどこかに落雷したにちがいない。

神四郎は、下を見おろした。

岩の塔の高さは、十メートルほどだった。

人々が神四郎を見あげていた。

鐘の音が響きわたった。

人々は、ふたたび、舞い、踊りだした。

アメノミナカヌーシノー

イザナミノー



アマテラスー

人々の呪いの声は、だんだんとヒステリックな高音に変わっていき、手や足の動きも速まっていく。

「――みなの衆、舞いながら聞くがよい！」

氏神の間に、しゃがれた、だが、よく通る声がゆきわたった。

神四郎は、きょろきょろした。

その声の主はどこにいるのか、壁のなかから湧き出てきたように、声の発せられた場所がはっきりしなかったからである。

「われら神州一族に、新しい族長が誕生する。いま祖霊ましまします氏神の塔に立たれておられる神四郎の君が、その人である！」

声は、神四郎のほぼ同じ高さにある、正面の壁から出ていた。

神四郎は、目を凝らした。

その壁には、半円状の棚がある。

岩棚だった。

岩棚は、窪みを持っているように見える。

「これより族長就任の儀を行う！」

その言葉とともに、岩棚の窪みから人影が立ちあがった。
山伏の姿をしていた。右手に、錫杖をにぎっていた。真鍮の錫杖らしく、にぶい黄色い輝きを発している。
「熊爪の翁！」
下から黒矢が呼びかけた。
「なんじゃ？」
山伏姿をした熊爪の翁は、錫杖を振って応えた。
錫杖の頭についている環が鳴った。
「神四郎の君は、私の推察するところ、御父君をはるかに凌駕される知力と勇武と通力を具備されております！」
「さもありなん！」
熊爪の翁は、おそろしく小柄でやせているように見えた。長いあご髭をたくわえて、双眼は炯々として、神四郎のところから見ても不気味に光っていた。
「よろしくお願いつかまつります」
黒矢は、そう言うと、人々のなかに入って踊りはじめた。
「舞え、呪えぇ！」
熊爪の翁は、身長よりもはるかに長い、真鍮製の錫杖をタクトのように軽々と振った。



ヒコホホデミノー
ウガヤフキアエズノー

人々は、恍惚と踊り、舞った。
「――天地の成るときより、世に在りて、まつりごとを司り、代々の大王のもと、天雷より猛く栄え、善神の加護を享けて今日にいたりし神州族の新しき族長になりたもう神四郎の君よ！」
熊爪の翁は、錫杖の先端をまっすぐ神四郎に向けた。
「わが光を失いし眼を凝視されよ！」
熊爪の翁は、錫杖の先端で輪を描いた。
神四郎は、熊爪の翁の炯々とした双眸がものを見ることができないとは、どうしても信じられない思いだった。
しかし、熊爪の翁の双眸は、炯々としていても、ものを見ていなかった。さっきから、おなじ方向に向けられたままだった。つまり、目の見える人間の双眸のように、見ているものに焦点があっている感じがないのである。
「わが目を凝視されよ！」

熊爪の翁は、また、おなじことを言った。
神四郎は、熊爪の翁の双眸を凝視した。
「両手を逆八の字にあげられよ！」
神四郎は、言われたとおりに、両手をあげた。
熊爪の翁は、錫杖を大きく振りまわして、
「神州族の祖神よ、われらの新しき族長のために、聖なる精気をお授けあれ！」
と、叫んだ。
そのあと、翁は、人々にあわせて呪いの言葉を唱えだした。

アメノミナカヌーシノー
イザナミノー

神四郎は、熊爪の翁の双眸から自分の視線をはずせなくなっていた。体も細い筋金によって張り子にさせられたように、動かなくなった。
それが不快ではなかった。人々の呪いの唱和が、体のなかに響きわたって、くすぐったいような感覚があり、やがて、その感覚は陶酔に変わった。
「われらの祖神よ、われらの族長に猛き心と英知をお授けあれ！」



熊爪の翁は、しきりに錫杖を振りまわした。その振りに力がこもった。ヒュッ、ヒュッ、と空気が鳴った。
錫杖は、目にもとまらぬ速さで振りまわされた。
翁は、ときおり、奇声を発した。
神四郎は、陽根が猛くなったのを意識した。
ごろごろ、と地鳴りの音を聞いたような気がした。岩の塔がいきおいよく蒸気を出しはじめたのは、その直後だった。
四方八方へ蒸気は、噴出し、白き霧のようにあたりにたちこめて、氏神の間を白く濁らせていった。
神四郎は、自分が雲の上にいるような錯覚を起こした。
蒸気の白さと濃さは、少し異常にすぎた。乳色で、溶け込むようにたちこめて、それがはじめはむっと熱風のようだったが、いまは熱くもなんともなかった。やがて、神四郎は乳色のなかに包み込まれた。
雨さえも乳色のなかに溶け込んでしまうのか、神四郎をうたなくなった。
神四郎は、快感の波が体のなかをうねり寄せるような感覚に、思わず、
「アアアア……」
と、感きわまった声を洩らした。

なにも見えなかった。

いや、ただ、ひとつ、見えるものがあった。

それは、光を失っているという熊爪の翁の双眸だった。

その双眸は、乳色のなかを、じっと神四郎に向けられたまま、ただよっていた。

「――神州族第五百九十九代の族長に申し述べる。ならびに、神州族の民にも申し述べておきたい！」

熊爪の翁の双眸が語った。

語った、というより、神四郎の頭のなかにその言葉が浮かんだのである。

耳を通して伝わってくる言葉でないのに、頭が痛くなるほどに響き、迫力に富んでいた。

「いまよりは、新しい族長がわれら栄ある神州族を統べる。神州族の族長は、天地のすべてを統べる。それを妨げる敵を、族長は討ち滅ぼされよ！」

神四郎の体は、けいれんした。

「われらの祖神が祝福の徴をたまわる！」

その言葉の直後に、岩の塔から神四郎の足の裏に電流のようなものが伝わり、それは体の隅々に達して、神四郎の頭のなかは、白く濁った。

神四郎は、けいれんしながら、感きわまった声を洩らした。

猛々しく立ち、揺れていた神四郎の分身が白い体液を放出したのは、そのときであった。



神四郎は、一瞬、気が遠くなった。……

## 4

――体がぐらっと傾いた気配に、神四郎は、はっとして体勢を立てなおした。

自分を包んでいる乳色が薄くなった。岩の塔は、蒸気の異様な噴出をやめたようだった。

「――みなの衆、よく聞け！」

薄れた乳色のなかに、熊爪の翁の声が響きわたった。こんどは肉声だった。

「わしの命は、まもなく尽きる」

下のほうから、どよめきが伝わってきた。

「みなの衆に、いまここで言い遺しておきたい。わしのないあと、闇の翁、玄武会との凄絶な戦いがはじまろう。しかし、あわてる必要はない。闇の翁は、われらが新族長をいただいたことに脅威をおぼえて、安曇野に出てきておる。きゃつが外へ出たのは、わしの知るかぎり、はじめてであるぞっ！」

乳色はさらに薄れて、天井の穴が見え出した。

神四郎の体を雨がたたいた。

「しかし、神州一族の民よ、おそれる必要はない。新族長があるかぎり、闇の翁はいつか討ちとられよう」

熊爪の翁は、話し続けた。

「悲しいことを告げなければならぬ。この神州満月城のことだ。神州満月城は、わしの予知するところによれば、旬日を経ずして崩壊しよう。地底の赤い流れが上に向いておる。われらが生を享け、育み、われらを守ってくれた神州満月城の寿命も、あますところ、あとわずかだ！」

熊爪の翁の声は、大音声だったが、うち沈み、聞く者の胸をついた。

下から、女たちの泣き声が伝わってきた。

「騒がず、泣かず、よくわしの言うことを聞くがよい。三日間、城内に留まり、安曇野から敵を追え。そして、四日目に名残の宴を催すがよい。五日目、祖霊ましまします、この城をあとにせよ。新族長に、どこまでもつきしたがうがよい」

氏神の間は、もとに復していた。

神四郎は、熊爪の翁に目を凝らした。

翁は、肩にかかるほど長い白髪を振り乱しながら叫んだ。

「われらに、またさすらいの試練が訪れる。行きつくところがどこか、どのような生活が待っているのかは、わしにもわからぬ。ただ、われら神州一族を裏切り、シノムラの本義を踏みにじった輩を討つ、という目的は果たさねばならぬ！」

熊爪の翁は、錫杖を振った。



下の燭台の火に映えて、錫杖は金色に輝いた。

「わが祖父よ、熊爪の翁に聞きたい！」

神四郎は、大声で言った。

「どのようなことでござる？」

「ふたつ、わからぬことがある。ひとつは、闇の翁の正体だ。そして、もうひとつは、シノムラについて、熊爪の翁だけが知っているという重大な秘密とは……」

神四郎が、全部、言いきらないうちに、熊爪の翁は、錫杖を高く振りかざして、

「それは――」

と、言った。

爆弾が落ちたかと思えるほどの轟音とともに、稲妻が天井の穴いっぱいに射し込んで、氏神の間は揺らいだ。

神四郎は、一瞬、電気椅子にかけられたようなショックに、体を硬直させた。神四郎が常人だったら、岩の塔から転げ落ちて即死していたろう。

神四郎が体を硬直させながら目撃した光景は、身の毛のよだつ、そして、幻想的なものだった。

稲妻が青とオレンジの光彩を放ちながら、熊爪の翁の振りかざした錫杖を包み、とたんに錫杖は灼熱した輝きを発し、赤い焔を放った。

熊爪の翁の体も、薄赤い光彩を放ち、その光彩のなかにまぎれて、光彩そのものと化してしまった。

神四郎は、かっと目を見開いて、その光景を見ていた。

落雷だ、とは理解しても、不思議な落雷だった。音響と光彩がおさまったあと、熊爪の翁が立っていた棚は、がらがらと崩れた。

下で悲鳴があがった。

崩れた棚の岩塊による怪我人は、出なかったようだった。

神四郎は、床に散乱した岩塊のなかに熊爪の翁の姿を探したが、どこにも見あたらなかった。

黒矢が神四郎を振りあおいで、

「族長！」

と、叫んだ。

神四郎は、岩の塔を降りだした。

下に着き、溝を渡って、岩塊が散乱しているところへ歩んだ。

「翁は？」

神四郎は、散乱した岩塊のあいだを歩いていた黒矢に訊いた。

「熊爪の翁は、消滅してしまわれたみたいです」

黒矢は、神四郎を振りかえって、怪訝な表情になった。



「そんなばかなっ」

「しかし、翁の死骸は、どこにも見あたりません。あれに錫杖があるばかりで」

黒矢は、少し先を指差した。

焼けただれて、黒く変色し、なお薄いけむりをたちのぼらせている錫杖が、岩塊のあいだに見えた。

「落雷で、祖父は消えたのか」

神四郎は、天井を振りあおいだ。

雨は、やんでいた。天井の穴の真上を稲妻がよぎり、直後に雷鳴がしたが、それはすでに遠くのものであった。

神四郎は、熊爪の翁が自分の問いに答えようとして、それは、と言ったのか、それとも言い澱んだのか判断がつかなかった。

いずれにしても、神四郎が知りたかったふたつの謎は、神四郎自身が解明しなければ知りえなくなったのである。

「――闇の翁が安曇野に入ってくる、と祖父は言った。油断するな」

神四郎は、きびしい表情になって黒矢に言った。

「わかっています」

「三日間、城内に留まれ、と祖父は言い遺した。その間に、安曇野に入っている敵を追お

う」

「はい」

黒矢は、うなずいて、

「三日間で、族長は、神州一族のすべてをとりしきるようにならなければなりません」

と、言った。

5

——熊爪の翁の予知したところによれば、旬日のうちに崩壊する神州満月城での、つかのまに終わる神四郎の生活がはじまった。

満月城に残る神州一族は、家族単位の生活と、婚姻前の若者組の生活に分かれていた。

家族は、一戸の房に住み、子どもを除いてさまざまな使役の義務を持っていた。

城内の保全、狩り、漁、山菜とりなどの食糧調達、やまと赤軍の軍務などがおもな使役だった。

若者組は、男と女の組に分かれて、それぞれの組長のもとに、集団で寝起きしていた。満十三歳になると、若者組に入る義務がある。

男の組は、やまと赤軍のメンバーを兼ねている者が多かった。やまと赤軍の副首領の青矢は、男組の組長である。



女組は、城内で使うロウソクなどの日常用品の製作、管理を主な務めとしていた。

女組から三の巫女を除く巫女が選ばれており、殺された五の巫女を除いて神四郎の夜伽を勤めた。

三の巫女を含めて、巫女は、族長のみが自由にできる。

ほかに寡婦組があり、男組の性処理の相手をしていた。三の巫女のみ、この寡婦組に属しているが、性に習熟した者として選ばれたのではなく、族長もたまには汚れた女をお好みになるという配慮からだそうである。

黒矢は、家族を持った生活をしていた。

寡婦組は、一生、ふたたび夫を迎えることはないが、妻を失った男は何回でも妻をめとることができた。神州一族の血筋を絶やさないためであろう。

族長は、それ自身の口から発する言葉が法であり、一族の生殺与奪の権をにぎっていた。

城内の生活は、鐘を鳴らすことで秩序立ったものになっていた。

起床は、夜あけとともに鳴らされる鐘でいっせいに行われた。氏神の間に全員集まり、祈りをする。

それから、朝食をとり、朝食後は、使役、任務につく。夕食は日没どきで、神州一族は、一日二食だった。

やまと赤軍だけは、常時、臨戦態勢をとっている関係で、ふつうの生活慣習に左右されなか

った。

神四郎にとっての城内生活の第一夜は、めくるめくものであった。

族長の間は、氏神の間にいちばん近いところにあった。三十畳ほどの部屋と、十五畳ほどの寝室に分かれていた。

三十畳ほどの部屋には、いつも湯の充たされた、楕円形に彫りえぐられた湯船があり、いつでも湯浴みできるようになっていた。

一族のおもだった者を集めて評定を行うことのできる設備もあり、部屋の出入口には常に護衛が立っていた。

畳敷きになった寝室は、壁の上部に換気孔がうがたれて、いつも空気が澄んでいた。神四郎は、その寝室に敷きのべられた豪華な夜具のなかで、第一夜の夜あけを迎えた。

起床の鐘の音が鳴る前に、目醒めたのである。

となりに、一の巫女が寝ていた。

神四郎は、かけ蒲団をめくりあげて、一の巫女の乳房に手を触れた。

乳首を軽くつまむと、一の巫女は、はっと目をあけた。

「お目ざめでございますか」

あわてて身を起こそうとする一の巫女を、

「かまわぬ」



と、抑えつけて、神四郎は、その体に乗った。

族長になった神四郎は、言葉遣いまで族長らしいものになっている。

「おまえと、この夜具で二度、交わった。もう一度、交わる」

「うれしゅうございます」

一の巫女は、腰をくねらせた。

神四郎は、すぐに挿入した。一の巫女は、細く口をあけてあえいだ。

神四郎は、数回、律動して、挿入したまま、一の巫女の体をかかえあげた。一の巫女は、顔をのけぞらせて、甘い声を洩らした。

鐘が鳴った。

「いいではないか」

神四郎は、かまわず、あぐらをかいた姿勢になり、一の巫女の両肢に自分の腰をはさませた体位で交わり続けた。

神四郎がはてたとき、一の巫女は体から力が抜けてしまったかのようにぐったりしていた。

「おい」

神四郎が揺すると、一の巫女はあわてて、白無垢様の単衣の着物を着ると、広い部屋へ出ていった。

神四郎は、いっとき間をおいて広い部屋へ出ていった。

湯船の縁に、一の巫女は、神四郎の着替えを用意して控えていた。
「お体をお浄めください」
「わかった」
神四郎は、湯船に入って簡単に体を洗った。
あがると、一の巫女が体を拭いてくれ、服を着せてくれた。
やまと赤軍のメンバーとおなじ服装だった。
神四郎は、満月城内に入ってから、自分が一般社会の生活感覚を忘れていることに気づいた。
城内の見るもの聞くことに、異様さをおぼえなくなっている。
神四郎は、氏神の間へ出た。
祈りは、神四郎が岩の塔へ立ち、
「アメノミナカヌシノー！」
と、叫ぶことからはじまった。
人々は、神四郎に唱和して、舞い、踊った。
祈りのあと、神四郎は、黒矢、青矢をともなって族長室の大広間にもどり、話しながら朝食をとった。
神州一族の朝食は、玄米を蒸したものに、野草、果実、鳥獣の肉などを副食としてとる。いわば、古代食であった。



一の巫女が、かいがいしく、神四郎たちの給仕にあたった。
その食事中に、やまと赤軍の一員に連れられてケサラが入ってきた。
「こっちへこい」
黒矢が手招いた。
ケサラは、前屈みに、おずおずといった風情で、黒矢の席のそばにうずくまった。
「味方になったようだな？」
神四郎は、黒矢とケサラを見比べて笑った。
「どうにか」
黒矢は、神四郎に答えてからケサラに顔を向けると、
「猿人の、いまいる棲み家に、族長とわれわれを案内するんだ」
と、言った。
うぐ……
ケサラは、うなずいた。神四郎は、ケサラの双眸が澄んでいることに好感を持った。
「猿爪という猿人の司は、いつも猿人といっしょに行動しているのか？」
うぐ、うぐぐ……
ケサラは、鼻をうごめかせながら、二度、首を振った。
「いつもというわけではないのだな」

うぐ……

ケサラは、うなずいた。

「猿爪め、八つ裂きにしてやる」

黒矢は、魁偉な容貌に憎しみをたぎらせて、神四郎に、

「ゆうべ、ケサラにたずねたところ、まゆみの姫と思われる女を犯した猿人は、ケサラではなく、猿人の統領のバサラだそうです」

と、告げた。

「バサラか」

神四郎は、ケサラではなかったことになぜかほっとした。

「まゆみが救出できるといいが……」

「たぶん、救出できるでしょう」

黒矢は、自信ありげに言った。

大広間に、ひとりの男が転げ込んできた。

顔を血だらけにして、右手の手首から先を失っていた。

「青槍ではないか。どうした！」

黒矢が血相を変えて、立ちあがった。

「われわれ東京にいた隊は、東京を出て、安曇野に入ったところで、玄武会、猿人の連合した集団に襲われました」

青槍と呼ばれた男は、苦しそうに肩で息をしながら報告した。

「ほかの者は、どうした？」

「全員、討ち死にしました」

「なに――」

青矢は、絶句した。

「東京で、なにかわかったか？」

神四郎に訊かれると、青槍はもがくような感じで、立ちあがりながら、

「神四郎の君、いや、もう族長でしたな、卍の家がわかりました」

「卍の家？」

神四郎は、黒矢に説明しろといったように顔を向けた。

「そうか、卍の家がわかったか」

黒矢は、顔によろこびの色を浮かべて、椅子にかけてから、

「シノムラの本義を踏みにじり、政、財、学術、教育界をのぼりつめた連中が、月一回、密かな謀議を凝らす謎の館です。これには、闇の翁も出席することになっています」

「ほう」

「じっさいは、闇の翁が連中を指導し、命令を下す会議と考えていいでしょう。われわれは、

卍の家の在りかを長いあいだ捜していたのです」
「それで卍の家は、どこにある？」
神四郎は、性急に訊いた。
「北八ヶ岳の麓です。場所は、胸に刻みつけてございます」
「でかした」
黒矢がほめた。
「この月の謀議は、三日後に行われます」
「われわれが満月城をあとにする日ではないか」
神四郎の言葉に、青槍は、きょとんとなった。熊爪の翁の遺言を知らないためのようだった。
「まあいい、わけはあとで話す」
黒矢は、もどかしそうに言って、
「ほかに話すことはないか？」
と、訊いた。
「三日後の謀議に備えて、元首相の八木義栄と、天日相互銀行会長の野沢寛治は、ゆうべすでに卍の家に到着しているそうです」
「到着しているのか」
黒矢は、しめた、といった表情になった。



「八木も野沢もバケコミの家系なのか？」
「そうです」
「あの元首相の八木がなあ」
「八木は、現首相の鈴原にも影響力を行使している民友党の長老です。八木の家系は、シノムラの本義をいちばん早い時期に踏みにじっている」
「容赦はできぬな」
神四郎は、唇を噛みしめた。
「青矢」
黒矢は、緊張した声を出した。
「はっ」
「ただちに、卍の家へ向かう。仕度をせよ」
「かしこまりました」
青矢は、即座に立ちあがると、大広間を駆け出ていった。
「首領っ」
青槍が悲痛な声で言った。
「なんだ？」
「私を地獄道門に追ってください。もう神州一族のために働けません」

「族長、どうします?」
黒矢は、神四郎に伺いを立てた。
「なんだ、手の一本ぐらい、手あてを受けて、神州一族のために、もうひと働きしろ!」
神四郎は、立ちあがりながら叫んだ。
闘志がたぎった。胸に怨念が渦巻いた。
神四郎は、こわい目で壁の一点をにらんだ。……

## 第四章　滅びの鐘

### 1

——神四郎は、やまと赤軍のメンバー九人とケサラをひきつれて、神州満月城を出た。
霧が深かった。前夜は雷雨、あけると霧深い日で、神四郎は、きのう起きたことが霧の奥のできごとのように信じられなかった。
(祖父の体は、どこへ消えたのだろう?)
百三十九歳の長寿を保ち、科学では説明のつかない神通力を有し、役小角の再来とも言われている熊爪の翁のことだ。この世と訣別するときに、忽然と消失しても、死のまぎわの神通力



と思えば、なっとくもいく。
黒矢、青矢でさえ、独得、奇怪な発声で、敵を金縛りにし、神州犬を自在にあやつる術を持っている。いや、自分にしてからが、シノムラの剣を修める過程で身についた敏捷性は、けものじみていた。
シノムラの剣の修業は、単に剣術や跳ね、飛び、駆ける能力をつけるだけではなかった。
体質から改善していくのである。
神四郎は、シノムラの剣を修めているあいだ、生水以外は飲まなかった。酒、ジュースの類はむろんのこと、茶、湯さえも口にしなかった。
女を断つのは、言うまでもない。
そして、肉と穀物は食さなかった。
食べたものと言えば、赤松の甘皮、熊笹、槐の実、生漆、サルノコシカケの名で知られている茯苓などの木草、および、その実だけで、栽培した野菜類を食することも亡父から禁じられていた。
シノムラの剣を修めるのに余分になるものは、いっさい、体から抜くのである。脂肪と余分な筋肉、血は、そうした食生活で抜くことができた。最少限必要な強靭な筋肉と、病気に罹らない良質の血液と、強い衝撃にも耐えられる骨をあわせ持った体になり、血みどろの苦しい訓練に立ち向かうことができた。

シノムラの剣を修めるのは、そうした体質にならなければ、かなわなかった。

神四郎の修めたシノムラの剣が、改善された体質と、きびしくすさまじい訓練と、もって生まれた素質のたまものなら、熊爪の翁は、奔放な精神エネルギーの持ち主として生まれて、それを過酷な修業で磨き、法を修めることで、あの驚異の神通力をものにしたのであろう。

前夜、就寝前に、神四郎は、熊爪の翁の神通力の性質について、黒矢に質問した。

黒矢の答えは、天耳通、他心通、宿命通の三つが翁の神通力の秘密だ、ということだった。

天耳通とは、常人では聴覚できない低い音波を聴くことができる通力だという。

聴くだけでなく、その音波で言葉を発せるから、天耳通に通じた者同士では、黙って会話ができる。

言葉として発せられる音波の届く範囲から、熊爪の翁と闇の翁は、黙っていて会話ができたはずだという。

さらに、天耳通を究めると、常人の頭のなかに、自分の言葉を送り込むことが可能で、熊爪の翁は、それができた。

他心通とは、他人の心を読みとる通力で、どんなに本心を偽っても、他心通の会得者にかかるとわかってしまう。

熊爪の翁は、百キロ離れた他人の心を読みとることができた。

宿命通とは、他人の過去の歴史を知る通力のことで、熊爪の翁は、一万年さかのぼって、その人の血流を辿ることができた。



この三つの通力をあわせ持てば、神通力の修験者とはなるが、さらにおそろしい通力がある。

役小角が会得していた神変通だった。

弘仁年間（八一〇―八二三）に選述されたとされる僧景戒の『日本霊異記』に、小角に関する、つぎのような記述がある。

〈……夜毎に五色の雲に挂りて冲虚の外に飛び、仙宮の賓と携わり、億載の庭に遊び……所以に年四十余歳もて更に巌窟に居り、葛を被、松を餌み、清水の泉に沐み、幻界の垢を濯ぎ、孔雀の呪法を修得し、奇異の験術を証し得たり。

……すなわち伊図（伊豆―著者註）の島に流しき。時に身、海上に浮びて去ること陸を履むがごとし。体、万丈に踔り、飛ぶこと翁る鳳の如く、昼は皇命のまにまに嶋に居て行ない、夜は駿河の富岳の嶺に往きて修す……〉

神通力を得るための日常生活と、どのような神通力を見せたかについて述べられている。小角の神通力は、神変通にまぎれもなかったようである。

熊爪の翁は、百歳にして、空中に浮かぶことができ、百十歳にして、水の上を歩いて渡ることができた。小角の神変通にはおよびもつかないが、やはり翁の神通力は、神変通の域に入りかけていたと考えられる。

黒矢らの忍びの術は、性質からいうと、熊爪の翁の神通力と神四郎のシノムラの剣との中間

点に位置するものらしい。

「――まあ、中途はんぱということです。浅い、と言ってもよいでしょう」

黒矢は、自嘲の笑いを浮かべたものであった。

「しかし、闇の翁が熊爪の翁と遜色のない神通力を駆使するとすると、おれがやつを殪すことはたいへんむずかしいのではないか？」

「族長、シノムラの剣は、神州一族の王道ということを、お忘れなきよう。シノムラの剣に比べれば、神通力もしょせん外道。最後は勝てぬ、と翁もよく申されておりました。自信をお持ちください」

そのときの黒矢の言葉を思い出して、神四郎は、腰に差した暗闇の剣の柄に手をやった。

霧は、しきりに流れていた。

なだらかな道を降りきって、神州満月城の麓に下ると、霧のなかから、人の息遣いが聞こえてきた。

「――敵か？」

神四郎は、前を歩く黒矢に質した。

「いや、狩りの者たちがもどってきたところでは」

黒矢は、振りかえらずに答えた。

ふたりの男が、霧のなかから現れた。



四肢を縛って鹿を吊るした長い棒を、前後に別れてかついでいた。ふたりは、神四郎に会釈をしてすれちがった。

「ご苦労」

と、神四郎は、ねぎらった。

大鹿なのに、ふたりは息も切らさず、神州満月城を巻きあがっている坂道を駆けのぼっていく。

灌木がまばらに生えた草原に入った。

「北八ヶ岳までは、どのくらいある？」

「登山道や、一般道路を使えば、百二、三十キロほどでしょうが、われわれは、われわれの道で行きますから、およそ二百キロでしょうか」

黒矢は、前方に目をやりながら答えた。

吹き流れる霧が、霧の奥を透けて見せることがあって、そのときは遠くの光景までがわかった。ブナの樹林が広がっている。

神四郎は、自分がまだ満月城の位置さえよく理解していないことに気づいた。

「この地は、安曇野のいちばん奥地にあたると思うが、常念（岳）の北方か、それとも、大天井（岳）の南面か？」

「大天井と槍（ヶ岳）を結ぶ神州一族しか知らぬ隠れ道の線上にあります。一般人には、人

跡未踏の地で、まぎれ込んだら二度と生きてもどれません」

「そんな秘境が残っていたか」

「一般人が隠れ道にまぎれこめば、われわれの見張りが惑視の術によって、もとの場所まで誘い帰しますから。向こうは、キツネに化かされたように思うだけです」

黒矢は、低い声で笑った。

「里人が、よくないことが起こるとして昔から入ってはならぬと言い伝えている山は、シノムラの領域だったのかもしれんな」

「手にあまれば、惑視の術によって遭難させるだけです。また、われわれの姿を見られた場合は、記憶を失わさせるか、殺してしまいます。殺した場合を、一般人は、昔から神隠しにあった、としていたのでしょう」

「うむ。全国各地に神隠しの例は、あるらしいな。ところで、二百キロというと、着くのは、夜半か？」

「もう少し早く到着しなければなりません。族長は、都会生活が長かったから、足が弱りましたか？」

黒矢は、からかった。

「いや、だいじょうぶだ」

シノムラの成年男子は、かつて一日約六十里を疾駆すると言われた。



シノムラでも、もっとも高地に拠っている神州一族は、深山幽谷を日に五十里、つまり二百キロ疾る。

「途中、一度、休憩します……おっ」

黒矢は、かすかに叫んで耳をすました。

「首領、猿人の叫びではないですか？」

青矢が黒矢の前に出て言った。

青矢は、黒矢とちがって、端正な顔だちをしている白面の青年だった。年は、神四郎より、ひとつふたつ若いだろう。

「そうだ」

黒矢は、うなずいた。

うぎあーう……

こんどは、神四郎の耳にもはっきりと聞こえた。

「猿人だな、ケサラ？」

神四郎は、すぐかたわらにいたケサラに確認した。

うぐ……

ケサラは、肯定した。

ケサラは、神四郎になついていた。神四郎がケサラに好感を持っていることに気がついてい

るのだ。

「黒矢、猿人が遠からぬところにいるのか？　襲撃の前兆か？」

「いえ、合図でしょう。猿人は、二十キロ先の仲間に合図を送ることができる。順送りで、われわれが城を出たのを、卍の家に知らせているのです」

「二、三分のうちに、われわれのことは、敵に知れるか」

「やむを得ませぬ。行きますぞっ」

そのときにはもう、黒矢は、霧のなかを駆けていた。神四郎も、残りの者もケサラも駆けた。いつのまにか、彼らの前を五匹の神州犬が疾駆していた。彼らと神州犬の疾るところは、まるで黒い影が流れているようだった。

神四郎は、疾りながら、うしろ髪のひかれるここちになった。

神州満月城には、やまと赤軍の戦闘員五人と、神州犬七頭を敵の襲撃に備えて残してきた。あとは、老人と女子どもだけであった。優勢な敵に不意をつかれたら、ひとたまりもあるまい。

神四郎は、不吉な予感を無理にうち消して疾った。……

## 2

――北八ヶ岳の雄大な景観に、翳りある、いくぶん妖精がかった女性の息づかいが感じられるのは、池と樹林の優美さのためだろう。



北八ヶ岳は、北八ツの略称で親しまれている。池と樹林を堪能するには、北八ツの山腹や谷あいを曲がり込みながら、しだいに高みにのぼっていく県道の茅野佐久線を歩くといい。

カラマツ林が点在し、そのカラマツ林をなだらかな広がりとして眼下にとらえるとき、その向こうには、浅間の男性的な山谷や、西上州の入り組んだ峰々のながめが望める。

カラマツ林が目立たなくなり、斜面一面にクロビの樹林が見わたせるところから、県道を歩くのをやめて、その樹林に分け入るのもいい。

元首相の八木義栄は、ロールスロイスの、応接室ふうに造られた後部のシートに深々と身を横たえながら、いま走ってきたところを歩いてきたつもりで景観の描写をしていた。

少年時代は、島崎藤村や夏目漱石の作品を読みあさったことがあり、いたずらに文章を書きちらしたこともある。

じっさいに、この近くを歩いたこともある。七年近くも前のことだった。

そのころ、八木は、民友党の幹事長として、権勢をふるい、総裁の座をうかがうところにいた。まだ四十代の若さだった。

総裁派閥、ということは、現職の首相を親分にいただく派閥でもあるが、その派閥のなかで、八木は実質的なリーダーになりあがっていた。

総裁派閥の三分の二を掌握していたからである。

カネにものを言わせてのことだった。

るのだ。

「黒矢、猿人が遠からぬところにいるのか？　襲撃の前兆か？」

「いえ、合図でしょう。猿人は、二十キロ先の仲間に合図を送ることができる。順送りで、われわれが城を出たのを、卍の家に知らせているのです」

「二、三分のうちに、われわれのことは、敵に知れるか」

「やむを得ませぬ。行きますぞっ」

そのときにはもう、黒矢は、霧のなかを駆けていた。神四郎も、残りの者もケサラも駆けた。いつのまにか、彼らの前を五匹の神州犬が疾駆していた。彼らと神州犬の疾るところは、まるで黒い影が流れているようだった。

神四郎は、疾りながら、うしろ髪のひかれるここちになった。

神州満月城には、やまと赤軍の戦闘員五人と、神州犬七頭を敵の襲撃に備えて残してきた。あとは、老人と女子どもだけであった。優勢な敵に不意をつかれたら、ひとたまりもあるまい。

神四郎は、不吉な予感を無理にうち消して疾った。……

## 2

——北八ヶ岳の雄大な景観に、翳りある、いくぶん妖精がかった女性の息づかいが感じられるのは、池と樹林の優美さのためだろう。



北八ヶ岳は、北八ツの略称で親しまれている。池と樹林を堪能するには、北八ツの山腹や谷あいを曲がり込みながら、しだいに高みにのぼっていく県道の茅野佐久線を歩くといい。

カラマツ林が点在し、そのカラマツ林をなだらかな広がりとして眼下にとらえるとき、その向こうには、浅間の男性的な山谷や、西上州の入り組んだ峰々のながめが望める。

カラマツ林が目立たなくなり、斜面一面にクロビの樹林が見わたせるところから、県道を歩くのをやめて、その樹林に分け入るのもいい。

元首相の八木義栄は、ロールスロイスの、応接室ふうに造られた後部のシートに深々と身を横たえながら、いま走ってきたところを歩いてきたつもりで景観の描写をしていた。

少年時代は、島崎藤村や夏目漱石の作品を読みあさったことがあり、いたずらに文章を書きちらしたこともある。

じっさいに、この近くを歩いたこともある。七年近くも前のことだった。

そのころ、八木は、民友党の幹事長として、権勢をふるい、総裁の座をうかがうところにいた。まだ四十代の若さだった。

総裁派閥、ということは、現職の首相を親分にいただく派閥でもあるが、その派閥のなかで、八木は実質的なリーダーになりあがっていた。

総裁派閥の三分の二を掌握していたからである。

カネにものを言わせてのことだった。

八木がのしあがるには、カネにものを言わせる以外になかったのである。学歴もなく、一般社会から見れば氏素姓もよくなかった。

八木の生家は、八ヶ岳山麓の中山道筋で、江戸時代から馬を使って運搬をして賃金を得ていた馬子の系譜に属していた。

馬子は、どこの地域でも団結が固い。

八木の生家が属していた馬子組織は、バンカと言った。

どういう漢字をあてるのかは、定かでなかった。

馬奴家、という説もある。

馬奴——馬子の蔑称か——の家柄、という意味であろう。

バンカは、昔からシノムラと縁が深い。シノムラが、まだ組織的なバケコミをはじめなかったころ、ひとりふたりと落ちこぼれをよそおってバンカにバケコミしていった例がある。

一般社会の偵察の使命を負ってのことだった。バンカは、シノムラにとってバケコミを行いやすい社会だったのである。

山に依存するところの多い民だったからである。

八木の家は、その祖父の代にバンカにバケコミをした。

父親の代には、バンカのなかでいい顔になっていた。八木の父親は、馬子をやるかたわら、博労もやり、カネまわりがよかったからである。



馬の売り買いでサヤを稼ぐ博労（馬喰）の社会にも、シノムラ出身者は多い。馬産地の近くの山々は、おおかたシノムラの生活圏でもあった。

八木は、十三歳のとき、父親に連れられて、富士の五湖をめぐり、籠坂峠、笹子峠、大菩薩峠を経て秩父にいたり、つぎには、荒船高原をよぎり、碓氷峠を越えて、浅間山の中腹を伝い、戸隠、黒姫の山に遊び、そこから別のルートを通って生家へもどったことがある。

昼夜を問わず、歩いた。道なき道を歩いたのである。

父親は、おそろしく足が早かった。

「おまえに、あわせているのだ」

と、父親は言って、

「おまえも、シノムラに残っていたら日に四、五十里は歩いたろう」

と、続けた。

歩くのではなく、疾るのだ、とつけ加えた。

シノムラ、という言葉を八木が聞かされたのは、そのときがはじめてだった。

父親が連れまわってくれた山々を結ぶ道は、シノムラの道だったようである。

登山家が見ても、道とはわからない道だった。

自分の素姓がシノムラだ、と知った八木は、十五のとき、父親のカネを持ち出して上京した。

夜学に通い、カネになることならあらゆる仕事に手を染めて、二十代の後半には、八木土建と

いう会社を起こした。

八木土建は、あらゆる分野にバケコミしているシノムラ出身者の相互扶助組織を巧みに利用することで、潤沢な資金と仕事量を確保することができた。

その資金を惜しみなく使って、八木は、政界に食い込み、保守政党の実力者の歓心を買い、そのうしろ楯で、衆院選にうって出た。

そして、当選した。まだ二十八歳のときで、日本は戦後の復興期でバイタリティに富んだ人間を必要としていた。

八木のような雑草の強さを持つ人間なら、たとえ腹黒く陰謀家であっても、才覚ひとつでのしあがれた時代である。

八木にとって才覚とは、カネにものを言わせることと、相手の弱味をにぎって利用することだった。

相手の弱味をにぎることは、バケコミしたシノムラ出身者の組織を使えば、わけのないことであった。

八木は、いろいろと身辺にトラブルはあったものの、四十代になってから急速に頭角を表し、党、内閣の要職に就くようになった。

とくに闇の翁に気に入られたことが大きかった。

闇の翁のことは、話に聞いてはいたが、会ったのは、四十歳のときだった。



会わせてくれたのは、二十代のときからつきあいをはじめ、その仲をめぐってとかくのうわさを立てられている大里源次であった。

大里は、山梨県の韮崎の出身で、その生家はもともと韮崎の西方の山中に潜み住んでいたシノムラに属していた。

一般には、大里は立志伝中の人物と受けとめられているが、経歴がはっきりしないので、怪物政商とも言われている。

戦後、進駐軍と癒着し、その廃品を闇に流して大もうけした。そのときに得た資金を使って、タクシー、観光、流通業など幅広い事業を経営し、拡張していくいっぽうで、株の買い占め、不動産の買い占めなどを行い、巨大な私財を得た。

政治の世界には、みずからは入り込まなかったが、大里の息のかかった政治家は多い。とくに、八木には肩入れした。

民友党内で、八木が政治力をつけていくにしたがい、大里と組んで利権を漁ることが多くなった。

大里が政商と言われるゆえんである。

闇の翁は、シノムラの出身であることはわかっていても、その正体はベールに包まれていた。ただ、言えることは、シノムラがはじめて組織的に一般社会になだれ込んだ明治初期には、すでにバケコミをしていたということと、闇の翁の不興を買うと、どんな有力者になっていよ

うと、奇怪な、不審な死をとげたり、廃人になってしまうことであった。

闇の翁と会って、八木は、すくむものをおぼえたものだった。こちらの心を読みとられ、どんなちいさなうそも見抜かれた。過去になにをやってきたかも、細大洩らさず知られている。なによりもおどろいたのは、先の見えることだった。闇の翁の忠告を受け入れていれば、まちがいなかった。

忠告というより、命令だった。

その意のままに動かざるをえなかった。

闇の翁が、ふだん、どこで、どのような生活をしているかは、なにも知らなかった。月に一回、卍の家に現れる。

そこで八木は、闇の翁の教えを乞うたり、その指示を受けた。

昭和四十七年の暮れ、八木は、首相の座を退き、総裁を辞した遠藤首相のあとを襲って総裁の座を勝ちとり、首相になることができた。

八木自身、自分が権力の頂点につくのは、もう少し先のことだと思っていた。後継者は、衆目の一致するところ、保守本流を歩いて、財界主流がこぞって後援した別の人物であった。八木は、その人物に勝ち目はないと踏んでいたからである。

ところが、遠藤首相が引退する直前に卍の家を訪れたとき、闇の翁から、

「時はいま、総理総裁になるがよい」



と、指示されたのである。

大里らの同席者も、協力を約した。

八木は、一日、卍の家の周辺の山林を歩きまわって考えた。

そして、闇の翁の言を信じよう、と結論を出したのだった。

そのとき、いま左手に広がっているクロビの林を煩悶しながら歩いている。

八木は、カネの力とシノムラ出身の有力者の支援を得て、遠藤派の大半を味方につけて八木派の旗あげをした。他派閥の支援もとりつけて、果実をもぎとるように政権を手中にした。

しかし、八木内閣は、八木自身も連座した大疑獄事件によって倒れ、短命に終わっている。八木は、その政治生命も終えたかに見えた。

ところが、八木は、首相の座を退いた後も、民友党きっての大派閥の領袖として、民友党に隠然たる勢力を誇り、野党にも影響力を持った。民友党の総裁になるには、八木の意思を無視できなくなっている。

闇の翁が、八木をそうした立場にしたのである。

卍の家のメンバーは、闇の翁を別にして七人だった。この七人が、バケコミをしたシノムラのすべてを牛耳っている、と言ってよい。むろん、総帥は闇の翁だった。

闇の翁は、

「シノムラの使命は、終わった。これからは、シノムラの歴史を闇に葬り、いかに旧シノム

ラ家系の人間を社会の要所要所に配し、日本の支配層に仕立てるかが課題だ」という考え方に立っている。

それは、シノムラ家系だということに、たえず劣等意識をかきたてられ、それを出世のバネにしてきた八木にとっては、快い言葉だった。

積極的に天孫民族のエスタブリッシュメント（日本のほんとうの支配層）と婚姻し、シノムラの血を薄めてしまうことが、シノムラを実質的に消滅させる早道になる。

闇の翁は、そう説いた。

八木も、大里も、シノムラ家系以外から妻を迎えた。その子どもたちは、シノムラ家系以外の家に嫁がせたり、嫁に迎えたりしている。

子どもたちや妻は、シノムラのことはなにも知らない。

「連判籍を廃棄せよ」

闇の翁は、以前、そう命じた。

各地のシノムラや、一般社会にバケコミをした旧シノムラ系組織は、連判籍をもっとも大事な血統書として秘匿していた。

その連判籍が焼却された。

ただ、ひとつを除いて。

その残った唯一の連判籍が、神州満月城に秘匿されている。



神州一族は、いまだに時代錯誤的なシノムラ思想にとらわれているシノムラだった。

八木らには、怨念に憑かれた亡霊に見える。連判籍という秘密を一般に公表されたら、八木らのいまの地位はあやうくなろう。

名実ともにエスタブリッシュメントに入り込もうとしている八木らにとって、神州一族と連判籍は、禍を呼ぶ亡霊と呪い道具に見えた。

エスタブリッシュメントの人々は、まだまだ血筋や家柄にこだわる。シノムラの存在を知り、八木らがシノムラ家系の人間だと知ったら、はげしい拒絶反応を起こすにちがいない。

神州一族の抹殺と、唯一の連判籍の奪取を目的として、玄武会が結成されたのは、そんな背景があってのことであった。

玄武会は、シノムラ家系に生まれた元暴力団員や、元サーカス団員が多い。

バケコミをしても、正業についた者や、社会でそれなりの地位に這いあがった者とはかぎらない。暴力団員や、都会の浮浪者の群れに投じた者もいる。

戦前のヤクザや、無法者、ドヤ街居住者には、戸籍のない者が多くいた。そのうちの少なからぬ者が、シノムラの落ちこぼれであったと言える。

バケコミをして、うまくいかなかったシノムラ系の人間が、ヤクザ組織やドヤ街に身を投じていく下地は、じゅうぶんにあったのである。

玄武会は、そうしたシノムラ家系の無法者と、おなじくシノムラ家系のサーカス団員によっ

て組織された。

サーカス団員に、シノムラ家系の人間が少なからずいたのは、もって生まれた敏捷さを買われてのことである。

八木らにとって頭が痛いことは、一般社会で生活しているシノムラ家系の人間にも、神州一族に心を寄せる者がいることだった。

そのあぶり出しの作業をして、ひとつひとつひねりつぶしていかなければならなかった。

「――おまえ、こっちへこい」

八木は、ドアに体を寄せて、八木から離れてかけていた若い娘をひき寄せた。

まだ十七、八歳のようだった。

血の気のない顔をして、感情も死んでいるように見えた。

しかし、美しい。

髪が長かった。

八木は、髪をつかんで、その少女の上体を自分の膝におしつけた。

フォッフォッ、と悪鬼のような声で笑って、もういっぽうの手で少女の乳房をなでさすった。

少女は、あらがわなかった。どうされようとも、無表情で通した。

少女は、阿部まゆみだった。

バサラを統領とする猿人に捕われて、猿人たちの棲み家に連れていかれて、そこでさんざん



に嬲られた。

そのときのショックで、感情がにぶくなり、正常に思考することができなくなっていた。

猿人たちは、そのまゆみを卍の家に連れていった。

詰めていた玄武会員にひき渡し、処分をまかせるためだったが、たまたま着いたばかりの八木の目に止まった。

八木は、前夜、まゆみをくりかえし犯した。そんな若い娘をおもちゃにしたのは、女好きの八木にとってもひさしぶりのことだった。

「――まゆみをどうしますか？」

けさ、猿人を司っている猿爪が訊きにきた。

「おれがもらう」

「殺さなくていいのですか？　まゆみは、神州一族では由緒ある家の娘ですが」

猿爪は、不服のようだった。

「しばらく預からせてくれ」

八木は、強引にまゆみを自分のものにした。

卍の家のありあわせの服を着せていたが、センスのよい、いいものを着せたくなり、わざわざ軽井沢までロールスロイスを走らせて高級ブティックに行き、服を買って着せた。

いまは、その帰り道だった。

「まゆみ、東京へもどったら、いいマンションに住まわせ、ぜいたくをさせてやるぞ」
八木は、好色そうに頬をゆるめて、まゆみのスカートを、尻のほうからまくりあげると、臀部の割れ目に手を這わせた。
「うーむ。若い娘はいいものだのう」
六十歳をこえたにしては、ゴルフ焼けしたその顔は健康そうで、精力にみちあふれていた。
ロールスロイスは、クロビの樹林に通された道に入った。
私道だった。
クロビの林は、地に苔が生えて、射し込む夕陽に映えて、妖しく光った。
八木は、まゆみの髪をつかんで、その顔をあげさせると、その唇に自分の分厚い唇を重ねた。
まゆみは、無表情だった。
ロールスロイスは、クロビの樹林のなかにある山荘に着いた。二階建ての、一見地味だが、がっしりとした造りの建物だった。
その建物のまわりには、クロビの樹林を縫うようにして高い塀が張りめぐらされていた。塀の外側には、有刺鉄線が高く張りめぐらされてあった。
ロールスロイスは、あけられた門を通過して、山荘玄関の車寄せに止まった。
横手の駐車場には、黒塗りの外車ばかりが七、八台駐車している。
八木は、まゆみを引き出すようにして外へ出ると、玄関へ入った。



白髪の品のよさそうな紳士が、迎えに出た。双眸には険があり、どこかつめたいものをただよわせている。
「――大里さんが、さっき着いた」
その紳士は、天日相互銀行会長の野沢だった。
「おう、きたか。ところで闇の翁は、まだお着きになっていないか？」
「まだだ。だが、ほかのメンバーは、みなそろっているぞ」
野沢は、放心したように立っているまゆみを一瞥すると、八木に顔をもどして、
「あんたは、あい変わらずだな」
と、笑った。
「おたがいさまだ」
「なにがおたがいさまだ。そんな悠長なことは言っておれんぞ。新しい族長をいただいたやつらが、こっちに向かっている」
「なんだと？」
「夜半には、着く。ここにいるか、ひきあげるか、みんなで相談していたところだ」
「重要な相談があるのだ。そんな簡単にひきあげられるものか」
八木は、気負った声で言うと、かたわらにきた玄武会員に、
「おれの部屋へ入れておけ」

と、まゆみをおしやりながら、せかせかと靴を脱いだ。……

3

——会議室に、八木と野沢が入ると、ひそひそと話し込んでいた五人の男たちが顔をあげて迎えた。

「たいそう愉しそうだな」

頭のはげあがった、ダルマのような顔の男が八木をひやかした。

大里である。

「そう言うな」

「たいへんなことになった。やつらがくる」

落語家のようにひょうきんな顔をした男が、その顔に似あわぬ深刻そうな声で言った。

社会国民党の日下美幸だった。

「聞いた」

八木は、二度うなずいて、日下の隣の椅子にかけた。野沢は、大里の隣の席についた。

日下は、社会国民党の書記長、委員長を歴任して、現在は、党最高顧問をしていた。元老的な立場にあり、党三役を牛耳る実力を持っており、社会国民党の法王と異名をたてまつられていた。



社会国民党、略して社国党は、衆議院議員三十二名の小政党ながら、駆けひきに長けて、政治が重大な局面に立つと、キャスチングボートをにぎるので知られている。

それは、日下の政治力に負うところが多かった。

日下と八木は、仲がよい。八木が総理大臣で民友党総裁のとき、八木内閣が苦境に立ったり、解散を欲したりすると、常に民友党の反主流派よりも、社国党のほうがずっと協力的で、その意に添う行動をとった。その癒着ぶりが一部で不可解に思われたりしたものだが、ともにシノムラ出身者なら当然のことである。

「玄武会は、なにをしているんだ?」

八木は、だれにともなく訊いた。

「目立たなかったろうが、この卍の館のまわりは、猿人と玄武会によって二重三重の防衛線が張られている」

大里が言った。

「別動隊が、神州一族の岩城を衝く。不意を襲われて、留守のやつらはみな殺しになるだろう。連判籍も灰になるだろうよ」

日下は、黄色い歯をむき出して笑った。

「これで闇の翁がいらっしゃれば、こわいものはない。ここをひきあげる必要もない」

八木は、安心したようにうなずいて、

「しかし、あのお方は、いつも不意に現れて、不意に消える」
と、続けて言って苦笑した。
「私は、あのお方の素顔を知らん」
野沢は、はばかるような言い方をした。
野沢が支配している天日相互銀行は、もともとバケコミをして成功したシノムラ出身者が、自分たちの資金を運用し、困窮しているシノムラ出身者の救済をはかる無尽会社として出発したもので、その設立は、昭和二十七年にさかのぼる。
その年は、シノムラにとってその歴史を画する年であった。
昭和二十七年七月一日に、住民登録令が実施になったからである。
この登録令は、全国民の住所をその居住地の自治体役場に登録させようというもので、ねらいは、無戸籍者の一掃である。
登録は、全国いっせいに行われて、住民登録の手続きとともに、米穀通帳、国民健康保険、国民年金、選挙人名簿などの登録もあわせて行われた。これによって、国民のすべてが台帳に登録されたことになり、それまでの戸籍では掌握できなかった国民の実体が完全に掌握できることになった。
台帳に載っていない人間は、選挙権も、義務教育を受けることも、運転の免許をとることもできなくなる。米などの配給も受けられなくなる。



シノムラは、終戦直後からかつてない規模でバケコミを開始し、それぞれ、さまざまな方法で戸籍を手に入れたり、あるいは役場に出頭して新戸籍に編入されていったが、バケコミをしても、戸籍なしで通した者もいた。
全国住民登録の実施前は、戸籍がなくても生きていけたのである。
ところが、この全国住民登録で、いちおう法律上は、日本国のどこにも無戸籍者はいないことになった。バケコミをして戸籍なしで通してきた者も、登録を行い、まだ山中に残っていたシノムラも、最後のバケコミを行った。
しかし、神州一族だけは、このときの最後のバケコミでも、一部が行っただけで、山に残った。
無尽会社であった天日相互銀行が、相互銀行に発展、改組されたのは、神州一族を除いてシノムラが最後のバケコミをしたという背景があったのである。
天日相互銀行は、シノムラ出身者の強い絆(きずな)をバックボーンに発展を続けて、預金残高においては都市銀行の域に入ろうとしている。
「あのお方の顔は、この場のだれも知らん」
「いったい、あのお方は、どこの、なんというシノムラから出ているんだ」
「それを口にするのは、タブーだ」
「そうだったな」

七人は、潜めた声でしゃべり続けた。

八木、大里、野沢、日下以外の三人は、新興宗教の教祖と右翼の大立て物と大新聞の社主であった。

新興宗教の教祖は、河中日興（かわなかにっこう）といって、戦争直後にバケコミをして、孝正道教団を創設した。彼は、徹底した現世利益を説いて、短時日のうちに信者を増やし、現在は公称信者数四百五十万人の日本屈指の教団に成長している。そして選挙の支援と献金を通して、与、野党を問わず、多くの政治家を動かす力を持っている。

右翼の大立て物は、関谷介山といって、ことし八十五歳になるが、かくしゃくとして足腰も壮年のようだった。

バケコミをしたのは、大正の初年、父の代だったが、若いときは現役のシノムラとして北海道、東北北部を除く全国の山野を歩きまわっている。

シノムラの忍びの心得もあり、その経験を生かして、太平洋戦争中は、大陸で特務機関を組織し、後方かく乱、敵要人の暗殺などの特務活動を行った。

戦後は、一転して右翼を名乗り、特務機関の生き残りを配下に強引な活動を行い、またたくまに、日本の右翼団体の半数近くを支配下におさめた。シノムラ系の広域暴力団にも影響力を行使し、関谷、といえば、一流財界人も有力政治家も顔色を変えるほど、おそれられている。

大新聞の社主は、東城秀一で、その大新聞の名は読日（よみにち）日報であった。



東城は、バケコミの三代目で、社主としても三代目だった。つまり、祖父が読日日報を創刊したのである。

読日日報は、昭和十年代に、飛躍的に部数を増やして、三大新聞の一角を占めた。

強引な拡張を行ったからだった。

新聞の拡張は、いまも昔も似たようなものだが、風来坊的、おちこぼれ的な拡張員によって行われることが多い。

彼らは、新聞販売店から販売店へと渡り歩く。

昭和十年代に読日日報が大飛躍をとげたのは、バケコミをしたシノムラの最初の受け皿になる例が多かったからである。バケコミをして新聞拡張員になった彼らは、各地を渡り歩くうちに、戸籍を入手してもっとまともな職業に入っていった。

読日日報は、終戦後の昭和二十年代にも、飛躍的に部数を増やしている。

やはり、バケコミをしたシノムラの新聞拡張員に負うところが多かった。

現在の読日日報は、部数九百万、名実ともに三大紙の首座にある。

「さて、闇の翁がこられる前に、例の相談をしようではないか」

八木が、右手で自分の膝をうった。

「いまの首相の後継者をだれにするか、ということだね」

関谷介山が、鼻を鳴らしながら言った。

「そうだ。いまの首相は、今月末に辞任することになった」
「ほう、予定より早まったじゃないか」
大里が、おどろいたように、八木に顔を向けた。
「早めた」
八木は、こともなげに言った。
「後継は、だれですか？」
野沢が、鶴のような首を伸ばして訊いた。
「われらシノムラ出身者の同志から出すか。それとも、一回、見送って、ふつうの者を推すか、だが」
八木は、上の唇を舌で舐めまわしながら、みんなを見まわした。
「小木曾がいい」
それまで、目をつむっていて睡っているのか起きているのかわからない表情をしていた河中日興が、目を大きく見開いて、
「うちの教団は、マスコミの集中的攻撃を受けている。信者も動揺している。強圧的なマスコミ操作をしてもらわないと、うちの教団はがたがたになる。小木曾にやらせろ」
と、言った。
「身から出た錆だ」



読日日報社主の東城が笑った。
「なに？」
河中は、色をなして東城をにらんだ。
「信者から巨額の寄付を集めすぎる。それに、あんたの私生活は、異常すぎる。アラビアの王様のハーレム顔負けだ。マスコミの好餌になるよ」
「他人のことを言えるのかっ」
「まあまあ」
八木が、手を振ってふたりをなだめた。
小木曾とは、民友党の派閥の領袖のひとりで、次期総裁候補のひとりだった。
「小木曾は、見送ったほうがよかろう。彼の力でいまの政局を乗りきるのは、ちょっと荷が重い。無理にやらせてボロが出て、ひょんなほうへ転んで、シノムラの存在が知られたら、元も子もなくなる」
関谷が、首を振り振り、言った。
それに同調する声が起きた。
「おれと小木曾は、これまでずっと仲がわるいようによそおってきた。あんまり仲がいいと、シノムラ出身者同志の体臭がにじんで、ふつうの者に変に思われるからな。日下君となら、党がちがうから、逆に、いい面もあるが……」

「そうだそうだ」
日下が、だみ声で相槌をうった。
「しかし、神州一族の問題もある。やつらをうまく始末できなくて、万々が一、シノムラの存在が世に出るようなことになる、と考えた場合、小木曾を総理にしておいたほうが、よくはないかねえ」
八木は、また、みんなを見わたした。
「この問題は、むずかしいのう。闇の翁の裁断をあおぐ以外にないだろうよ」
関谷が、そう言ったとき、部屋がノックされた。
「おう、入れ」
大里が応えると、ドアがあけられた。
玄武会員の若者が、緊張して、
「闇の翁が見えられました」
と、告げた。
「おっ、きたか」
「じゃ、上の部屋へ」
二、三人が腰を浮かしかけた。
「三十分ほど待て、という翁の伝言です」



「なぜだ？」
河中が、咎めるように訊いた。
「翁様は、例の女性を連れておいでです」
玄武会員は、無表情に答えた。
「あの後家か？」
八木があきれたように、目を丸くして、
「神州一族がこちらへ向かっているというのに、のんきなことよ」
と、ため息まじりに言った。

4

——豪華な夜具が敷き延べてあった。
まわりには、屏風が張りめぐらせてある。屏風の絵は、狩野派系の絵師の手によるものらしい。
あかりは、赤いスタンドだった。屏風の一枚に、竹林に虎の絵が描かれており、虎の縞模様が赤いあかりを吸って、黒く艶やかに輝いていた。
掛け蒲団は、めくられている。
敷き蒲団に、女が横たわっていた。

豊満な体だった。肌が白い陶器のように光っている。
年齢の見当は、ちょっとつかないが、四十の坂は越えているだろう。
しかし、乳房に張りがあり、顔も美しく、容色に衰えは見えなかった。
うふ、ふふふ……
陰にこもった含み笑いが聞こえた。
その含み笑いを聞いたとたん、女は、身をくねらせた。
笑い声の主の姿は、見えなかった。
女は、かぼそい声を洩らして、あえいでいた。
「どうじゃ、わしの笑い声を耳にしただけで、体が熱くなるようになっただろうが」
声の主は、からかった。
女は、骨がなくなったかと思えるほどに、くにゃくにゃと体をうごめかせた。
「よし恵」
声の主は、女の名を呼んだ。
よし恵は、びくりと体をけいれんさせた。
「一時間半後、いや、もっと早いかもしれんが、神州一族がここへ攻めてくる。新しい族長、つまり、おまえの息子の神四郎を連れてな」
きゃあう……



突然、よし恵は、気味のわるい叫びをあげた。
よし恵の体のなかに、えたいの知れない魔物が棲み潜んでいて、それが叫んだような感じだった。
「まだ、おまえのなかに、神四郎への母性愛が潜んでおる……」
声の主は、つかのま、間をおいて、
「それを殺せ。女の業を出せ。女そのものになりきれ」
と、催眠術師が催眠をかけるときのような口調でかたりかけた。
よし恵は、尺取り虫のように、体をのたうたせだした。やはり、体のなかの魔物がもがいているふうに見えた。
「おう、母性愛がもがき苦しんでいる。苦しむがよい。うんと苦しめ」
声は、屏風のひとつから発していた。
その屏風の絵は、ほかの屏風の絵とはおもむきを異にしていた。
峰に立ち、虚空をにらむ山伏と竜が描かれていた。
竜は、黒雲に乗り、山伏に赤い目を向けていた。口を開き、牙と舌を見せている。
声は、その竜の口から発していた。
「おまえの精神は、女の業そのものになった。しかし、体には母性愛がまだ巣喰っている。それを追いだすんじゃ」

よし恵は、また奇怪な叫びをあげた。
体は、はげしくのたうっている。
それがさらにはげしくなって、けいれんのようになった。
ふ、ふふふ……
屏風の竜は、わらった。
よし恵は、けいれんしながら、叫び続けた。
「よしよし、それでよい」
声の主は、機嫌がよくなった。
よし恵は、まるで全身がバイブレーターと化したかのようにけいれんし、短くするどい、金属質の叫びを何度もあげた。
そして、動かなくなった。息づかいの音だけになった。
うふ、ふ、ふ、ふ……
陰にこもった、それでいて、くすぐったくなるような笑い声だった。
よし恵は、体をくねらせた。緩慢なくねらせ方だった。
アア……
と、あえいだ。
腰を浮かせた。そして、両肢を開くと、浮かせた腰を、螺旋状にまわしだした。高く、低く。



首を振り、髪を乱した。
男と交わっているとき、そのままであった。迫真の、そのパントマイムをしている、と言うべきだろう。だが、ちがう。よし恵は、本気で感じ、のぼりつめようとしていた。
くさむらが濡れていた。
腰をまわし、両肢を小刻みに開閉するたびに、くさむらの奥から蜜があふれた。
ふふ……
山伏と竜を描いた屏風の向こうから、ふわっと人影が飛び立ち、蒲団のそばに降り立った。
猫のようだった。
小柄な老人だった。髪は白く、肩にかかっている。ただ、小柄なだけではなく、やせていた。骨と、最少限の筋肉とだけから成り立っている体だった。
しかし、たるみがなかった。筋肉に力が感じられた。
老人は、闇の翁だった。闇の翁は、自分の陽根をしごいた。太く、たくましい陽根だった。
よし恵は、闇の翁が現れたのに気づかないのか、目に見えぬ相手と交わり続けた。闇の翁は、よし恵の体におおいかぶさった。
体重があるのかないのかわからないほどに、その体はすうっと張りつくように、よし恵に重なった。
闇の翁は、ゆっくりとよし恵のなかに入っていった。よし恵は、一瞬、動きをとめた。叫び

をあげて深く受け入れた。

闇の翁は、手でよし恵の乳房をいじった。

「さあ、わしの精を吸って、思う存分、女の業を見せるがよい」

闇の翁は、ゆっくりと律動をはじめた。上下の運動に、円を描く運動を組み合わせて、じっくりと腰を使った。

よし恵は、闇の翁の体から逃れようとするかのように、上体を大きく右へよじった。口をあけ、舌をひらひらさせながら、うめき声を洩らした。

「苦しいであろう、苦しむがよい。あとに、極楽がくる」

闇の翁は、よし恵の左肢をあげた。そして、深く挿入したまま、自分の上体をよし恵の上体から離した。

よし恵は、もがいた。

顔をくしゃくしゃにゆがめている。

闇の翁は、直立に近い形によし恵の左肢をあげると、よし恵の体を横向けにさせた。そうしながら、自分の上体を、よし恵の左肢のほうからまわりこませた。

闇の翁は、よし恵の背中をうしろから抱きかかえた形になった。後背位の体位になったのである。一連の動きは、コンニャクのようにやわらかで、無理がなかった。

その間、深く挿入されたままで、よし恵は上体をそらせてあえいだ。



「よいであろうが」

闇の翁は、よし恵の背筋に舌を這わせた。

よし恵は、びくっ、びくっ、と全身を震わせた。

「あれは、いつごろであったか」

闇の翁は、つぶやいた。

「おまえの夫の留守に、わしはおまえたちの家の天井に忍んだ。わしは、人は殺せぬ。神通力は得ても、人を殺す術はもたぬ、おまえたちの家に忍び込んだのは、おまえの夫を殺すためではなかった」

闇の翁は、回想した。

両手は、よし恵の体を愛撫し、腰はよし恵の尻をしゃくりあげるように動かせていた。

よし恵は、泣いていた。唇を噛みしめ、頬を震わせて泣いていた。

「暗闇の剣を盗み出すためだった。探したがなかった。おそらく、おまえの夫は、あれを携えて満月城に行っていたにちがいない。わしの存在を熊爪の翁が知り、わしがシノムラ出身の有力者を操りだしたころだから、満月城でなにかわしへの対策を練る集まりでもあったのであろう」

闇の翁は、ため息をついて、

「神四郎に乳を含ませながら、おまえは蒲団に横になっていた。いい体だった。わしは、お

まえに術をかけた。おまえは、添い寝しているうちに、ただ寝入ってしまっただけだと思ったろうが、じつはそうではないのだよ」

「――その話は、もう……」

「聞きたくないというか。しかし、聞くんだ。わしは、おまえを念波で催眠術をかけて、眠らせただけだ。そして、おまえを犯した。おまえは、目醒めたとき、なにが自分の身に起こったかわからなかったであろう」

「……」

よし恵は、かすれた、甘い声を出した。

「わしが、おまえの夫の留守に忍び込み、はじめのときとおなじようにして、おまえを犯すようになったのは、それからだった」

闇の翁は、左手をよし恵の股間に伸ばして、指をくさむらに入れた。その指は、巧みに交わっている部分を探り、恥豆を見つけ出した。

指の腹が、軽く愛撫した。よし恵の内股の肉がひきつった。

「いつも、念波で催眠術をかけた。おまえが、おまえの夫をきらいになるように、な。というより、おまえの精神と体から、夫に対する愛を少しずつ奪っていった。そして……」

闇の翁は、腰を強く使った。

「とうとう、おまえの精神と体から、夫に対する愛を完全にとり除くことに成功した。わしは、おまえに、あとでわしの指定した場所へこざるをえないよう暗示をかけて、おまえたちの家を出た。催眠術から醒めたおまえは、夫をいとうようになっていた。そして、すさまじい喧嘩をしたはずだ」



闇の翁は、話をやめた。

よし恵は、のぼりつめて両手で敷布をにぎりしめた。にぎりしめた指が開いた。

よし恵は、全身から力を抜いた。睡ってしまったように見えた。

闇の翁は、よし恵の耳に、

「神四郎と交わるのだ。母性愛を除いた、その精神と肉体で神四郎を迎え入れるのだ。わしは、人は殺せぬ。だから、おまえに殺してもらう。女の業を出して迫るんだ。わかったな、よいな」

と、ささやいた。

よし恵は、かすかにうなずいた。……

# 第五章　相姦絵図

## 1

——クロビの樹林は、重く沈んでいた。
暗い夜だった。月も星も見えなかった。
フクロウが鳴いた。
「——族長、卍の家は、もう指呼の距離にあります」
前を這っていた黒矢が言った。
「見えるか？」
「まだ見えませぬが、殺陣気を感じます」
「殺陣気？」
「殺気を四方八方へ、目に見えない霧のように吹き流すことによって起こる気流です」
「おれには、その気が感じられぬ」
「王道の剣であるシノムラの剣を修めた族長には、わからぬでしょう」
黒矢の姿がふっとかき消えた。



「どこへ行った？」
神四郎は、だれにともなく訊いた。
「しっ」
青矢が制止して、
「しばらくお待ちください」
と、神四郎の背中をたたきながら言った。
フクロウが、また、鳴いた。
真上の木の枝にいるようだった。別の木でも、鳴いた。さらに別の木でも鳴いた。
呼応するように、一帯のすべての木でフクロウが鳴いた。
神四郎は、耳をふさぎたくなった。
フクロウの声の合唱は、聞いていると、体が浮きあがるような、力が吸いとられていくような、奇妙な感覚に侵される。
あやしい感覚だった。
（神四郎）
突然、呼びかけられた。
声ではなかった。聴覚で感じた声ではない。
意識のなかで、その声ではない声は、神四郎を呼んだのだった。

（神四郎、おまえはだまされているぞ）
老人の声のように思えた。
意識のなかに響く、声なき声なのに、老人の息づかいが感じられた。
（なぜ、おれがだまされているんだ？）
神四郎は、声に出さないで問うた。
（黒矢、青矢だ。そやつらは、神州一族の敵であるぞ）
（うそだ）
（おまえの父を殺した）
（なにを言うか）
神四郎は、声なき声の、たたみかける調子の、ねばっこい言い方に、頭のなかがかきまわされるような気がした。
いや、すでにかきまわされて、声なき声にまどわされつつあった。
（黒矢、青矢は、おまえを亡き者にしようとしているぞ。おまえが必要でなくなったら、殺そう、と思っているぞ）
（そう言うおまえは……）
神四郎は、途中から思わず、
「だれだ？」



と、声に出した。
（シノムラの将来を心底から憂うている老人よ）
（闇の翁か？）
（神四郎）
神四郎の意識に響く声が、いきなり、女のものに変った。
（神四郎、よく聞きなさい）
（その声は……）
神四郎は、愕然とした。
母のよし恵の声だった。
（母上では、ないですか。どこにおられるのです）
（おまえのなかにいます。私は、いつもおまえの心のなかにいて、おまえを見守っているのです）
神四郎は、体に微弱な電流が流れているような快さをおぼえた。
なつかしさをともなった快さだった。幼児のように、母親に対して素直になっている、と言ってもよい。神四郎は、よし恵がまだ家にいて、添い寝をしてくれていたころの気持ちにもどっていた。
（おまえは、だまされています。黒矢と青矢は、悪人です）

（母上）

神四郎は、子どものように、甘えた声を出した。

むろん、意識のなかの声だった。

（黒矢、青矢という裏切り者を殺しなさい。そして、私のところへおいで）

「お母さん」

神四郎は、声に出して呼んだ。

子どものときの声だった。

フクロウの鳴き声が聞こえた。神四郎は、地に顔を伏せていた。

（黒矢、青矢を殺しておいで、お母さんは、待っているから……待っているから……）

よし恵の声がとぎれて、老人の声にもどった。

（神四郎、おまえが発心せぬと、神州一族は滅びるぞ。神州一族は、表の世界に出なければいかん。シノムラの大義を生かし、理念を実現するには、表の世界の仕組みを利用しなければならん）

（……）

神四郎は、まだ母の懐に抱かれているようなここちで、地に伏せていた。

叫びが聞こえた。吠え声があとに続いた。

猿人と神州犬の争いがはじまったようだった。



神四郎は、叫びや吠え声を別世界のもののように聞いた。しかし、手は背中に斜めに背負った暗闇の剣に伸びていた。

（神四郎）

よし恵の声がした。

意識のなかの声だったが、ささやかれたように、身近に聞こえた。

（あっ、母上！）

（暗闇の剣は、おまえの心を極悪にします。使っては、いけません。こちらに渡しなさい。そのまま渡すのです）

（渡す、といっても？）

神四郎は、はじめて顔をあげた。

暗闇だった。

猿人の叫びと神州犬の吠え声は、四方から聞こえた。身の毛のよだつような声が、あいまじった。

フクロウの鳴き声が、すぐ真上でした。

神四郎は、枝繁みに目を凝らした。

黒い影が見えた。枝繁みのなかにまぎれて、ふつうでは枝や葉と見分けがつかないにちがいない。

その影が動いた。下へ向かって動いたのである。
手と足のある影だった。
猿人だ、と神四郎は思った。猿人らしい影は、いちばん下の枝まで降りてきて止まった。
神四郎は、背中の暗闇の剣を、いつでも抜けるように、両手に持った。
猿人らしい影は、コウモリのように、両足で枝にぶらさがると、両手を伸ばしてきた。神四郎は、暗闇の剣を抜こうとした。
が、抜けなかった。猿人、とはっきり見きわめがついたが、その猿人を殺そうという気が起きなかったからだった。
「神四郎」
よし恵の声がした。
猿人の口から発せられた言葉だった。
神四郎は、一瞬、心臓が止まったように思った。
「刀をお渡し」
猿人は、しゃべった。
「母上」
神四郎は、かすれた声で呼びかけた。
「刀を渡すのです。神四郎、なにをためらっているのです」



猿人は、右手を神四郎が持っている暗闇の剣の鞘にかけた。
「母上ですか。声は、まぎれもなく、おれがかたときも忘れたことのない母上の声だが、姿がちがう」
「変えられてしまったのです。黒矢や青矢に、こうした姿に変えられてしまったのですよ。神四郎、私は猿人の姿に変えられて、いままで生きてきたのです」
「そんな……」
はずはない、と神四郎は続けて言おうとした。
しかし、言えなかった。猿人は、なつかしい、この世でたったひとりの肉親である母の声でしゃべっていた。長い年月を経て、やっと聞くことのできた母の声だった。
神四郎は、猿人の姿に変えられた、というよし恵の言葉を三分、信じた。
あと七分は、疑っていても、三分、信じていれば、敵意を持てるものではなかった。
「さあ、お渡し」
よし恵の声は、うむを言わせぬものになった。
鞘をにぎった猿人の手に、力がこもった。神四郎は、暗闇の剣から手を離した。
そのときだった。
猿人に飛びついた影があった。猿人は、ぐわうっ、と叫んで枝から落ちた。猿人に飛びついた影は、やはり、猿人だった。

ふたりの猿人は、地上で組んずほぐれつの格闘をはじめた。暗闇の剣が宙へ舞いあがった。よし恵の声でしゃべった猿人がいた木から少し離れた木に、暗闇の剣は飛んだ。その木にも猿人がいた。

暗闇の剣は、その猿人が手で受けた。

地上で格闘している猿人ふたりは、気味のわるい叫びを発した。どちらがよし恵の声をしゃべった猿人か、神四郎にはわからなくなった。

猿人のうち、ひとりがもがきだした。もうひとりが両手で、その猿人の首を絞めだしたからだった。首を絞められた猿人は、骨と肉がつぶれたような声をあげながら倒れた。

首を絞めていた猿人は、神四郎に顔を向けて、

うぐっ、ぐぐっ……

と、声を発した。

「ケサラ」

神四郎は、はじめてその猿人がケサラであることに気づいた。

「族長、ご無事か」

青矢の声がした。

「猿人が、母上の声を出した」

「闇の翁の神通力です。ごまかされないように」



「やはり、そうか」

神四郎は、倒れた猿人に目をやって、

「あっ」

と、声を出した。

暗闇の剣の行方は、どうなったのか。神四郎は、それを受けた猿人のいた木を見あげた。

「どうしたのです?」

青矢が訊いた。

青矢は、声だけで、姿が見えなかった。

「暗闇の剣をとられた」

「わかっています。いまとりかえします」

青矢の言葉のあとに、指笛が鳴った。

いっとき、聞こえなかった神州犬の吠え声が聞こえた。

吠え声は、連れてきた神州犬のすべてのものらしく、四方八方から聞こえてくる。それもたえず吠える場所が変わっているので、いたるところに神州犬がいるように思えた。

走りまわって吠えているためだった。

「猿人は、神州犬に吠えられると、すくんで動きを封じられます。フクロウの鳴き声は、すべて猿人たちの仕業で、私たちをまどわそうとしたのですが、失敗し、いまは神州犬に動きを

と、すぐ上の枝に飛びつき、しなったその枝がもとにもどる反動を利用して跳躍した。
ケサラの体は、枝にぶつからずに、梢近くにいる猿人にぶつかっていった。ケサラと猿人がひとつに重なり、ふたつの絶叫が合わさって闇を震わせた。
ケサラと猿人は、ひとかたまりになって落ちてきた。
別に落ちてきたものがある。暗闇の剣だった。
神四郎は、即座に拾いあげた。
ケサラと猿人は、死闘を演じている。そのまわりを、四、五匹の神州犬が、吠えながら走りまわっていた。
手を出しかねているようすだった。
ケサラと猿人は、どちらも甲乙をつけがたい体力と気力で闘っていた。神四郎は、暗闇の剣を抜いた。そうしたい衝動が起きたのだった。
どちらがケサラでどちらがケサラでない猿人なのか、神四郎には区別がつかなくなった。が、ケサラではないほうを斬らねばならぬ、という思いにとらわれて、暗闇の剣を振りかざした。
神四郎は、無念無想の状態に自分を追い込んだ。
つかのま、神四郎にとって音のない世界が訪れた。無念無想の状態に入ったのである。
その状態は、秒にしたら一秒続いたかどうかの、きわめて短い時間でしかなかった。
その、きわめて短い時間のあいだに、殺気がみなぎる。



殺気にまかせて、神四郎は剣を振りおろした。
「ぎゃおう！」
神四郎は、断末魔の叫びでわれにかえった。
猿人の首を刎ねていた。
血しぶきが扇状に散った。
首のなくなった猿人の体を、もうひとりの猿人が振り飛ばした。
その猿人がケサラなことは、首なし死体を振り飛ばしたあと、
うぐ、うぐ……
と、おだやかな声を出したのでわかった。
「族長、お手柄でした。首を刎ねた猿人は、統領のバサラのようです」
青矢の声がした。
「黒矢は、どうしている？」
神四郎は、暗闇の剣をぶらぶらと振りながら訊いた。
「殺陣気を破るため、卍の家に肉迫しております。殺陣気は、殺気を乱気流のように渦巻かせ、流させるものなので、そのなかに身を置くと、同士討ちをするようになります」
「卍の家へ肉迫することによって、その殺陣気を破ることができるのか？」
「闇の翁は、念波に殺気をこもらせて、全方角に発し、ドーナツ型に殺陣気の防壁をつくっ

ているのです。その防壁をかいくぐることができれば、闇の翁の精神は乱れます。その機に、卍の家に侵入するのです」

「そういうことか」

悲鳴が聞こえた。

やまと赤軍のメンバーが闇の奥から走り出てきた。

三匹の神州犬が、そのあとを追って現れた。

「殺陣気に惑わされると、ああなるのです」

青矢が、いらだった声で言った。

2

――やまと赤軍のメンバーは、三匹の神州犬に追いすがられて、地に倒れた。

一匹の神州犬を懐剣で屠ったが、あとの二匹に喉と股間を噛みちぎられて、息絶えた。その一部始終は、モノクロームのスローモーションビデオを見ているように、神四郎の目には映った。

二匹の神州犬は、闇のなかをどことも知れぬ方角へ消えた。

神四郎のまわりには、猿人と闘っていた神州犬が数匹いた。その数匹は、吠えもせず、闇に消えた二匹を追いもせず、神四郎のそばから離れなかった。



「青矢、どこにいる?」

「お近くにおりますが、姿は、いっとき、ごかんべんを」

「どうしてだ?」

「玄武会員の特攻攻撃の的になります」

「おれは、どうなってもかまわぬのか?」

「いえ、族長の身は、われら全員、それにケサラ、神州犬も守り通します」

青矢の声は、神四郎の膝のあたりから、聞こえてくる。

神四郎は、自分の膝に目をやった。

神州犬が一匹、神四郎の右膝に口を近づけて、見あげていた。

「青矢」

神四郎は、呼んだ。

「なんでしょう?」

神州犬の口が動いた。

青矢の声は、その神州犬の口から発していた。

「さっきの猿人が母上の声を話したが、それとおなじ術か?」

「いえ、闇の翁は、はるか隔ったところにいる鳥獣の口を借りて自在にしゃべることができるのです。しゃべるだけでなく、鳥獣を意のままに動かすことができます。私のは、ただの腹

話術です。腹話術をきわめたものにすぎません」

青矢は、そう説明して、

「族長は、その場を離れてはいけません。殺陣気が破れたときに、私の合図で進んでください」

と、続けた。

「よし、わかった」

神四郎は、うなずいた。

沈黙が訪れた。

神四郎は、空を見あげた。

北八ツの峰と峰のあいだから閃光がひらめいた。稲妻だった。

ぐうお……

ケサラが、不安がった。

「おまえは、雷雨が苦手だったな」

神四郎は、はじめて猿人と遭遇し、争いとなったときの光景を思い出して、ケサラに言った。

「ぐうお、ぐうお！」

ケサラは、空に向かって吠えた。

ぐうお……



遠くで猿人が応えた。

「ぐうお！」

ケサラは、ひときわ高い声を張りあげると、駆けだした。

敵にまわしていた猿人に、雷雨の近いことを告げてから、それを避けるために逃げだしたようだった。

「ケサラ！」

神四郎は、呼びとめた。

「放っといてください。雷雨に連中は無力です。力になりませんから」

青矢の声で足許の犬がしゃべった。

はげしい雷雨は、ケサラが消えて一、二分経ったか経たないうちに襲来した。

たちまち、真上に雷雲の中心が達し、まばゆい稲妻と、地を揺るがすような雷鳴の洗礼を受けた。

「族長、暗闇の剣を地に柄まで突き刺して、少し離れてください」

青矢の指示に、神四郎は、一瞬、ためらいを見せた。

さっき、猿人の口を借りた闇の翁が、自身の声や母の声を模して言ったことを思い出して、青矢が暗闇の剣を奪うつもりでそんな指示をしたのか、と疑ったからだった。

「族長、早く！」

その言葉の終わったか終わらないうちに、落雷に見舞われた。
幸い、その雷は、神四郎から十メートルほど離れたところに生えているクロビの木の梢に落ちた。
クロビの木は、瞬間、青白い輝きに包まれた。そのあと、梢は燃えあがり、いっとき下の枝に燃え広がりそうな気配を見せたが、はげしい雨にうたれてたちまちのうちに消えた。幹が裂けていた。
神四郎は、暗闇の剣を地中に深く刺して、その場から離れた。
その暗闇の剣に走った者がいた。
第二の落雷がきた。その者が暗闇の剣の柄に手をかけたときに、そこへ落ちたのだった。青白い閃光が地表を貫いた。
暗闇の剣を奪おうとした者は、体からオレンジ色の輝きを発して、跳躍するような感じで飛ばされた。
雷雨が急に弱くなった。
「猿爪です」
青矢が、雷に直撃されて息絶えた男の正体をあかした。
「猿人を司る猿爪か？」
「そうです。天罰が下りました」



青矢が快さそうに言ったとき、前方から雄叫びが聞こえてきた。
「殺陣気が破れたのです」
青矢がよろこび、青矢の声を発した神州犬は躍りあがって吠えた。
稲妻と雷鳴はおさまらなかったが、雨はあがった。
神四郎のまわりにいた神州犬が、前方の闇へ向かって走り、あっというまに闇にまぎれた。
「青矢、青矢！」
神四郎は叫んだが、答えはなかった。
神四郎は、足許に落ちていた暗闇の剣の鞘をひろうと、暗闇の剣を刺してある場所へ走った。
柄を持つと、焼けただれており、まだ熱かったが、かまわずひきぬいた。刀身には異常がないようであった。
神四郎は、暗闇の剣を鞘におさめると、腰に差して前方へ歩いた。
悲鳴や怒声、絶叫がかたまって届いた。
神四郎は、疾った。
「黒矢、青矢！」
と、叫びながら疾った。
突然、前方があかるくなった。
やまと赤軍のメンバーたちの姿が浮かびあがった。

彼らは、立ち往生していた。
あかるくなったのは、火焔のためだった。
火焔が壁のように立ちはだかっていた。
ごうごうと音を立てて、火の壁となって前途をさえぎっていた。
神四郎は、やまと赤軍のメンバーが立ち往生しているところまで一気に駆けた。
「族長」
神四郎に気づいて、黒矢が近づいてきた。
「この火は、なんだ?」
「闇の翁が、神通力によってわれわれに火焔を見せているのです。幻視です。熱くはないでしょう」
黒矢の言ったとおりで、火焔はごうごうと音を立てて燃えさかっているのに熱くはなかった。
「これが幻視か」
「幻視です。こわくはないのです。しかし、焔の向こうにどんな罠が待っているかを考えると、うかつに飛び込めません」
「焔の向こうはなんだ?」
「卍の家です」
火焔の壁は、ぐわっとせりあがり、上部がなだれ込むように下へ伸びてきた。恐怖に駆られた神州犬が逃げまどった。
やまと赤軍のメンバーたちも、叫びをあげた。
神四郎は、焔のなかにいた。
オレンジ色の焔が無数の筋になって、自分の両脇を走り、目がくらみ、気が遠くなりかけた。
不思議に、熱くはなかった。



「族長!」
黒矢の叫びが聞こえた。
神四郎は、暗闇の剣の柄に手をかけた。
(神四郎)
突然、母の声が聞こえた。
意識のなかに響いて、声ではない声であった。
(母上)
(卍の家へおいで。そのまま、おいで)
よし恵は、子どもをあやすように言った。
(お母さん)
(神四郎、そのままおいでなさい。焔のなかをくるのです)
神四郎は、歩きだした。

「族長、とどまるのです！」

遠くで、黒矢が叫んだ。

神四郎は、すぐ近くに、なにかの気配を感じた。暗闇の剣を抜きはなって、焔をなぎはらった。

神州犬の悲鳴があがった。

神四郎は、もう一度、焔をなぎはらった。こんどは、人の悲鳴がした。

神四郎は、焔のなかを駆けだした。……

3

——卍の家は、静まりかえっていた。

神四郎は、夢のなかを歩いてきたような気がした。

門扉は、八の字に、大きく開かれていた。

神四郎は、なかへ入りかけて振りかえった。

クロビの森は、闇の色に塗りこめられていた。

神四郎は、目を凝らした。

シノムラの剣の修業をしていたときは、闇を見る目ができていた。都会に出てから、そのほうの視力は落ちた。



が、それでも、常人に比べれば、はるかに夜目がきく。

闇のなかで、やまと赤軍のメンバーが踊っていた。千鳥足でおなじところをまわっているようにも見えるし、虚空をつかんでもがいているようにも映じた。

神州犬も、二、三匹、飛んだり跳ねたりしていた。

焔のなかにいるつもりだろうか、と神四郎は、一瞬、思った。そのつぎに、

（助けなければ）

と、思った。

神四郎は、自分がわからなくなっていた。

母に呼ばれて、焔のなかをかいくぐってきたときは、やまと赤軍も、神州犬も念頭になかった。

ただ、母に会いたい一心で、暗闇の剣を振るいながら走った。

が、卍の家を目の前に見たときには、呆然（ぼうぜん）とした。

放心した、といったほうが正しいか。

神四郎は、まだ彼らや神州犬たちは、焔に包まれていると思い込んでいるのだろうか、と訝（いぶか）った。

その闇のなかで、人や犬が踊り、もがいている。

黒矢や青矢も、焔の幻視から逃れられないでいるのか。それとも脱出して、卍の家に忍び込

む機会を窺っているものか。

ひとりひとりの人影に目を凝らしたが、見きわめられなかった。

（なにをおれはやっているんだ）

神四郎は、なぜ彼らを助けにいかないのか、と自分をしかった。

放心して、ものの判断がつかなくなっているらしい。

ひどく傍観者的になっている。

卍の家に、母がいる。そう思っても、さきほどまで、あれだけ母に惹かれていたのに、そのほうの気持ちもなくなっている。

「――いまです！」

人の叫びに、神四郎は、卍の家のほうを向いた。

玄関から六、七人、男が出てきた。先頭の男が、みんなを振りかえって、

「まだ闇の翁様の幻火の神通力は、続きます。しかし、まもなく精神燃焼の力がつきます。つきると、つぎに神通力を使えるまでには、十二、三分かかります。いまのうちに脱出しなければ、やつらが踏み込んできます。運転手の人たちは、すでにエンジンを始動させてお待ちです」

と、言った。

おう、わかった、とほかの者たちはそれぞれに返事をして、玄関の横手に走った。



黒塗りの高級車ばかりが停めてあった。

はじめに出てきた男を除いて、みな、それぞれの車に乗り込んだ。

神四郎は、歩いた。

高級車は、一台ずつ走り出てきて、神四郎の脇をスピードをあげて通りすぎていった。道は、門の外からすぐにカーブして、クロビの樹間を、公道のほうへ延びていた。

その道を、高級車は、フルスピードで走り去っていく。

二台、車は残っていた。

神四郎は、いま走り去った五台の車のうちの一台に乗っていた男の顔に見おぼえがあったような気がした。東京にいたときに、新聞やテレビでよく見た顔だった。

（社会国民党の日下美幸だ）

神四郎は、やっと思いだした。

まだ判断力はにぶいままだった。

やつもシノムラか、と神四郎はぼんやり思いながら、卍の家の門内に入った。このときになって、神四郎は自分の体が毛髪のように細く、そして、針金のように硬いものに刺し貫かれているのに似た感覚をおぼえた。

くすぐられるような痛さだった。麻酔がきいている前の、感覚が鈍磨して、自分の体であって、自分の体でないような状態に陥っている。

もうひとつ、たとえて言うなら、レントゲン線のような放射線が体を透過している感覚だった。神四郎は、強い視線、いや、自分の体を透過しているものの源を意識して、卍の家の屋根を振りあおいだ。

屋根の右端、古い日本家屋なら鬼瓦を置くところに、奇怪な人が立っていた。

黒装束で、コウモリが翼をひろげて、逆さにならないで張り子のように足で立っている感じだった。

両手を真横に伸ばしているのである。十字架にかけられているようなかっこうだった。

長い白髪が風に乱れて、総毛立っている。

風に乱れているのではなかった。ただ、総毛立っているのである。

顔は、真っ黒だった。

神四郎の目には、墨かなにかで塗りつぶしたように見えた。

双眸が燃えていた。ぎらり、ぎらりと瞳のなかに発光体が潜んでいるように輝きを発し、その輝きが青色にも赤色にも見えた。

（闇の翁か）

神四郎は、ものうい体をもてあましたように、揺れながら立って思った。

自分の体を透過しているものは、その闇の翁らしい怪人物の全身から発していた。念波だろうか。



幻火の神通力を発揮している念波だろう、と神四郎はものうく思った。

おどろくべき精神集中力だった。

あの神通力を、

シノムラの剣——

が、うち破れるか。

神四郎は、思わず暗闇の剣の柄をにぎっている手に力をこめた。暗闇の剣の抜き身をさげたままだった。

その抜き身は、血糊をべったりとつけていた。

（斬らねばならぬ）

神四郎は、自分に言い聞かせた。

暗闇の剣がひどく重く感じられた。

屋根の怪人の体が揺れた。

両手、両足が動いた。神四郎は、目を疑った。

怪人の姿は、卍になっていた。

その卍がぐるぐると回転した。屋根の上を回転して横に移動し、急速に回転と速度を速めて、そのまま、黒い旋風と化したかのように、闇に消えた。

「闇の翁」

神四郎は、口に出してつぶやいた。
不意に、神四郎の暗闇の剣をとりあげた者がいる。
さっき、日下らを車に誘導し、卍の家から逃がした男だった。
「貴様！」
神四郎は、暗闇の剣をとりもどそうとした。
男は、ぱっと飛びのいた。
へらへらと笑って、神四郎を見た。
「返せ」
神四郎は、男に飛びかかろうとしたが、水中のなかを飛ぶようで、体が思うように動かなかった。
男は、暗闇の剣を持って、卍の家の玄関へ駆け込んだ。
神四郎は、夢遊病者のように、そのあとを追った。
玄関へ入った。
白い着物に、袴のようなものをはいた女が出てきた。
「神四郎、よくきました」
女はよし恵だった。
「母上……」



神四郎は、そう言ったきり、立ちすくんだ。
まぎれもなく、胸のなかに焼きついている母の顔であった。
「どうしたのです？」
よし恵は、笑った。
誘うような笑いだった。息子に見せる笑顔ではなかった。
「闇の翁がいるでしょう？」
「神四郎、なにをそんなキッネにつままれているような顔をしているのです。さあ」
よし恵は、手を差しのべた。
神四郎は、その手をにぎった。やわらかい手だった。幼いころ、この母に手をひかれて川の畔や、峠の道を歩いたときの心躍った気分がよみがえった。
じっさい、神四郎の心は躍っていた。
しかし、それはついに母とめぐりあえたというれしさからきたものではなく、妖艶な女を目のあたりにしたときのものであった。
「さあ、おあがり」
神四郎は、よし恵の手にひかれて、上にあがった。
よし恵は、歯を見せて笑っていた。
歯が朱に染められていた。

「二階へまいりましょう」
よし恵は、神四郎の手をひいて、二階へ通じる階段をのぼりだした。
「神州一族は、ひとまず退散しましたよ。だから、ご安心なさい」
「ここで、なにをしていたのです?」
「ヤボなことは、聞いてはいけません」
よし恵は、強く神四郎の手をにぎった。
神四郎が連れていかれたのは、屏風の部屋だった。
屏風に囲まれた夜具のかたわらに、神四郎は、立っていた。
「母上」
神四郎は、かすれた声を出した。
よし恵が袴のようなものを脱いだからである。
「神四郎、この母がおまえを極楽へ導きます。いいですね」
よし恵は、白い着物を脱ぎ放った。
掛け蒲団をめくって、敷蒲団に横たわった。
神四郎は、息を呑んで、その体を見おろした。
おそろしかった。しかし、自分の体はよし恵を求めていた。
「神四郎」



よし恵は、媚た声で呼びかけて、身をくねらせた。
腰がシーツをよじった。くさむらがうごめいて見えた。
神四郎は、目をつむった。
頭がぐらぐらした。
「神四郎、なにをしているのです。おまえの母ではないですか。遠慮はいらないのです」
よし恵は、あえぎ声を誘いの言葉にまじえた。
神四郎は、目をあけた。
よし恵は、エロチックな生きものに変わっていた。
腰をまわし、上体をひねり、両肢を開閉していた。
「早く、お脱ぎ……」
よし恵は、うながした。
神四郎は、土足のままだった。
地下足袋を脱いだ。そして、神州一族の戦士たち、やまと赤軍のメンバーが着ているものとおなじ服装を解きだした。
「この母の、体は、おまえの生命の、誕生した、ところ」
よし恵は、あえぎあえぎ言った。
神四郎は、裸になっていた。

「おいで」
くねくねと体を尺取り虫のようにくねらせながら、よし恵は手招いた。
「おう」
神四郎は、泣き声のような声を発して、よし恵の体におおいかぶさった。
よし恵は、両手で神四郎の上体を抱きとめ、両肢で神四郎の腰をはさみつけた。
神四郎は、腰を落とした。
挿入されていた。
神四郎は、よし恵の体が吸盤のように自分の体に吸いついているように感じた。
よし恵の体に入っている部分は、うねり、波うちながら、絞り込んでくるよし恵の部分に、しっかりと包まれている。神四郎は、腰を上下させた。よし恵の部分は、上下動もままならないほどに、神四郎を責めていた。
「ううぅ」
神四郎は、三日月形に背をそりかえらせた。
快感の玉が体にいくつも、水玉模様のように散らばり、それがひとつひとつ破裂していくような気がした。
ひとつ破裂するたびに、体はしびれ、そのしびれが増幅していく。
「うっ」



神四郎は、そりかえらせた背をびくびくとけいれんさせた。
射精が、はじまっていた。それは、一回に留まらなかった。何度もまをおいて連続し、やむことがなかった。
神四郎は、快感のきわみに達し、そのあと、体が枯れ細っていくような感覚に、われを忘れて、
「助けてくれ！」
と、叫んでいた。
よし恵は、ガラス玉のような双眸で、じっと、ひきつり、ゆがんだ神四郎の顔を見ていた。
その腰は、浮きあがり、螺旋状に回転しだした。
神四郎は、気が遠くなった。
「族長、どこにおられる？」
「返事をしてくださいっ！」
黒矢と青矢の声が届いた。
屏風が倒れた。……

4

——神四郎は、青矢に抱き起こされていた。

目のすぐ下で、よし恵がもだえ、苦しんでいた。
よし恵は、黒矢によっておさえこまれていた。
黒矢は、右手の指に絡ませた数珠で、よし恵の体をなでまわしていた。黒矢の口から呪文が洩れた。
「母上」
神四郎は、青矢を振り放そうともがいた。
「しっかりしてください」
青矢は、それまでよりも強い力で神四郎を羽交いじめにした。
「母上が苦しがっておる」
「首領は母君を、闇の翁の呪縛から解こうとしているのです。母君は、色姥にさせられていたのです」
「色姥、だと」
神四郎は、もがくのをやめて、よし恵を見つめた。
よし恵は、数珠でなでられて苦しいのか、うめき声を発してもだえていた。
黒矢は、呪文を一心不乱に唱えながら、数珠を股間にあてた。
ぴくん、ぴくん、とよし恵は、股間の肉を波うたせた。
そのあと、体を硬直させ、けだもののように吠えた。乳房がぶるぶると震えた。



よし恵は、また吠えた。
人間の声とは思えなかった。
よし恵の股間から白濁した液があふれだした。その液は、おどろくほど多量で、くさむらを濡らし、内股を伝い、シーツにどろどろと滴った。
黒矢が神四郎の顔を振りあおいだ。
「色姥から、族長の母君にもどられます」
黒矢がそう言ったとき、よし恵は、大きく肩を動かして、深いため息を吐いた。
そのあと、よし恵は、夢から醒めたような表情になった。
「母上」
神四郎が呼びかけると、よし恵は、上体を起こして、
「神四郎、私はおまえに、なにをしたの」
と、泣き声で言った。
「なにもしていません」
「でも……」
よし恵は、神四郎の股間に目をやり、ついで自分の股間を見て、
「わっ！」
と叫んだ。

「母上、気にすることはないのです」
神四郎は、よし恵のそばへ行ってかがむと、よし恵の両肩に手をかけた。
よし恵は、おえつをはじめた。
ふふふ、うふ、うふふ……
しゃがれた声の笑いが、部屋のなかに響いたのは、このときだった。
「――だれだっ？」
黒矢が、部屋のなかを見まわして、叫んだ。
「どこにいる、妖怪め！」
青矢が、まわりの屏風を蹴倒しはじめた。
うふっ……
笑い声がとだえた。
よし恵が、震えはじめた。
「闇の翁め」
神四郎は、立ちあがった。
目が吊りあがっていた。よし恵を色姥にして、自分と交わらせた闇の翁を許すわけにはいかない、と思った。憎しみをたぎらせた。
部屋のなかに、突風が吹き込んだ。倒れた屏風があおられて、浮きあがったり、いったん立



って反対側に倒れたりした。
天井の半分ほどが、ふわっと浮きあがるようにしてめくれたのは、このときだった。
梁が見えた。
その梁に、巨大なコウモリがぶらさがっていた。
ぶらぶらと体を揺すりながら、よく光る眸で下を見ていた。
闇の翁が梁に両足をかけて、ぶらさがっているのだった。
「妖怪！」
青矢が、手裏剣を投げた。
うふ……
闇の翁は、短く笑って、ふっと口をとがらせて息を吹いた。
手裏剣に息を吹きかけたのである。
手裏剣は、本来なら、闇の翁の顔面に刺さっているはずだったのに、軌道がくの字型に折れて、屋根裏の板に突き刺さった。
「うぬ」
青矢は、立て続けに、見ていてほとんどまとめて投げたとしか思えぬほどの早さで、手裏剣を三本、投げた。
闇の翁は、ぶらぶらしながら、手裏剣に息を吹きかけた。

三本とも、軌道をゆがめられて、闇の翁の体にかすり傷ひとつ負わせることもできなかった。
神四郎は、自分の手で闇の翁の息の音を断ちたかった。暗闇の剣があれば、と歯ぎしりして無念がった。
青矢は、あきらめて手裏剣を投げなくなった。
うふ、ふ……
闇の翁は、体を揺するのをやめた。
「よし恵」
と、叫んだ。
よし恵は、びくっと全身を一回、震わせて上を見あげた。
「聞くがよい、おまえは、わしから逃れられぬわ」
闇の翁は、手を懐へやってなにかをとり出した。
般若の面だった。
闇の翁は、その般若の面を両手に持って下に向けた。
「見るがいい。シノムラに伝わる肉般若だ。昔からシノムラに仇なす者にかぶせられた。これをかぶると、二度とはがすことはできぬ。ものを食えず、水も飲めず、数日にして飢え、渇して死ぬわ」
闇の翁は、大きく体を振った。



振りながら、
キエーイ！
と、するどい気合をあげた。
般若の面が飛んだ。
一瞬のうちに、上を向いていたよし恵の顔に音を立てて張りついた。
「ああ、うああ！」
よし恵は、般若の面を顔からはがそうとした。
しかし、はがれず、よし恵は、般若の面をかきむしりながら、転げまわった。
黒矢、青矢も、神四郎も、つかのま、ぼかんとしていた。
うふ……
闇の翁は、笑った。
「貴様あ！」
神四郎は、悲痛な声で叫んだ。
闇の翁は、体を大きく振って、ひょいといった感じで梁の上に立った。
天井が煙とも霧ともつかぬもので、もうもうと煙りだした。
「なんだ？」
黒矢が、うめくように言った。

「うふっ、みな、死ぬがいい。卍の家は、消える」
煙のようなものは天井にたちこめて、下にさがってきた。
このとき、一匹の神州犬が部屋に躍り込んできた。
神州犬は、青矢に向かって、けたたましく吠えたてた。
それも、ふつうの吠え方とはちがっていた。なにかを告げるかのように、抑揚をつけ、高低をつけて吠えていた。
青矢は、ピュール、と指笛を吹いた。神州犬は、吠えるのをやめた。
「なにかあったのか？」
黒矢が訊いた。
神四郎は、転げまわるよし恵を抱きかかえたところだった。
「満月城から連絡にきた犬です。満月城は、玄武会の別動隊に襲われて、危機に陥っているもようでござる。敵の侵入を許して、城内で迎えうっているとのこと」
青矢は、若いくせに、ときどき、昔の言葉つきにもどった。
「ひきあげねば」
黒矢は、暗い声で言った。
煙のようなものは、部屋じゅうにたちこめて、だれがどこにいるかもわからなくなった。
「族長」



黒矢の声を聞いたとたんだった。
地軸をゆるがすような大音響がとどろいて卍の家は大きく傾いた。
立っていられなかった。
神州犬が吠えた。
叫びが続いた。黒矢のものか、青矢のものかわからなかった。
「母上」
神四郎は、よし恵をしっかりと抱えて、横たわっていた。
卍の家は、右に揺れ、左に揺れて、あげくに、まわりだした。
神四郎は、あることに気づいて、
「これは、ほんとうに揺れていないぞっ！　惑わされるな！」
と、叫んだ。
はげしく建物が揺れ動いているのに、自分の体が少しもすべったり、転げたりしていない、とわかったのだった。
まぼろしの激動に惑わされて、平衡感覚を失って倒れただけにすぎなかった。神四郎は、
「母上、だいじょうぶです」
と、励ましながら、立ちあがった。
すっと、ふつうに立てた。

「黒矢！　青矢！」
神四郎は、ふたりの名を呼んだ。
答えは、なかった。
「母上、私にしっかりつかまっていてください」
神四郎は、よし恵を小脇に抱えるようにして、部屋を出た。
洋上で大暴風雨にあって、木の葉のように揺れる船さながらに、建物は揺れて、ときおり、天地が裂けたか、と思えるほどの轟音がとどろいたが、神四郎は倒れなかった。
かまわずに、歩くのである。立ち止まっていると、幻惑される。
煙のようなものは、建物じゅうにこめていた。
神四郎は、階段を降りた。その階段が、せりあがった。惑わされまい、と思ったのに、平面を歩くのと、傾斜を降りていくのとは、感覚がちがう。
神四郎は、思わず、階段を転げ落ちていた。
よし恵も、いっしょに転げ落ちたが、下で母と息子は、離ればなれになった。
「母上！」
神四郎は、すぐに立ちあがって、あたりを歩きまわりながら呼んだが、返事はなかった。
煙のようなものは、下の階にも吹き流れていた。
神四郎は、その煙のなかを、よし恵の影が外へ疾ったように思い、玄関へ向かった。



「母上ーえ！」
「神四郎っー、卍の家から出てーえ！」
そう、遠くで叫ぶよし恵の声を聞いたような気がした。
外から届いたようだった。
神四郎は、玄関のところで、また立ち止まった。
玄関ホールが、ひっくりかえったように見えたのである。
卍の家全体が、大音響とともにひっくりかえり、神四郎は天井にたたきつけられる、と錯覚した。
（いや、惑わされるな、錯覚だ、惑わされるな）
神四郎は、自分に言い聞かせた。
天井には、たたきつけられなかった。しかし、神四郎は、天井と逆になって、天井の位置にきている床に立っているようなここちがした。
天井と化した玄関ホールを歩いた。自分がコウモリ人間になったようだった。
が、ふつうに歩いている。
煙のようなものは、淡く濃く吹き流れて、淡いとき、ドアの開放された玄関を通して、外の光景が見えた。夜のクロビの林だった。
神四郎は、外へ駆け出た。

外へ出たとたん、ふつうの感覚にもどった。
神四郎は、振りかえった。
卍の家は、静まりかえっていた。揺れていた形跡もなく、白い煙のようなものもこめていなかった。
横手で、声がした。
黒塗りのロールスロイスが駐まっている。
さっきは、別に一台、残っていたが、その車は、もう卍の家を出てしまったのだろう。
ロールスロイスに、人がふたり乗り込むところだった。ひとりは、まだ若い女で、都会ふうの洗練された服装をしていた。
もうひとりは、年配の男で、なにか棒のようなものを手にしていた。
棒ではなく、暗闇の剣だった。
年配の男は、その暗闇の剣で、若い女の尻を小突きまわして、リヤシートへ押し込もうとしていた。
「はよ乗らんか、ええ」
だみ声だった。
「いや、東京へ行くのはいやなの」
若い女は、いやがって、逃げようとしていた。



年配の男は、運転手を呼んだ。
運転席側のドアがあいて、大柄の運転手が車から出てきた。
運転手は、若い女を、猫の仔かなにかのようにあつかって、リヤシートへ放り込もうとした。
神四郎は、音もなく走り寄って、運転手を手刀で気絶させた。
シノムラの剣にある拳法で、一瞬の早業だった。
年配の男は、
「おまえは、だれだ？」
と、一喝した。
「見ればわかるだろう」
神四郎は、はじめてはっきりと、その男の人相を見た。
雑誌や新聞で、よく見る顔だった。元首相で、民友党の最大派閥の領袖でもある八木にまぎれもなかった。
「神州一族か？」
八木は、神四郎の眸を見て声をかすれさせた。
神四郎の双眸は、発赤している。
「鹿爪神四郎だ」
神四郎は、名乗りざま、八木のミゾオチをちょんと突いた。

軽く突いたように見えたが、八木は、うーん、とうなって、リヤドアにもたれかかった。神四郎は、気絶した八木の体をリヤシートへ押し込んで、そばでなりゆきを見守っていた若い女に、

「前に乗れ」

と、言った。

若い女は、弾かれたように動いて、開いていた運転席側のドアから乗り込んで、助手席に移った。

神四郎は、運転席に入って、ドアを閉めた。

長距離トラックの助手をやっていたときに、運転はおぼえた。見よう見まねでおぼえたようなものだが、試験さえ受ければ一発で合格する、とベテランの運転手も感嘆したほどの腕前だった。

神四郎は、荒っぽいが、たしかなステアリングさばきで走りだし、あっというまに卍の家の門を通りすぎた。

母のことは気になったが、このさい、母の、さっき聞いた言葉を守ることにした。

母は卍の家を逃れて、クロビの森に入ったような気がする。公道をめざして、左右に黒々と広がるクロビの樹林にちらちら目をやりながら、神四郎は、アクセルを踏み込んでいった。

クロビの森に逃げ込んでいれば、神州一族の者に助けられる可能性が強い。それを祈った。



「――族長ですね」

隣の女が、はじめて口をきいた。

「そうだが、きみは？」

族長と呼ばれたので、神四郎はおどろいた。

「神四郎の君でしょう。近いうちに、新しい族長が満月城にお入りになる、と聞いていたけど、その前に、私は……」

「ああ、そうか」

神四郎は、うなずいた。

「きみか、まゆみの姫というのは？」

「はい」

「おれは、東京へ出たとき、きみの家をたずねた」

「焼けていたでしょう」

「ああ、焼けていた」

「私は、命からがら逃げだしたのです」

「黒矢から聞いた」

ふたりは、都会の若者となんら変わりのない会話をした。

卍の家を出てから、神四郎は、意識がふつうの若者になっていた。神州一族の族長であるこ

とも、いっとき、忘れていた。
「私、族長の許婚ですね」
「そう聞いている」
神四郎は、安曇野の山林のなかで、猿人に犯されていたまゆみの姿を思い出した。
犯した猿人は、バサラだった。神四郎は、まゆみを不憫に思った。
その不憫さは、まゆみを愛しく思う気持ちから発していた。
神四郎は、まゆみに好意を抱いている自分に気づいた。ひと目惚れ、というやつかもしれない。
いや、惚れたはれたではなく、肉親に対する愛のようなものだった。ともに神州一族という闇に潜む血族集団に生まれて、外部世界の匂いを吸って育ったという境遇からくる一体感が、神四郎にまゆみを兄妹のように親しい存在にさせていた。
神四郎は、ほのぼのとした気持ちになった。
殺伐な世界をくぐりぬけてきたばかりなのに、神四郎はのびのびと運転していた。
「私……」
不意に、まゆみは、声をつまらせた。
「どうしたんだ?」
「族長の奥方になれない。汚れた体になってしまったの。族長の奥方は、生娘でなければいけない決まりですもの」
「古くさいこと言うのは、よせ」
神四郎は、しかりつけた。
ヘッドライトのあかりのなかに、飛び込んできた者がいる。
神四郎は、急ブレーキをかけた。
「猿人よ」
まゆみは、おびえた。
神四郎は、四、五メートル先に立ちはだかって、牙をむいている猿人を見つめた。
猿人は、手を振った。
「ケサラだ」
神四郎は、よろこび、リヤドアをあけて、クラクションを鳴らした。
ケサラは、躍るように走ってくると、リヤドアを手でなでながら入ってきた。
うぐう、ぐう……
ケサラは、感激した声を出して、気絶したままの八木を押しやりシートに腰をおろした。
「黒矢や青矢を見なかったか?」
神四郎は、振り向いて訊いた。
「うがっ、がっ」

ケサラは、首を振った。……

## 第六章　最後の審判

### 1

——神州満月城から尾根ひとつの地点に、黒矢らが到着したのは、陽がだいぶ高くにのぼっていたころだった。

それでも、往路の三分の二の時間しかかかっていない。

神州一族が存亡を賭けての瀬戸際で、彼らは、その超人的な山岳走破能力のすべてを出しきって、駆けつけたのである。

黒矢、青矢のほかには、ふたりのやまと赤軍メンバー、それに神州犬三匹が、復路の行程に加わったすべてであった。

「——煙が立ちのぼっている」

黒矢は、暗い表情して、後続の部下たちを振りかえった。

「城は、すでに落ちたのでしょうか？」

青矢が、秀麗な眉根を皺寄せて立ち止まった。



「わからん」

黒矢は、首を振って、

「行くぞ！」

と、語気もするどく言って、斜面を駆け降りだした。青矢たちも、すぐに駆け下った。

神州犬たちは、黒矢を追い越して先を走った。

黒矢たちが神州満月城の麓に達したとき、地鳴りが聞こえた。

「噴火が近い」

黒矢は、つぶやくと、脱兎の勢いで、入口へ通じる坂の道を駆けあがった。

三匹の神州犬は、すでにその道をのぼりきって城内に消えたところだった。

青矢たちは、黒矢のあとを駆けあがって、途中で銃撃の音を聞いた。

連続した銃声で、自動小銃の発した銃声らしい。

黒矢は、入口に飛び込んで、石の段を降りたところの部屋で、青矢たちを待った。

「首領」

青矢は、石段を跳躍して床に一気に降りると、

「温度があがっていますな」

と、続けた。

蒸し風呂のようだった。

「満月城は、きょうが滅びのときかもしれぬな」
黒矢は、魁偉な相貌にじっとりと汗をにじませていた。
部下のひとりが、床に這いつくばった。右耳を床におしつけた。
「どうだ？」
首領が聞いた。
聴覚が異常に鋭い男だった。
「女、子どもの泣き叫ぶ声が聞こえます。殺戮が行われているようです」
「どこの部屋だ？」
「氏神の間です」
「ほかは？」
「静かです。人の気配はしません。ただ、族長の間に……」
耳のよい部下は、ふっと黙った。
「なにが行われている？」
「探しものでしょう、早く探せ、と急きたてる声が聞こえます」
「連判籍を探しているな」
「あ、族長の間で、女が殺されました。知らない、と言い張って殺されたようです」
「うぬ！」



黒矢は、憤怒の形相を見せた。
額から汗がしたたった。
「行くぞ、氏神の間だ！」
黒矢は、氏神の間に通じるいちばん近い通路に飛び込んだ。
青矢たちは、雄叫びともうめき声ともつかぬ声を発して、黒矢に続いて入った。
通路の燭台は、消されていなかった。
いたるところから蒸気が噴き出ていた。
壁の割れ目、床のひびは、すべて噴出孔と化している。
蒸し風呂というより、熱地獄だった。
黒矢たちは、蒸気のなかを駆けぬけた。
阿鼻叫喚が、谺し、共鳴して、うおーんと伝わってきた。
黒矢たちが、氏神の間に駆け入ったとき、そこでは凄惨な光景が展開されていた。
岩の塔に、神州一族の女、子どもが、張りついていた。
シューッ、シューッ、と音を立てて噴きだす蒸気を受けて、女、子どもたちは、泣き、わめき、叫んでいた。
岩の塔の下、溝の外側には、玄武会員十数人がとり囲んで、自動小銃の銃口を岩の塔に向けていた。

岩の塔の下、溝のなかには、息絶えた人々の死体が、積み重なったり、浮かんでいたりして、むごたらしい眺めだった。

岩の塔から、ふたりほど、蒸気の熱に耐えかねて、落下した。

それに向けて、いくつかの自動小銃が火を噴いた。

岩の塔は、てっぺんから蒸気とはちがうものを噴きあげていた。

噴煙だった。

黒矢たちは、氏神の間で行われていることを一瞬のうちに見てとった。

玄武会員の死体も、溝の外にいくつか転がっている。

そのうちのふたつは、ひと足もふた足も早く飛び込んだはずの神州犬の死体と、いっしょになっていた。神州犬は、それぞれの死体の喉に食いついたまま、息絶えている。

神州犬もろとも、玄武会員は、仲間に撃ち殺されたようだった。

神州犬の死体は、ふたつだけだった。

もう一匹の姿が見えなかった。

黒矢が、一秒の何分の一かで、そうした状況判断を行ったとき、青矢たちは、玄武会員に飛びかかっていた。

自動小銃が、青矢たちに乱射された。

青矢は、三メートルも跳躍した。



あとのふたりは、跳躍したが、伸びが足りず、ひとりは銃弾を腰にまともにくらって床にいざった。

もうひとりは、胸に数弾は確実に受けたはずなのに、着地すると、いちばん近くの玄武会員に飛びかかり、その自動小銃をとりあげて、撃った。

自動小銃をとりあげられた玄武会員は、絶叫をあげて、バッタのように跳ねて死んだ。

ほかに、ふたり、三人と倒れた。

自動小銃を撃ちつくしたあと、そのやまと赤軍のメンバーは、

「お先に――」

と、別れの言葉を発してばったりと前のめりに倒れた。

死力をつくして闘ったのである。

そのときには、青矢は、ひとりの玄武会員の首の骨を折り、その男から奪いとった自動小銃で、その男を楯に他の玄武会員に銃撃を加えていた。

その射撃で、ふたりが倒れた。

斜め背後から青矢に銃口を向けた玄武会員は、黒矢の手裏剣で後頭部を刺し貫かれて、引き金をひきながら倒れた。

残りの玄武会員は、黒矢たちが出てきた通路とは別の通路から逃げた。

「首領、殺してくれ」

腰をうたれて、もがいていたやまと赤軍メンバーが哀願した。
「この氏神の間で死にたい。われらの先祖の霊の仲間に入って、この地に留まりたい」
「よし」
黒矢は、そのメンバーの頭に銃口を向けた。
銃口が火を噴いた。メンバーの頭がザクロの実のように爆ぜた。
岩の塔から、女、子どもが泣きながら降りてきた。全部で、十人に充たなかった。
全員、顔をやけどしていた。手や足も、水泡状を呈して、ふくれあがっていた。
氏神の間は、じっとしていたら蒸し焼きになりそうに熱していた。
「――みなの者、よく聞け！」
黒矢は、生き残った神州一族を見わたした。
「満月城の余命は、いくばくもないとみた。これより、おのおのの部屋へもどって、直ちに棄城の仕度をせよ。城外東方一里の猪乃巣の谷にておちあうことにしよう。急げ！」
黒矢は、そう言い終わったときには、身をひるがえして、族長の間のある通路へ走り込んでいた。
青矢は、自動小銃を捨てると、
「首領の言いつけを守れ！」
と、どなり、黒矢のあとを追った。



生き残りの神州一族は、それぞれの部屋がある通路へ走った。
族長の間へ飛び込んだ黒矢は、かすれた声を出して立ちすくんだ。
岩をえぐった湯船に、三人の女が浮いて死んでいた。全裸だった。いずれも、股間をえぐられていた。
彼女たちは、神四郎の相手をした巫子たちだった。
岩の床に、もうひとり死んでいた。乳房に銃弾を撃ち込まれたらしく、乳首が飛び、肉が弾けたように吹き飛んでいた。
窪みになったところに、血がたまっていた。
「――ひどいことをする」
あとから入ってきた青矢が、震えた声で言った。
奥の寝室から、ハンターのようなかっこうをした小柄な男が出てきた。左手に、巻物を持っていた。
小柄な男は、黒矢たちと目があうと、瞬間的に飛びすさった。
青矢が、豹のように突進した。小柄な男の首を右腕で巻いた。
小柄な男は、巻物を手放して悲鳴をあげた。青矢は左手の指二本で、同時に小柄な男の両眼を突いた。
小柄な男は、絶叫した。

青矢は、小柄な男の両眼に突き入れた指を鉤型に曲げた。
そして、小柄な男の体を押し離しながら、指を抜いた。
小柄な男は、両眼を手でおおって、跳びまわりながら、苦しがった。両眼から血を流し、薄気味のわるい声を洩らした。
青矢の左手の指の二本は、小柄な男の両眼をえぐりとっていた。
青矢は、ふたつの眼球を湯船に放った。
「連判籍は、無事よ」
黒矢は、小柄な男の苦しむさまを一瞥してから、青矢を見た。
青矢は、うなずいてから、小柄な男に、
「苦しめ、生きているかぎり、苦しめ！」
と、憎しみをこめて言った。
小柄な男は、ふらふらと、薄気味のわるいうめき声を出しながら、湯船の近くを歩きまわった。
湯船の縁につまずいて、湯のなかへ落ちた。ふたつの眼窩から血を噴き出しながら、小柄な男は、湯を跳ねとばしてもがいた。
「行くぞ」
黒矢は、湯に落ちた小柄な男の頭を蹴りつけた青矢に言った。



神州満月城が揺れた。地の底で、爆発が起きたようだった。
黒矢と青矢が氏神の間へもどったとき、岩の塔が轟音とともに吹き飛んだ。岩礫があらゆる方向に、噴き飛んだ。
ふたりは、爆発した瞬間、床に伏した。
しばらくして青矢は、顔をあげた。砂のような岩のかけらが、まだ霧のように降り注いでいた。
黒矢が、青矢の斜め前方に倒れていた。
岩礫の直撃を受けたらしい。
「首領！」
青矢は、黒矢のところへ駆け寄って、黒矢を抱き起こした。
黒矢は、胸が陥没していた。
「――おれは、もうだめだ」
黒矢は、あえぎながら言った。
「しっかりしてください。傷は浅い！」
「気休めを言うな。青矢、生き残った女、子どもたちを頼む」
黒矢は、すでに死んでいる状態だった。
しかし、最後に残った気力で話をつづけた。

「すぐに安住の地を探せ。神州一族の血を絶やしてはならぬ」
「首領！」
青矢は、黒矢の肩を揺すった。
「族長と、まゆみの姫は、表の世界におもどしろ。族長は、表の世界でやがて名を出す。神州一族が平和で、よろこびにあふれた生活ができるよう、いつの日か、とりはからってくれるだろう」
黒矢は、右手ににぎりしめた巻物を青矢に差し出しながら、
「これを、族長に……」
と、言った。
「渡すのですね？」
青矢は、巻物を受けとった。
「そうだ」
と、黒矢は、うなずいた。
すでに、黒矢の顔は、死後硬直の徴候を表しはじめていた。
肉体は、とうに死んでいたのである。
爆発音が聞こえた。
地獄道門がある方角からだった。



「青矢、すぐ逃げろ。氏神の間より、地獄道門の噴火孔のほうが大きいぞ」
黒矢は、唇だけかすかに動かして、そう言うと、がっくりと首を折った。
「首領！」
青矢は、涙にあふれた目をこすった。
地獄道門のある通路が鳴動した。
青矢は、立ちあがると、通路のひとつに駆けた。その入口に青矢の姿が消えるか消えないうちに、地獄道門のある通路から赤く熱した溶岩流が流出してきた。
溶岩流は、岩礫と死体の散乱する氏神の間をあっというまに舐めつくして、なおあとからあとから流れ出て、氏神の間を埋めつくす勢いを見せた。
さっき吹っ飛んだ岩の塔の跡が爆発した。溶岩をまじえた、大きな岩礫が天井へ飛び、天井の穴を広げた。
さらに、大きな岩塊が追いうちをかけて、天井は、がらがらと崩れはじめた。……

## 2

——神四郎が、安曇野の穂高までロールスロイスを走らせて、その付近の山林で、里人に見つからないような場所に車を乗り入れたのは、神州満月城が噴火をはじめたときだった。
神四郎は、八木に猿グツワを噛ませ、その両手両足を縛ってからケサラに番をまかせて外に

出た。まゆみは、先に出て待っていた。
「急ごう、早く行くぞっ」
神四郎は、樹林のなかを駆けた。
まゆみは、裸足になってついてきた。やはり、シノムラの娘だった。神州一族の血筋をまともにひいているその足は、息を切らさずに上体を運んだ。
ふたりは、穂高連峰と、その南東一帯に大波小波のように重畳とした山々を見わたせる高地に出た。
東天井岳と大天井岳を結ぶ線の途中に、噴煙があがっていた。
「――満月城が噴火している」
神四郎は、声を震わせた。
「祖霊ますお城が滅びるわ」
まゆみは、唇をわななかせた。
「みな、どうしただろう？　行ってみなければ……行こう」
神四郎は、まゆみをうながして、斜面を降りだした。イタヤの木が多い林だった。
東天井岳の南麓にまわり込んで、大天井岳に通じるシノムラの道に入ったとき、犬の吠え声がした。
神州犬の吠え声だ、と神四郎は直感した。



しばらくして、熊笹のなかから神州犬が現れた。
神四郎が呼ぶと、神州犬はうしろを振りかえって吠えた。
ヒュール……
指笛が近くで鳴った。
すぐに、ひょっこりという感じで指笛の主が現れた。青矢だった。
「族長」
青矢は、駆け寄って神四郎の無事をよろこんだ。
「姫もご無事か」
「……」
まゆみは、うなずいてほほ笑んだ。
「満月城は？」
神四郎は、空を振りあおいだ。
噴煙が空を霞ませていた。フケのような灰が、ぱらぱらと降ってきている。
新聞社のヘリコプターが飛んできた。
三人は、木陰に移動した。
「滅びました」
「黒矢は？」

「氏神の間で、城と運命をともにしました」
「死んだか。あの黒矢が死んだか」
神四郎は、つかのま、黒矢の霊が安らかに眠るように祈った。
「あとの者たちも、みな死んだか」
「いえ、私を入れて、九人、生き残ることができました」
「九人か。みなに、会いたい。どこにいるんだ?」
「……」
青矢は、首を振って黙った。
「別れ別れになったのか?」
「そうではございませぬ」
青矢は、不意に、古風な言葉遣いになった。
「とは、どういうわけだ?」
「私は、生き残りを連れて、安住の地を探す旅に出ます」
「おれも行くぞ」
「族長、首領の遺言を聞いてくださらんか」
「黒矢の?」
「族長は、まゆみの姫とともに、表の世界で生き続けてほしい、と申しておられた」



「闇の翁や、それに操られている者たちが策謀している醜い世界でか」
「シノムラの大義、神州一族の精神は、どこの世界にあっても不滅でありますれば、族長と姫は、表でわれらの支えとなるご活躍をなさっていただきとうござる」
「黒矢が、そう言ったのか?」
「さようでござる」
「おれは、母上を救出せねばならぬ。闇の翁を殪さねばならぬ。それには、どうしても表にいなければならぬが……」
「そうされていただきとうござる」
青矢は、深々と頭をさげた。
神四郎は、青矢が別世界の人間のように見えた。
東京を発ち、安曇野へ入り、生家の跡に立ったときから、今日の未明に卍の家を出るまでに自分が味わったこと、かいくぐってきた世界はなんだったのか。神四郎は、つかのま、気が遠くなるようなここちがした。
「おれは、さっき申した二つのことをすませたら、一族の許へ帰る」
「……」
青矢は微笑してうなずき、そのあと、強く首を振った。
「おれは、神州一族の族長だ」

「それだけは、いつまでもお忘れなきように」
青矢は、手にしていた巻物を、神四郎の手に受けとらせて、
「連判籍です。どのように活用されても、けっこうです。名に赤線のあるものは、表の世界にいる、われらの数少ない同志でござれば、なにかのお役に立つかと――」
と、言った。
「これが、連判籍か」
神四郎は、巻物をつかのまながめた。
「それでは、ご武運を……」
青矢は、神四郎から離れかけた。
「待て」
と、神四郎は、呼びとめた。
「……」
青矢は、立ち止まった。
前を向いたままだった。
「ケサラの妻と子は、無事か」
「いいえ」
青矢は、首を振った。



「そうか。ケサラは、最後の猿人になってしまったのではないか？」
「おそらく。満月城へ侵入した敵は、味方であった猿人の住み処を急襲して、みな殺しにし、その存在がなかったようにするため、焼き、骨を埋めた、とわれらの生き残りが申してござれば」
「むごいことをする」
「この神州犬も、最後の一匹でござる」
「ふたつの種が、この地上から滅びるか。猿人と、神州犬と……そのふたつが」
神四郎は、ため息をついた。
「それでは」
青矢は、ヒュール、と指笛を吹いて駆けだした。
青矢と神州犬は、たちまちのうちに樹林の奥深くに姿を消した。
ヘリコプターが低空を旋回して、噴火の状態を観察している。
まゆみは、涙ぐんでいた。
「まゆみ」
神四郎は、まゆみをひき寄せた。
自分が神州一族である証しは、まゆみと末長く生活することだ、と思った。
神四郎は、自分がまゆみを愛していることを、はっきりと意識した。

「まゆみ、おれと結ばれるか？」
「……」
まゆみは、いっとき、神四郎を見つめていた。
やがて、うなずいて、強く神四郎にしがみついてきた。
神四郎は、巻物を腰にはさむと、まゆみを抱きあげた。そのまま、歩きだした。
神四郎は、草原の窪みに、まゆみをおろした。
荒々しく、まゆみの服を脱がせていった。
まゆみは、自分の体をおおうものがすべてなくなると、身をくねらせた。
きれいな、みずみずしい体をしていた。
草の緑のなかで、その白い肌は、磨いたばかりのように艶を放っている。
「いや、見つめちゃ」
まゆみは、顔を横向けて目をつむった。
神四郎は、ゆっくりと服を脱いでいった。
ヘリコプターが二機になっている。爆音がうるさかった。
空にこもる噴煙の量が多くなって、少し薄暗くなっている。
「見てくれ」
神四郎は、全裸になると、そう言った。



まゆみは、目をつむったまま、顔だけ上向けた。
「見るんだ、おまえの夫の体を」
神四郎は、仁王立ちになっていた。
まゆみは、目をあけた。
あえぐように息をして、神四郎の肉体を見つめた。
「おれは、神州一族の族長として、おまえを娶る」
神四郎は、倒れかかるように、まゆみの体にかぶさった。
まゆみは、神四郎のものを受け入れたとき、大きな声で叫んだ。
自分は奔放なたちなのか、と神四郎の腰の動きに応えながら思った。胸に〝傷み〟があった。
猿人は、神四郎の話によると、バサラという統領だったらしいが、そのバサラに犯されたことを、自分の原罪とみなしており、それからくる傷みであった。野卑で、金と権力をもってすれば、女はどうにでもなる、と思い込んでいる八木に対しては、むしろ、交通事故に遭ったようなものだ、とあきらめがつく。
しかし、バサラに対しては、ちがっていた。
処女であった身を犯された、というくやしさもあった。
それ以上に、まゆみは、バサラに犯されているとき、肉体的な快感はなく、精神的な快感を味わっていた。被虐の快さ、といったものだろうか。

それよりも、野生の血、荒々しい息吹きというものを受け許していたようなところがあり、そういう自分におののいたものだった。

「――まゆみ」

神四郎は、はげしく、まゆみの乳房をまさぐり、つかみながら、言った。

「おれは、闇の翁を許さない。母上を、あんな女にした闇の翁を許さない。殺す。おれの手助けをするかっ？」

「……」

まゆみは、あえぎながらうなずいた。

母上を早く救けなければならない。

般若の面をとってあげなければ、飢え、渇して死ぬのである。

神四郎は、腰をグラインドさせながら、落とした。

まゆみは、高い叫び声を発した。……

## 3

――東京の大泉に、黒豹を飼っている家がある。大崎五郎太の家だった。

土地成金だった。

しかし、土着の百姓あがりの家ではなかった。



大崎は、まだ、大泉あたりの土地の価格が二束三文であったころ、三、四町歩も買いあさって、草ぼうぼうにしてほったらかしにしていた。

土地ブームになったころ、少しずつ切り売りしていった。それを資金に、分譲マンションを建てたり、ゴルフの練習場を経営したり、サラ金業者に投資したりした。

大崎は、いまは、大泉地区を地盤にした都議会議員になっている。

その屋敷は、一町歩（九十九アール）の敷地を持ち、三百平方メートルの建て面積を有する堂々たるもので、近隣の人々は、大崎御殿と呼んでいた。

敷地内には、自然林もある。クヌギの林だった。

大崎は、その林の中央部を切り拓いて、檻舎をつくり、黒豹を飼いだした。

横浜の輸入動物業者から買ったときには仔だったが、一年ほど経って成獣になると、夜の遠吠えが近隣の人々の悩みの種になった。

苦情がくる。

警察に呼ばれて、動物園に寄付するなり、薬殺処分するなりして、なんとかならないか、と忠告とも説諭ともつかぬことを言われたこともある。

しかし、大崎は平然としていた。

逆に、近所の犬の鳴き声がやかましくて、寝られぬの、飼い猫が庭に入り込んで植木を荒らすの、サカリがついて子どもの教育にわるいの、と難くせをつけるありさまで、警察もサジを

投げた。

大崎には、娘がいる。

エミと言って、十九歳になる。私立高校を去年の春に卒業していた。

母親は、いなかった。

十年前に、病気で死んでいるのである。

エミは、高校時代は、ぐれていた。高校を卒業すると、家にとじこもるようになった。

そのエミが黒豹に魅せられた。

黒豹に対して、淫らなふるまいを見せるようになった。檻に入って、黒豹に頬ずりしながら、オナニーをする。

黒豹も、エミにはよくなついた。まるで猫のようになった。

エミには、シャーマン的気質が潜在していたらしい。

黒豹を思いのままに、動かすことができた。

黒豹に跳躍させたい、と思った直後に、黒豹は跳躍した。黒豹に吠えさせたい、と思ったときに、黒豹は吠えた。

はじめは、そのていどですんだ。

黒豹のエミに対するなつきようを、ひどく危険に思ったのは、大崎だった。

大崎は、紀伊半島のシノムラ出身だった。紀伊半島に生まれて、祈禱師として各地を流れ歩



いていたが、昭和二十七年七月の全国いっせいの住民登録実施に先立ってバケコミを行った。

大崎の妻も、やはり、祈禱師で、俗に言う歩き巫女だった。

歩き巫子とは、漂泊の巫女のことである。

紀伊半島の歩き巫女は、熊野比丘尼と言って、もともとは、地獄、極楽の絵巻の絵解き（紙芝居のように、絵図絵巻を解説する）をしていた女性をさしたが、しだいに歌舞を売りものにし、体を売るようになった。

熊野山伏と混合して、比丘尼の姿になって諸国をさすらったが、山伏の夫を持っていることが多かった。

むろん、山伏がそうであるように、熊野比丘尼も、一般社会から落ちこぼれてまぎれ込んできた者を除いて、すべてシノムラの構成員だった。

大崎の妻は、熊野比丘尼の伝統を精神、肉体の両面に色濃く受け継いでいた。

巫女、つまり、シャーマンは、幻覚、幻聴を神秘体験として自己コントロールできる点が、常人の幻覚、幻聴体験者とちがう。常人にとっては、精神不安、肉体衰弱が進み、幻視、幻聴が起きても、それだけで終わってしまうが、シャーマン性格の者だと、幻視、幻聴が、天界、地下界の別次元の世界を遍歴し、神々や悪魔的存在と出会い、語らい、降霊、降神の状態、俗に言う神がかり状態に陥る。

その状態を自己コントロールし、精神集中（祈禱）によって、いつでも引き出せるようにな

る。

シャーマンは、それができる。

東北地方にイタコという巫女が存在する。

頼まれて死人の霊を呼び、その言葉を自分の口で伝えるクチヨセをなりわいとしているが、このイタコは、シャーマンではない。

なぜかというと、クチヨセの術は、神秘体験を経ずして、クチヨセの技術を先輩のイタコから教えてもらい、習得しおえた段階でイタコとしてクチヨセを業にできるからである。

占いをおぼえるのとおなじで、一種の徒弟制度の世界である。極度の弱視か、盲目の女性が、この世界に入ることが多い。

熊野比丘尼は、歌舞音曲で人々を慰め、肉体で男を満足させる遊女であったが、シャーマン的呪力を有する者もまれではなかった。

大崎の妻の家系は、そのシャーマン的熊野比丘尼の系譜だった。

大崎夫妻は、バケコミをして、大泉に定住するようになり、祈禱師の足を洗い、土地の有力者になったが、大崎の妻は、神秘的な環境から抜けたことが裏目に出たのか、病気がちになり、エミが幼いうちに死んだ。

エミは、高校を卒業するまで、ふつうの女の子であったが、卒業して家にとじこもるようになると、偏食になり、不眠に陥り、しばしばてんかん性の発作を見せるようになった。



シャーマン的資質が、表に出るようになったのである。

黒豹を病的にかわいがるようになり、黒豹を相手に性的行為にふけるようになったのは、そのころであった。エミのシャーマン的資質は、黒豹を媒体として開花した、と言えるだろうか。

大崎は、そのことに気づいてエミの将来に危険なものをかぎとったのである。

エミは、やがて、黒豹を自在に操るようになった。

広大な屋敷に放ち、木に登らせ、池に泳がせた。まぎれこんできた犬、猫を襲わせるようになった。

大崎は、そのうちエミが自分を憎む人間を黒豹に殺させるのではないか、と不安になった。

エミがはっきり命じなくても、黒豹がエミの心を知り、エミの憎む相手を殺すこともありえた。

大崎は、エミと黒豹を隔離した。

エミは、食事をとらなくなり、一日じゅう、わけのわからない言葉を、つぶやいていることが多くなった。

大崎は、心配して、食事をとるよう説得し、黒豹を思いきらねば、おまえは衰弱して死ぬぞ、とおどしまじりに諭したが、耳を貸さなかった。

「――太郎のなかに、私の霊を降ろす」

と、奇怪なことを口走り、大崎を嘆かせた。

太郎は、黒豹の名だった。

ある夜、惨劇が起きた。

エミが太郎の檻に入り、太郎に喉を食いちぎられて、重傷を負ったのである。

エミは、すぐに入院したが、その三日後に死んだ。大崎は監督不行届きで、書類送検処分になり、そのおり警察で太郎の飼育をやめるよう説諭されたが、聞かなかった。

大崎は、太郎がなぜエミを襲ったかを知っていた。エミは、自分の霊を太郎のなかに宿らせて、太郎に自分を殺させようとしたのであろう。

太郎は、エミの意思のとおりにエミを襲ったにすぎない。

エミが降霊している太郎を、大崎は処分する気になれなかった。

エミが死んだのは、神四郎が東京を発ち、安曇野に入った日の、ひと月ほど前のことだった。

そして神四郎、まゆみ、ケサラの三人が、密かに大崎家を訪れたのは、神州満月城が噴火した日の夜のことである。

大崎の名は、連判籍に載っていた。

しかも、朱の傍線がついていた。大崎は、神州一族とは、系統のちがうシノムラ出身者だが、まゆみの父と親交があり、神州一族のよき理解者だった。

まゆみは、学年では二年後輩のエミと仲がよかった。

連判籍を神四郎と見ていて、大崎を頼ろうと言いだしたのは、まゆみだった。

まゆみは、エミの死んだことを大崎家を訪れてはじめて知った。



大崎は、不意に訪れた神四郎たちを、喜んで迎えてくれた。

エミが死んだあと、大崎家には、大崎の肉親はいなくなったが、大崎が経営するゴルフ場や、サラ金会社の社員が三、四人、書生がわりに住んでいた。

大崎は、自分の経営する事業のなかで、シノムラ出身者だけを屋敷に起居させていたのである。いわば、腹心だった。

その腹心たちに、大崎は、シノムラの大義を説き、神四郎を族長といただく神州一族の歴史について語り聞かせた。彼らは、秘密を守ることを誓った。

神四郎たちが大崎家についた日、世間の耳目は、新大天井岳と命名された新しい火山のことに集まっていた。

新大天井岳は、珍しい火山活動として火山学者や気象専門家のあいだで、驚異の的になっていた。

火山帯のうちにある地点で起きた噴火であっても、それまで火山活動の兆しは、かけらほども、観測なされていなかったところである。

火山でないところが、火山になった。

それは驚異のほかのなにものでもなかった。

神州満月城のあった場所は、地形的にも陸のエアポケットのようなところであったし、シノムラ以外の人間が迷い込んでも、神州一族の手でキツネにつままれた状態になってもとのとこ

ろへ出てくるか、場合によっては神隠しになった。

神隠しは、里人から見てのことで、じっさいは満月城の秘密を守るために、神州一族が痕跡を留めぬやり方で抹殺していたのである。

「――満月城は、噴火とともに、永遠に一般人には、闇の存在になりましたなあ」

神四郎たちを迎え入れた夜、大崎はそう言って肩を落としたものだった。

数年前の木曾御岳、ごく新しいところでは白根山とか、五百年、千年と休止していた火山が火を噴く例が、このごろは多い。

富士山が近くに大爆発を起こす、とさまざまなデータを分析して得た結論を、自信たっぷりに話す気象専門家もいる。その著書が、ベストセラーになっている。

新大天井岳の誕生が、世間の注目を浴びる条件は、整っていたのである。

もうひとつ、世間の耳目をそばだたせている事柄があった。

それは、政局の動きである。

鈴原首相が突然、辞任した。

首相をやめることは、民友党の総裁を辞任することであり、民友党では、後継総裁の選出にかかりだした。

後継総裁、即、次期首相である。

後継総裁の候補は、四人いた。その四人のなかでは、小木曾が主流派に推されていちばん有力と言われている。

民友党では、党則の定めるところによる総裁選挙があるが、話し合いによって選出した例も多い。

今回は、話し合いによる選出方法がとられる可能性が大であった。実際に、鈴原首相が辞任した日の夜には、鈴原首相、幹事長、大派閥の代表者をメンバーとする総裁選出会議が構成されて、話し合いがはじまった。

ところが、この総裁選出会議は、難航した。そのいちばんの原因は、総裁選出に決定的な影響力を行使できる人物が不在のためだった。

その人物とは、言うまでもなく、八木元首相である。八木は、政界関係者のあいだでは、どこかに潜んで、小木曾政権誕生の秘策を練っている、と思われていた。

その秘策がまとまったら現れるにちがいない、とだれもが思い、政治記者は必死に、その行方を探していた。

八木の行方は、八木派のだれもが知らなかった。

政商の大里、右翼の巨頭の関谷、天日相互銀行会長の野沢ら卍の家のメンバーは、少し前までは、八木の行方を知っているきわめて少ない人々であったが、むろん、いまは知らない。

知っているのは、神四郎、まゆみ、ケサラと、大崎、および大崎家に起居する大崎の腹心たちだけであった。

八木は、大崎家のガレージの二階にある部屋に監禁されているのである。
八木は、大崎家へ、その乗用車であるロールスロイスごと連れ込まれたが、その直前に気絶させられている。正気になったときには、ガレージの二階におし込められていたが、自分がどこの、なんというところに連れ込まれたのかわからないでいる。
大崎らは、八木のことは神四郎たちにまかせることにして、ノータッチだった。
神四郎は、大崎家で一夜をあかすと、さっそく八木を訊問したが、八木は闇の翁がどこに潜伏しているかも、よし恵の行方も知らないと言い張った。
拷問も加えたが、口を割らなかった。
拷問の場には、ケサラもいあわせた。
ケサラは、満月城に残した妻と子の運命を知ってからは、闇の翁に憎悪をたぎらすようになった。
神四郎には、そのケサラの心がよく見えた。
八木は、拷問に耐えかねて気を失っている。
その八木を見て、ケサラは首を絞めようとした。
「やめろ」
神四郎は、とめた。
ケサラは、神四郎の顔を見て、うぐっ、とかなしそうな声を出した。



神四郎は、そのケサラをうながして外に出た。
太郎のうなり声が聞こえた。
神四郎とケサラは、太郎の檻舎へ向かった。
檻舎は、運動場、寝室から成っている。運動場は、二十坪ほどの広さで、寝室と接しているところを除いた三方が鉄格子と鉄網で仕切られている。
太郎は、運動場に出ていた。
まゆみが、鉄格子にかぶせられている鉄網に頭をおしつけて、太郎を凝視していた。
「――まゆみ」
神四郎は、声をかけた。
まゆみは、振り向いて、
「八木は、しゃべった?」
と、訊いた。
「しゃべらない。ただ、ここを闇の翁が知るのは、時間の問題だぞ、と言った。闇の翁は、二昼夜の休養で、神通力をとりもどすそうだ。卍の家で、精神エネルギーを使いはたしたようだな。だが、神通力がもどれば、おれたちの存在を察知することができる。おれたちが、百キロ以内におればな」
「都内にいる可能性が強いようね」

「八木の感じから、おれもそう思った」
太郎が、ケサラに向かってうなり、牙を向いた。
ケサラは、ぐっぐっ、と力のない声を発した。
まゆみが太郎を見つめた。
とたんに、太郎はうなるのをやめた。
「まゆみが見たら、おとなしくなったな」
「族長、私、太郎を意のままにすることができるみたいなの」
まゆみは、自分がわからないといったふうな表情になって、神四郎を振りかえった。
「ほんとうか？」
「気味がわるいのよ。太郎にエミの霊が宿っているせいかしら。エミは、私の言うことは、なんでも聞いたから」
まゆみは、そう言って、
「これから太郎に、三べんまわらせて吠えさせるから見ていて」
「やってみてくれ」
まゆみは、太郎に顔をもどして、太郎をじっと見つめた。
太郎は、まゆみの顔を見ていた。双眸が一瞬、光ったようだった。
やがて、太郎は、うなだれた感じで頭を低くすると、円を描いてまわりだした。三回まわって、うなった。
「おどろいたな」
神四郎は、首を振った。
「太郎を使って、八木をおどしてみたらどうかしら？」
まゆみが、思いついたように言った。



## 4

——神四郎とケサラは、八木を連れ出して、太郎の檻のなかに入れた。
八木は、檻にとり残されると、黒豹を見たきり、立ちすくんだ。
「——た、助けてくれ」
と、檻の外にいる神四郎に訴えた。
神四郎は、八木をいつも全裸にしてあった。
全裸で、唇をわなわなかせている八木は、ぶざまであった。
「元宰相なら、その黒豹と闘ったらどうだ。闘って勝ったら、自由にしてやるぞ」
神四郎は、からかった。
「素手で勝てるわけがないじゃないか」
八木は、鉄格子に両手でしがみついた。

「男らしく闘え」
「無茶を言うなっ」
「シノムラの出身だろう？」
「親の代に、ふつうの人間になっている。おれは、ふつう人だ！」
八木は、背後に迫った黒豹におびえた。
鉄格子を背に、黒豹に向かいあうと、
「ナタをくれっ！」
と、わめいた。
黒豹は、うなった。
頭を低めて、八木を窺った。
まゆみは、じっと黒豹を見つめた。
（吠えておやり）
そう心で命じた。
黒豹は、牙をむき出して吠えた。
「わっ、うわっ！」
八木は、あわてふためいて、鉄格子伝いに横へ逃げた。
（跳んでおやり）



黒豹は、ひらりと跳躍して、八木の前に降りた。
八木は、
「助けてくれようっ」
と、なさけない声で言うと、手で黒豹を追いたてるまねをした。
（爪を立てておやり）
黒豹は、うなりながら、後肢で立ちあがると、右の前肢を八木の左肩にかけた。爪が肩の肉に食い込んだ。
八木は、悲鳴とも絶叫ともつかない声をあげた。
「闇の翁の潜んでいるところを言え！」
神四郎は、命じた。
「しっ、知らぬ」
八木は、必死に首を振った。
「それじゃ、食われるんだな」
神四郎は、あざけった。
黒豹は、左の前肢も、八木の肩にかけた。
両肩に深く爪を立てられて、八木は、
「やめろーう！」

と、絶叫した。
黒豹は、牙をむいた。
牙で、八木の鼻を軽く噛んだ。
「やめさせてくれえー！」
八木は、顔を必死に檻の外に向けて叫んだ。
「言うか？」
「言う、言う！」
八木は、神四郎に向かってうなずいた。
鼻の頭から、血を噴き出していた。
（離れなさい）
まゆみは、心で命じた。
太郎は、八木から離れた。
八木は、肩を上下させてあえいだ。
「闇の翁は、どこにいる？」
神四郎は、訊いた。
「檻から出してくれ」
「言ったら出してやる」



「喉が、からからだ、せめて水を一杯、飲ませてくれ」
八木は、なかなか言おうとはしなかった。
黒豹がうなった。すぐにも飛びかかる体勢になっていた。
「言う、言うから、もっと離れさせろ」
八木は、太郎におびえきっていた。
権力に執着している人間は、命にも執着が強く、女々しいものだ、と神四郎は思った。
「どこにいる？」
「奥多摩だ。秋川渓谷の数馬山荘におられるはずだ」
「数馬山荘？」
「もとは、大里の別荘だ」
「母上も、そこにおられるのか？」
「闇の翁が連れておられればな。しかし、連れておられるかどうかは知らぬ。卍の家の、あのときの状況を考えるとな」
「闇の翁は、まだ神通力を回復していないな？」
「しておられん。しておられたら、わしはしゃべれぬ」
「数馬山荘は、闇の翁の住み処か？」
「仮りのな。闇の翁のほんとうの住み処は、だれも知らぬ。ただ、このところは、あそこで

われわれ卍の家のメンバーの心をお読みになっている。数馬山荘は、それができるぎりぎりの距離にある」

八木は、そこまで言って肩を落とした。

「神通力がもどったら、わしは制裁される。いや、わしもただ制裁はされんぞ。いざとなったら、シノムラの秘密を満天下にさらしてやる」

八木は、ぶつぶつと言った。

夜になるのを待って、神四郎はまゆみ、それにケサラと太郎をともなって、ロールスロイスで大崎家から出た。

神四郎とまゆみは、ハイカーのかっこうになっていた。

ケサラには、山林労務者のかっこうをさせた。そういう服装をさせても、異様は異様だったが、外から乗っているところを見ただけの人間は、ふつうの人間と思ってくれるだろう。

太郎は、トランクに潜ませた。

一時間後、ロールスロイスは、秋川の奥にある檜原村の数馬集落に入った。

数馬集落は、甲州武田家の落武者が開いた集落だという説もあり、東京都のうちとは思えないひなびた土地である。

人家も、ぽつんぽつんと渓谷沿いの山の中腹にある。古い人家は、兜造りと言って、屋根が側面から見ると、兜の形をしている。



茅葺きだった。

そうした数馬の特徴を有している家屋が、少なくなってきた。

近年は、外部資本も入って、観光施設が増えている。

神四郎は、ニジマスの釣り堀と休憩所を兼ねているところの、ひっそりしたガレージにロールスロイスを乗り入れた。無料駐車場と書いた看板が出ており、夜のいまは一台も駐車していなかった。

神四郎たちは、少し上流に行って、対岸に渡った。

八木から、数馬山荘の所在地はくわしく教えてもらってある。

対岸の、細い道をしばらく歩いた。

太郎は、夜見ると、影が動いているようだった。

「――あれよ」

まゆみが、右手の灌木の林を指差した。

ゆるやかな斜面の灌木林だった。

その灌木林を切り拓いて、どっしりとした家が建っている。ロッジふうの造りだった。屋根が三角形をしていた。

その家を囲んで、石を積みあげた塀が見える。

八木に聞いたとおりの建物だった。

「まちがいない」
神四郎は、うなずいて、ケサラに、
「よこせ」
と言った。
ケサラは、背に暗闇の剣を背負っていた。
「うぐっ」
ケサラは、暗闇の剣を手にとって、神四郎に渡した。
そのときだった。
目の前の大地がぐらりと傾いた。
あっ、とまゆみは叫び、直後に尻餅をついた。ケサラもバランスを失って、よろけた。
神四郎は、数馬山荘に目を凝らしていたので、地の揺れたのに気づかなかった。
ちゃんと両足で立っていた。
「――闇の翁が神通力を回復したぞ。気をつけろ」
神四郎は、まゆみを助け起こした。
「じっさいは、なにも起きておらん。惑わされなければ、平気だ」
大地は、揺れていた。
突風が吹いて、ピューッ、ピューッ、と音がした。



「あ、父の声……」
まゆみが、神四郎にしがみついた。
「しっかり立つんだ。揺れている、と思っちゃだめだ。お父さんの声も幻聴だ！」
神四郎は、まゆみの頬をたたいた。
うぐっ、ぐわっぐわっ……
ケサラが、おびえたような叫びを発して、秋川側によろけた。谷底の川の流れまで、二、三十メートルはある断崖。
「気をつけろ、ケサラ！」
神四郎は、どなった。
太郎は、なにごともなかったように歩いている。
「太郎を見ろ」
神四郎は、まゆみに言った。
「闇の翁の神通力も、太郎には、きかないらしいぞ」
すぐ右手の灌木が、がさがさと音を立てて揺れた。
太郎が、跳躍してあとずさった。
大きな影が現れた。
黒牛だった。黒牛は、荒い息遣いをして、神四郎をにらんだ。

目の玉が黄色く光って、不気味だった。
「小僧めっ」
黒牛は、しゃがれた声で言った。
「闇の翁に、操られているな」
神四郎は、暗闇の剣を抜いた。
黒牛は、うなって跳ねた。
黒牛とは思えない跳躍力だった。斜め横に浮きあがるように跳ねて、そこにいたケサラに角を突き立てた。
ケサラは、左肩を突かれてうめき声をあげながら、うしろへ倒れた。そのケサラを、さらに黒牛は角を突っかけようとした。
(族長、黒豹があなたを狙っている!)
突然、黒矢の声が、神四郎の意識のなかに響きわたった。
「黒矢、生きていたのかっ」
神四郎は、なつかしさに襲われた。
(黒豹が族長を……そやつには、闇の翁の生霊が降りていますぞ)
「なんだと?」
神四郎は、暗闇の剣を抜いた。



太郎は、少し先で神四郎を見あげていた。
口をあけて、赤い舌を出してうなった。
「こいつ、闇の翁め!」
神四郎は、暗闇の剣を振りかざした。
太郎は、大きく跳躍して、ケサラを突いていた黒牛の背に飛び乗った。
そして、後頭部と頸の境目あたりに噛みついた。
黒牛は、あと肢立ちになって苦しがったが、太郎は黒牛を噛み続けた。黒牛は、大きなうなり声を発して、バランスを崩し、秋川の谷底に太郎を乗せたまま、落ちていった。
「太郎!」
まゆみが流れを覗き込んで呼んだ。
「おれは、太郎を殺そうとした。闇の翁は、黒矢の声を送り込んできた」
神四郎は、暗闇の剣をひと振りして、自分を責めるように言った。
ケサラが立ちあがった。左肩と胸にけがをしたようだった。
「だいじょうぶか?」
神四郎が気遣うと、ケサラは、うぐう、とうなずいた。
太郎が崖をあがってきた。けがはしていないようだった。
「太郎、よくやった。ありがとう」

神四郎は、礼を言った。
地の揺れはおさまり、突風もやんでいた。

## 5

——数馬山荘の門扉は、高さ二メートル以上は楽にある鉄扉だった。
その内側は、竹藪になっていた。
数馬山荘そのものへは、竹藪のなかの、わりと急な坂道を登ってはじめて到達できるようだった。
「——静かだな」
神四郎は、つぶやいた。
「罠があるのかしら？」
まゆみは、不安がった。
「わからんが、闇の翁は、手ぐすねひいて待っていよう」
神四郎は、まゆみに、
「外で待つか？」
と、訊いた。
「いや」



まゆみは、強く首を振った。
「よし」
神四郎がうなずくと、太郎がまず門扉を跳び越えて内側に入った。
続いて、ケサラが門扉に右手で飛びついて、その右手の力だけで自分の体を途中までひきあげると、あとは反動を利用して軽々と向こう側に飛んだ。
けがをしているようには見えない体力だった。
「さあ」
神四郎は、まゆみを抱きあげると、門扉の内側へ放った。
まゆみも神州一族の娘である。腰をうつようなことはないはずだった。
最後に、神四郎が門扉を乗り越えた。
竹藪のなかに開けた道は、階段のついた坂道だった。神四郎は、上方を窺って、
「これでは見通しがよすぎる。竹藪のなかをあがっていこう」
と、言った。
神四郎、まゆみ、ケサラ、それに太郎は、竹藪のなかを登っていった。
見事な孟宗竹の竹藪だった。
霧が吹き流れてきた。乳色の霧だった。
視界が乳色に塗り込められていく。

「気をつけろ」
神四郎は、自分に言い聞かせるように言った。
霧のなかを黒い影が疾った。
ひとつではなかった。三つ四つが、ジグザグ模様に、たがいに交叉するように疾っていた。
太郎が、すさまじいうなり声をあげた。
「動くなっ」
神四郎は、まゆみをおしとどめた。
「なにかしら？」
「熊だ、月の輪熊だ」
神四郎は、緊張した。
少なくとも、四頭はいる。秩父山系から奥多摩山系には、月の輪熊が少数ながら棲息している。
闇の翁は、そのような月の輪熊をおびき出して、操っているのにちがいなかった。
ケサラが、竹に飛びついた。竹を登りだした。
月の輪熊は、澱んだ淵の水中を疾るヤマメの影のように、霧のなかを疾っている。
太郎が、その一頭に飛びかかった。
すさまじいうなり声と吠え声がまじり、影がもつれ、ひとつは動かなくなり、ひとつは神四



郎のほうに向かってきた。
太郎だった。
ケサラは、十メートルほどの高さに登って、竹を揺すりだした。振り子のように、大きく揺すった。
すぐに、竹は大きくしなって揺れるようになった。キシ、キシ、と竹は鳴った。
ケサラは、ひときわ大きくしなわせて竹を揺すったあと、その反動を利用して、飛んだ。
ケサラの体は、ライナーのような飛び方をして、月の輪熊の一頭にぶつかった。
数秒間、ケサラと月の輪熊は争った。が、勝負はあっけなくついた。
月の輪熊は、ケサラにライナー性の飛球のようにぶつかられたとき、ケサラのあわせた両膝によって後頭部をくだかれていたのだった。
神四郎は、暗闇の剣を抜いた。
二頭の月の輪熊が、左右の両方向から、V字形を描くように、神四郎に迫ってきた。全速力を出しての突進だった。
神四郎は、
タアーッ！
と、気合を発しながら跳びあがり、竹を四、五本、たたき切った。竹は、二頭の月の輪熊の前途をさえぎるように、倒れた。

二頭の月の輪熊は、全速疾走をさまたげられて、一瞬のたじろぎを見せた。
それを神四郎は、見逃さなかった。跳ねて、一頭の月の輪熊に暗闇の剣をたたきつけた。
精魂をこめた一撃だった。
熊の首が前へ折れた。その首をぶらぶらさせたまま、熊は、あらぬ方向へ突進して、竹と衝突した。
それから、二、三度、うろついているようにもがいたあと、力つきて倒れた。
もう一頭の月の輪熊は、太郎に頸筋を噛まれていた。
はじめ、めくらめっぽうに走り、あちこちの竹に頭をぶつけたあと、でんぐりがえし気味に倒れて、二度と起きあがらなかった。
頭上で、ぎゃう、ぎゃ、ぎゃ、ぎゃう、とすさまじい鳴き声とも、身の毛のよだつ叫び声ともつかぬ声がした。
神四郎とまゆみは、同時に上を振りあおいだ。
ケサラも、上を向いた。平然としていたのは、太郎だけであった。
頭上は、夕焼け色に光り輝いていた。
その光輝のなかで、青々とした竹の梢がはげしく揺れていた。
巨大なカラスが、竹の梢にいた。そのカラスが飛んだ。
「――カラス天狗だわ」



まゆみが、熱に浮かされたような声で言った。
「うむ」
神四郎は、うなった。
くちばしのついた顔、人間のようなけもののような四肢、そして、コウモリのものとも鳥のものとも思える翼。カラス天狗は、羽ばたきをしていた。
ぎゃう、ぎゃぎゃ！
カラス天狗が、飛んだ。
一匹だけではなかった。四方八方へ、黒々とした奇怪な姿を、夕焼け色を背景にして、飛び、その飛び方は速くて黒い帯のように見えた。
ぎゃぎゃう、ぎゃぎゃ……
カラス天狗は、数えられないほどの群れになっていた。その群れが、梢と梢を入り乱れて飛び交っていた。
「あぶないっ！」
神四郎は、まゆみを突き飛ばした。
そのあとへ、真一文字にカラス天狗が降ってきた。くちばしを下に向けて、黒い爆弾のように落下してきたのである。
神四郎は、暗闇の剣で、そのカラス天狗をなぎ払っていた。

カラス天狗は、一瞬のうちに消滅した。
地上に落ちているのは、一刀両断にされて息絶えている小さなカラスだった。
「――闇の翁めっ」
神四郎は、飛び交う無数のカラス天狗を、いっとき見渡した。
ケサラが悲鳴をあげた。
カラス天狗のくちばしの直撃を、頭のてっぺんに受けたところだった。
ケサラは、頭を振った。カラス天狗は、カラスになっていた。ケサラは、カラスのくちばしを頭から抜くと、そのカラスを両手でもみつぶした。
そのあと、ふらふらと酔ったようによろけて、竹の一本にしがみついた。
神四郎は、暗闇の剣で、竹を斬りはじめた。
スパン、スパンと快い音を立てて、竹は切れたあと、ほんの短い間をおいてからゆっくりと倒れた。
神四郎は、右へ走り、左へ飛びして竹を斬り続けた。
たちまち、あたりは空間ができたようになった。
カラス天狗たちは、寄りどころを失って上空へ舞いあがった。カラスの姿にもどっていた。
「――術が破れていくわ」
まゆみが、うれしそうに言った。



光り輝いていた空は、急速に輝きを失い、もとの闇の色にもどっていった。
一匹、逃げないカラス天狗がいた。
そのカラス天狗が登っている竹に、太郎が前肢をかけてうなった。
神四郎は、その竹を斬った。竹は、竹槍のようにするどくとがった切口を見せて、ふたつに折れた。
そこへ、ぎゃう、と叫びながら、最後のカラス天狗が落ちてきた。
カラス天狗は、竹の切り口に刺し貫かれていた。
イモ刺しの状態である。
「猿か」
神四郎は、かすれた声でつぶやいた。
猿は、胸を刺し貫かれて、弱々しくもがいている。
「闇の翁の神通力は、破れたぞ。急げ」
神四郎は、山荘へ向かって駆けあがった。
ケサラだけは、竹にしがみついたままだった。
山荘の玄関は、あけ放たれていた。
その玄関から、白い着物を着た女がすっと走り出てきた。
「――神四郎、なにをしているのですか」

よし恵だった。
「母上」
「神四郎、早く黒豹を斬りなさい。これは、悪魔ですよ」
よし恵は、神四郎の右側にきて足を止めた太郎を指差した。
「こいつが」
神四郎は、太郎を一瞥した。
太郎は、牙をむいてうなっていた。
「さあ、お願い」
よし恵は、双眸を光らせて、右手をまわした。
その右手のとおりに、暗闇の剣が動いた。
「その人は、お母さんじゃないわ！」
まゆみが叫んだ。
その叫びの終わらぬうちに、太郎はよし恵に飛びかかっていた。
よし恵は、ぐわう、とおそろしげな声を出して、跳躍した。
見えない糸にひきあげられたような跳躍だった。
太郎は、その足のひとつを右の前肢でひっかけたにすぎなかった。
「闇の翁」



神四郎は、よし恵の顔が醜怪な皺の寄った、双眸だけが炯々と光った老人の顔に変わっているのを、一瞬、見た。
山荘が揺れて、ゆがみ、軒先や壁からまばゆい光彩がほとばしった。その変化に気をとられているうちに、闇の翁は消えていた。
太郎が、玄関のなかへ飛び込んだ。
神四郎が血刀をひっさげて続いた。
まゆみも、駆け込んだ。
太郎は、二階へ通じる階段を駆けあがっていった。神四郎は、太郎の動物の勘にまかせることにして、そのあとを追った。
二階の廊下に、般若の面が浮いていた。
白く光る面だった。
「神四郎」
般若の面が言った。
「……」
神四郎は、黙っていた。
般若は、よし恵の声でしゃべった。
しかし、敵意をこめた声だった。

「わらわをとるか、黒豹をとるか。ここで、はっきりと、お決め！」
般若の面は、宙をただよった。
「……」
神四郎は、暗闇の剣を構えた。
「わらわを殺す気かっ！」
般若の面は、円を描いた。
神四郎は、その面に暗闇の剣を振りおろした。
乾いた木が裂けるような音がした。
般若の面は、ふたつに割れて、床に落ちた。
廊下があかるくなり、そのなかによし恵の姿が浮かびあがった。
「母上」
神四郎は、駆け寄った。
「面が、面がとれたのね」
よし恵は、夢から醒めたように言い、喜びを表した。
「闇の翁は、どこです？」
「うしろに倒れています。神通力を失ったのです。いまは、ただの百三十九歳の老人にもどってしまいました」



よし恵は、脇へ寄った。
廊下に、老人が倒れていた。
神四郎は、一歩前へ出て、暗闇の剣を振りかざした。
「おやめ」
よし恵がとめた。
「そのお方は、間もなく息をひきとります。神通力を使いはたして、寿命が尽きたのです。それに、そのお方の顔を、よくご覧」
「……」
神四郎は、廊下の照明に浮かんでいる闇の翁の顔を、じっと見おろした。
「――わしは、熊爪の翁じゃ」
闇の翁は、かぼそい声を洩らした。
「熊爪の翁？　じゃ、おれの祖父か」
神四郎は、息を呑んだ。
氏神の間の岩の塔に立って、神四郎は、熊爪の翁と話をしたことがある。
そのときに、顔を見ている。いま、真下に息も絶えだえに横たわっている闇の翁は、たしかに熊爪の翁だった。
「これは、どういうことです？」

神四郎は、よし恵に訊いた。

「熊爪の翁と闇の翁が同一人物であることが、シノムラの秘密そのものなのです」

よし恵は、神四郎の顔を見つめながら、重大な秘密を話しだした。……



## エピローグ

――熊爪の翁は、シノムラの本格的なバケコミを提唱し、指導した人間だった。

しかし、十年二十年、五十年百年と経つうちに、熊爪の翁は、たえずふたつの考えのあいだを迷い、悩むようになった。

そのひとつは、完全なるバケコミを行って、シノムラを消滅させることだった。

もうひとつは、バケコミの目的をあくまでも天孫民族系の征服に置いて、シノムラの大義を守り続けることだった。

「――熊爪の翁は、そのふたつのどちらをとるか結論を出せないうちに、人格の分裂を起こしてしまったのです」

「精神分裂の症状を呈したわけですか？」

「そんなふうに、簡単に言えることではないかもしれない。熊爪の翁にとっては、どちらの自分も自分にまぎれもなかったのでしょう。人格の分裂が、体がひとつでありながら、ふたつの人格を生んだのです。神通力を持っておられたことが、父を、おまえにとっては、祖父ですが、熊爪の翁を不幸にしたのです」

よし恵は、たんたんとしゃべった。
熊爪の翁が、右手をふらっとあげた。
「族長」
熊爪の翁は、細い声で呼んだ。
神四郎は、熊爪の翁のそばにうずくまり、その右手をとった。
「卍の家の構成員は、わしの呪縛から解けた。あとは、思うがままに、されるがよい」
その言葉を最後に、熊爪の翁は、息絶えた。
「翁」
神四郎は、その手を強くにぎりしめた。
夜があけそめてから、神四郎たちは、山荘を出た。
竹藪を通ると、ケサラが竹にしがみついたまま、息をひきとっていた。
「――手厚く葬ってやらなければ」
神四郎は、ケサラに合掌した。
よし恵も、まゆみも、それにならった。

山荘を出るとき、大崎へ電話を入れていた。
大崎は、腹心たちを連れて、すぐに駆けつける、と言った。



八木元首相は、そのとき、いっしょに目隠しをして、都下の、どこかの路上で解放することになっている。
八木は、自分がどこに監禁されていたか、永久にわからないままになるだろう。
「――闇の翁の呪縛を離れて、いちばん喜んでいるのは、八木かもしれないわね」
まゆみが、神四郎に語りかけた。
「そうにちがいない。八木は、卍の家のメンバーをまとめて、日本の実質的な支配者になろうとするだろう」
「そうしたら、おまえはどうしますか？」
よし恵が訊いた。
「わかりません。しかし、シノムラを消滅させようと八木はするでしょうし、そうしたら、われわれを探し出そうとする。そのときは、闘います」
神四郎は、そう答えて、大きく深呼吸をした。
まゆみとの平和な生活がはじまる。
しかし、それがいつまで続くかは、わからない。
それでもいい、と思った。
竹の梢が、朝の風に揺れていた。……

# 解説

ぼくは本の解説というものを一度も書いたことがありません。今回がはじめてです。ぼくは評論家でも作家でもなく、さし絵かきで、雑誌などに文章を発表したこともほとんどありません。ですから、解説を書かせてみようなどと考える人が一人もいなかったのは当然のことです。

角川書店から依頼の電話があったとき、「ぼくにですか？」と一応反問はしたものの、志茂田さんの指名ですといわれて、さして意外という気がしなかったのは不思議といえば不思議といえます。志茂田さんなら思いつきそうなことだという気が、ぼくの意識の片隅にあったからかもしれません。といっても、ぼくは志茂田さんと個人的なつきあいがあるわけではありません。仕事の上でも、志茂田さんの小説にさし絵をかく機会はめったにありません。つきあいがないのは志茂田さんだけではなく、長年さし絵をかいていますが、作家とも、編集者とも、また同業の画家とも、いわゆるつきあいというものを、ぼくはまったくいたしません。出版社主催のパーティなどにも、はじめのうちは出席しないと悪いような気がして、たまには顔を出したこともありましたが、そのうち、いっさい出席することをやめてしまいました。ぼくは極端なつきあいぎらいなのです。同類が群れたがるのはぼくには奇習としか思えません。さしさわ



りがありましたらお許しください。ぼくはたぶんビョーキなのでしょう。子供の頃は自閉症でした。友だちもなく、いつも部屋にとじこもって、本を読んだり絵をかいたりしているネクラ少年でした。今でもそうです。少年ではありませんが。

こんなぼくに、どうして志茂田さんは解説を書かせてみようと思ったのでしょう。

読者のみなさんも既にご存じのように、志茂田さんは時々変ったことをする人です。音痴であるにもかかわらず、有名人カラオケ大会でエンターテインメント賞をもらったり、一般公募に応募してファッションモデルになったり、銀座のバーのやとわれママをやってみたり、自分の著書のあとがきで、この本を買わなければ損をするといわんばかりに、自分の作品を賞讃したり、というようなことにくらべれば、ぼくに解説を書かせることぐらい、志茂田さんにとってはごくフツーの思いつきだったのかもしれません。

それにしても、解説など一度も書いたことのないぼくが、軽くひき受けてしまったのはやはりちょっと不思議です。

もしかしたら志茂田さんは、氏の伝奇ロマンに登場する人々のように、実は超能力の持主で、ぼくに向って念波を送っていたのではないでしょうか。そしてぼくの潜在意識がその念波に感応していたのかもしれません。

いずれにしても、ぼくには評論家が書くようなちゃんとした解説は書けるわけがありませんが、作品の解説でなくてもエッセイのようなものでもよろしいという、角川書店の担当の人の

言葉に甘えることにしました。一人の読者として。読者こそ神様ですぞ、などと自己弁護しながら。

さて、といいますか、もともと、といいますか、ぼくは志茂田さんの伝奇小説については喰わずぎらいでありました。喰わなければ味もわからないわけですから、好きもきらいもないわけで、喰わずぎらいという言葉は考えてみればへんな言葉です。どうして喰わなかったかといいますと、格別の理由はありません。何しろ志茂田さんは多作で、しかも作風も多岐にわたっていますから、伝奇ロマン以外の小説もたくさんあるわけで、そちらを先に読んでいるうちに、時間がなくて伝奇ものだけ残っていたというわけです。

ところがある時、ある時というのは昭和六十年つまり去年の八月のことですが、カドカワノベルズで志茂田さんの『禁断の皇子』という本が出ました。サブタイトルは神黙示録1、SF伝奇となっていますが、ぼくはこれを見ないうちに、先に、本文の一ページ目を開いていました。

――AD二〇九八年、日本。

――首相官邸午前零時。

昔の首相官邸は、永田町にあったが、いまは、奥多摩にある。

という、近未来小説風の書き出しが、ぼくの眼をひきつけました。実はぼくは近未来に関する読み物が大好きなのです。そしてぼくは今、青梅市に住んでいるので、奥多摩は、いわばぼくの散策圏内でもあります。といった、まことに単純なきっかけで、読みはじめましたところ、あまりの面白さに途中でやめられなくなり、読みはじめたのが夜なかだったものですから、明け方までかかって一気に読んでしまいました。これに味をしめて、以来、次々と志茂田さんの伝奇ロマンを読みあさるようになりました。



思えば子供の頃から今までに、ずいぶんたくさんの小説を読んできました。小学生の頃に、父の書架にあった、世界大衆文学全集、現代日本文学全集をはじめ、日の出、キングといった大人の雑誌に載っている小説まで、全部読んでしまい、後年、さし絵を職業とするようになってからは、原稿の形で小説を読むのが仕事になりました。しかし、小説というのは米のゴハンと同じで、飽きるということがありません。なかでも、伝奇ロマンは、波瀾万丈、奇想天外、非日常の世界にのめりこませてくれるという点では、これほどたのしい読み物は他にないのではないでしょうか。

ぼくなど、もう人生の持ち時間が少ないですから、たのしまなきゃ損だと思って読むのです。若い人たちだって、持ち時間が限られているのは同じことです。十年と五十年の差など、永劫の宇宙の時に比較すれば、いずれもほんの一瞬に過ぎません。

それはさておき、昔々、日本の創世紀、太陽の女神である天照大神の孫、邇邇芸命が、地上に秩序をうち立てるために天から派遣され、九州の東南部、日向に天降り、その子孫の一人が神武天皇である、という神話は、粉飾された幻想的物語であって、事実は、大陸から朝鮮海峡

を渡ってきた人たちが、原住民を討伐し服従させて、日本列島の支配権を握った、というのが真相でありました。

しかし、すべての原住民が屈服したわけではありません。隷属をきらい、山中にかくれ棲み、政権をくつがえして祖先の恨みをはらすことを宿願とし、漂泊の民となって、はるかな歴史のかなたより、民主主義の現代に至るまで、連綿と生きぬいてきた少数の部族があります。

それが神州一族なのです。すなわち、先史時代から日本列島に住んでいた、原日本人の末裔たちです。

〝幻の神州一族〟

この小説の舞台は現代です。ぼくたちが生きている、今、この時代に、超能力者や猿人たちが、それも一人や二人ではなく集団で、縦横無尽に入り乱れ、血湧き肉躍る大活躍をします。剣あり、恋あり、忍法あり、そして、現存の政治家や、実業家や、教育者等も登場し、物語はダイナミックに、壮大なスケールで展開します。

解説からお読みになっているみなさん。くわしくは本文をどうぞ。

安岡旦

幻の神州一族
志茂田景樹
角川文庫 6327

昭和六十一年三月二十五日 初版発行
発行者——角川春樹
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話 編集部(〇三)二三八—八四五一
営業部(〇三)二三八—八五二一
〒一〇二 振替東京③一九五二〇八
印刷所——新興印刷 製本所——文宝堂製本
装幀者——杉浦康平
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。
Printed in Japan

ISBN4-04-159906-7 C0193

# 角川文庫発刊に際して

角川源義

第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあった。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎すためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日



ラガナ一家のニッポン日記　全二冊　ドメニコ・ラガナ
別れの予感　森瑤子
風物語　森瑤子
愛の予感　森瑤子
一人乗り紙ひこうき　岸田今日子
日本の子守唄　松永伍一
ブギウギ脱どん底・ストーリー　宇崎竜童
まだ見ぬあなた　石浜みかる
まいにちクローガネ　黒鉄ヒロシ
ことばの豆辞典　既刊五冊　三井銀行ことばの豆辞典編集室編
炎の指揮官　長島が逆転する日　土井正三監修
ヨーロッパ・古城の旅　井上宗和
戦国武将と城　井上宗和
日本の名城・古城　井上宗和
ドキュメント新聞記者　読売新聞大阪社会部
ある中学生の死　読売新聞大阪社会部
安宅クルーの再会　読売新聞大阪社会部
社会部記者OL殺人事件　読売新聞大阪社会部
レポート
**新聞記者が語りつぐ戦争**
1 終戦前夜　読売新聞大阪社会部
2 戦場になった島　読売新聞大阪社会部
3 特攻　読売新聞大阪社会部
4 中国孤児　読売新聞大阪社会部
5 中国慰霊　読売新聞大阪社会部
6 中国侵略　読売新聞大阪社会部
**記者の窓から**
1 大きな車どけてちょうだい　読売新聞大阪社会部
2 走れ村の子負けるなよ　読売新聞大阪社会部
3 そんなにかわいく笑わないで　読売新聞大阪社会部
素敵な朝帰り　水上洋子
素敵な三角関係　水上洋子
毎日、恋のはしご　水上洋子
バイバイ、エンジェル　笠井潔
アポカリプス殺人事件　笠井潔
マンハッタン自殺未遂常習犯　草間彌生
ぼく英語できちゃった　飯塚成彦
チューサン階級の冒険　嵐山光三郎
幻想としての経済　栗本慎一郎
東京の血は、どおーんと騒ぐ　栗本慎一郎
出社に及ばず　渡辺一雄
消えた文明99の謎　神部武宣
はみだし社員大奮戦　大下英治
医者のないしょ話全二冊　志賀貢
男と女のないしょ話　志賀貢
ロコ志賀のおもしろ健康診断　志賀貢
北国医者のないしょ話　志賀貢
大人のないしょ話　志賀貢
ホースケ麻雀大会　福地泡介
ホースケ千夜一夜　福地泡介
サムライその青春　横内仁司
荒垣秀雄ザ・コラム天の巻　荒垣秀雄
荒垣秀雄ザ・コラム声の巻　荒垣秀雄
荒垣秀雄ザ・コラム人の巻　荒垣秀雄
荒垣秀雄ザ・コラム語の巻　荒垣秀雄
異形の地図　阿刀田高
まじめ半分　阿刀田高
ゴッドマジンガー　既刊十冊　永井豪原作
おくのほそ道をたどる　全二冊　井本農一
ルンルン症候群　林真理子
花より結婚きびダンゴ　林真理子
街角に投げキッス　林真理子
ルージュの伝言　松任谷由実
ことばの風物詩　槌田満文

薬師丸ひろ子　全三冊　撮影　小島由起夫
フォトメモワール
アメリカン・マラソン　筑紫　哲也
シナリオ家族ゲーム　原作　本間　洋平　脚本　森田　芳光
ああ子育て戦争　矢崎　藍
料理ぎらいの料理の本　今田　美奈子
おかしなお菓子　今田　美奈子
悲しき熱帯　村上　龍
映画渡世　天の巻　マキノ　雅裕
映画渡世　地の巻　マキノ　雅裕
修羅の人　青山　光二
札師　青山　光二
葉山海岸通り　田中　康夫
恋愛自由自在　田中　康夫
素敵なダイナマイトスキャンダル　末井　昭
きなきな族からの脱出　和田　誠
おひつじ座の愛　ミラ・アストロジャーズ
おうし座の愛　ミラ・アストロジャーズ
ふたご座の愛　ミラ・アストロジャーズ
かに座の愛　ミラ・アストロジャーズ
しし座の愛　ミラ・アストロジャーズ
おとめ座の愛　ミラ・アストロジャーズ
てんびん座の愛　ミラ・アストロジャーズ
さそり座の愛　ミラ・アストロジャーズ
いて座の愛　ミラ・アストロジャーズ
やぎ座の愛　ミラ・アストロジャーズ
みずがめ座の愛　ミラ・アストロジャーズ
うお座の愛　ミラ・アストロジャーズ

**カドカワフィルムストーリー**

愛情物語　角川書店編
メイン・テーマ　角川書店編
時をかける少女　角川書店編
探偵物語　角川書店編
Wの悲劇　角川書店編
天国にいちばん近い島　角川書店編
ボビーに首ったけ　角川書店編
早春物語　角川書店編
本当のことを言おうか　風間　杜夫
この子の七つのお祝いに　斎藤　澪
赤いランドセル　斎藤　澪
時刻表2万キロ　宮脇　俊三
台湾鉄路千公里　宮脇　俊三
鬼火島伝説　志茂田　景樹
新・犬神伝説　志茂田　景樹
騎馬軍団伝説　志茂田　景樹
滅亡師1　魔獣の断頭台　志茂田　景樹
ひとめあなたに…　新井　素子
やくざ情報員　光藤　亘
ぼくらの七日間戦争　宗田　理

**石井好子と水森亜土の料理の絵本**

卵とわたし　水石　森井　亜好　土子
ご飯とわたし　水石　森井　亜好　土子
サラダとわたし　水石　森井　亜好　土子
ポテトとわたし　水石　森井　亜好　土子
パーク・アベニューの孤独　山川　健一
壜の中のメッセージ　山川　健一
星とレゲエの島　山川　健一
時の魔法使い　原田　知世
ニャロメのおもしろ数学教室　赤塚　不二夫
ニャロメのおもしろ性教室　赤塚　不二夫
ニャロメのおもしろ宇宙論　赤塚　不二夫
ニャロメのおもしろ生命科学教室　赤塚　不二夫
後鳥羽伝説殺人事件　内田　康夫
本因坊殺人事件　内田　康夫

## 角川文庫　最新刊

栗本　薫　死はやさしく奪う　ジャズマンをいざなう死のメロディー。長編ハード・ボイルド　380円
西村京太郎　怖ろしい夜　様々な顔を持つ夜をテーマにしたオリジナル短編集。　380円
村松友視　炎のカルテット　40歳になった荒木と女たち4人。サスペンス調ラブ・アフェアー。　490円
司城志朗　誰かが悲劇　〝猫が描いた絵〟とKGBとのアヤシイ関係。書下し長編。　380円
佐野　洋　紙幣の散歩　派手な殺しも凄惨な暴力もありません。本物の推理小説。　460円
林　真理子　星影のステラ　ジャズの名曲に乗せて、スウィングさせた、きらめきの名作。　260円
寺田憲史　バビ・ストックI　果てしなき標的　巨大な悪の帝国の前に、バビと仲間たちは…！　ビデオ化作品。　460円
久保田二郎　そして天使は歌う　アメリカのすべてがわかる。本物志向の人のための遊び学入門。　380円
レオノー・フライシャー　竹内佳子訳　アグネス　―神の小羊―　修道院内で起きた嬰児殺しの陰に隠されたものは？　380円
ジェームズ・グレアム　安達昭雄訳　ラス・カナイの要塞　断崖上の要塞に挑め！　J・ヒギンズの別名の傑作冒険小説。　420円

## 角川文庫　最新刊

| | | | |
|---|---|---|---|
| 赤川次郎 | おやすみ、テディ・ベア 上下 | 爆弾入りの熊のぬいぐるみ、次は誰の手に？ 長編サスペンス | 各340円 |
| 笹沢左保 | 蜜の殺人者 | 女性心理の綾と死の恐怖を巧みに描く傑作ミステリー。 | 460円 |
| 森瑤子 | 女ざかり | 女たちのひたむきな自立が始まった。ちょっと辛口、愛の長編。 | 380円 |
| 岬兄悟 | あたしがママよ | あたし、ゴジラの赤ちゃんをみごもってしまったんです…!? | 420円 |
| 曾野綾子 | テニス・コート | 麻薬による精神の変化を通じ、幸福とは何かを追求した長編。 | 380円 |
| 三國一朗<br>井田麟太郎 編 | 昭和史探訪 6<br>戦後30年 | いま、昭和の60年をふりかえる―異色の同時代史、好評完結！ | 460円 |
| 三井銀行ことばの豆辞典編集室 編 | ことばの豆辞典<br>第6集 | ハッとする魅力がいっぱい。明日のあなたは会話の王様。 | 340円 |
| 土屋耕一 回文集 | 軽い機敏な仔猫<br>何匹いるか | この書名を下から読むと……やや！ 同じ文。幻の回文傑作集。 | 260円 |
| 伴野朗 | 野獣の罠 | はみ出し記者の無頼な日々を叙情豊かに描く連作長編。 | 380円 |
| ルース・レンデル<br>深町眞理子 訳 | 指に傷のある女 | 殺人現場に指の跡を残した幻の女とは？ レンデル、最新長編。 | 460円 |